

資料

(平成十五年十月)

第四十八回「合宿教室」(富士)感想文集

日本人としての自覚をもとめて

社団法人 国民文化研究会

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠 <sup>1</sup> ・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志

第四十八回 “合宿教室（富士）” 全参加者の感想文と短歌詠草



と き 平成十五年八月七日（木）から十一日（月）まで四泊五日間

ところ 静岡県御殿場市「富士のさと 国立中央青年の家」

参加総数 一七一名

目 次

“はしがき”に代へて	.....	理事長・上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳	.....		5
“合宿教室”の日程表（四泊五日）	.....		6
第48回“合宿教室”のあらまし	.....		7
走り書きの“感想文”と第二回目の“短歌詠草”	.....	参加者全員	27
短歌詠草	.....	参加者全員	91
あとがき	.....		112
カメラ・レポート30枚（29ページから87ページの左頁に掲載）	.....		

# “はしがき”に代へて

本会理事長・上村和男

昭和三十一年（一九五六）に鹿児島県の霧島神宮で第一回が開催されて以来、今年で第四十八回を迎へた「合宿教室」は、八月七日〜十一日の四泊五日間を静岡県御殿場にある「富士のさと国立中央青年の家」で開催された。

この施設は、今上陛下の御成婚を記念して標高七〇〇米の富士山麓に建設された「青年の家」第一号といふ由緒ある施設である。

富士山を間近に仰ぐこの「中央青年の家」では、朝の澄み切った空気の中で、国旗掲揚と国歌「君が代」を斉唱し、利用団体全員の参加のもとに体操が行なはれ、研修の一日が始まるのが通例である。しかし今年には台風の影響で雨の日が多く、朝日に映ゆる赤富士を仰ぎ見ながらの朝の集ひは少なかった。参加者にとっては心残りであったが、都会生活から解放されて、富士山の裾野に抱かれた大自然の中での研修は、レクリエーションをはじめ短歌創作、古典輪読等が活発に展開された。特に外来講師による情熱の籠ったご講義では、学校では聞いたこともなかった我が国の歴史・文化・伝統の継続性の大切さが心に刻みこまれ、班別に分れての少人数による討論が行なわれた。ここでは知識を披瀝するのではなく、友の話す言葉に真剣に心を傾けることで、その言葉の真意を汲み取る心の交流がなされ“信”の世界が開かれてゆくのであった。また、友の創作した短歌を友の気持ちになつてお互が批評し合ひ文法や語句の過誤を正してゆく中に、自然に旧知の如き心の交流が始まり友情が深まってゆく姿がうかがへた。古典の輪読においても先人の言葉をお互に声を出して読みゆく中に友の声に耳を傾けながら先人の心に近づくと努力をし、これこそ読書の真の姿であることを学んだ。

日程が進むに従ひ、このやうな経験を経てこの合宿の目指すものが生活実践の中で体験的に把へられていった。こゝでは、年齢の差も、学問の深淺も、大学の社会的優劣の差も、上級生・下級生の差も、さらに職域の差も、社会的経験の差も、要するに社会生活における外的差別には価値をおかず、お互ひ、一人の人間として“まごころ”を披瀝し合ふ経験が積まれていった。そして日本民族が世界の平和と人類の幸福に寄与する道が、その体験から明るく指向されてゆくのであった。

戦後教育は、占領政策による自虐史観を青年学生に刷り込み、祖国を憶念する気持ちも、愛する心をも失はせ、共同体意識を

喪失させた。さらに個の尊厳こそが民主主義の根幹であり、他との関連において自由であり平等であることが強調され、祖先との繋りをも断絶してしまひ、「国家意識」を喪失させ、インターナショナルな人間を育成することを意図して来たやうに思へる。だから、心ある青年学生は、現在の教育は、実は、大切なものを自分達に教へてくれないのではないかといふことに気づきはじめてゐる。しかし日教組教育により常識化された「国家意識」の喪失は中々止まらず残滓としてはびこり続けてゐる。これらを取り除き、真の日本人の現はれることを願ひつ、お招きしたのが第二日目の講師、日本政策センター所長の伊藤哲夫先生である。先生は、日教組教育の弊害を批判され「戦後の日本人は嚴肅な歴史事実を受けとめる言葉を教へられてゐない。全て、反戦イデオロギーに流れてしまひ、自国を肯定し、大切にしたいといふ気持がなければ、歴史や世界を見る大局観を形作ることはできない。我々一人一人の力は小さいかも知れないが、国を背負ふ志をもつて頑張つていかうではないですか」と強く訴へられた。

第三日目の講師は、明星大学教授・東京大学名誉教授の小堀桂一郎先生で「日本人の生き方―和歌の伝統と日本文化―」と題する御講義の中で「日本人の生き方はや、観念的であるので和歌を通じてその人間性を具象化してみたい」と、日本の和歌の理念としての古今集の仮名序に即し古代歌謡を紹介されて、日本書紀、古事記のまほろば、国忍びの歌、故郷を思ふ歌等の変遷を辿られ、文字なき時代の社会生活の意思伝達が短歌形式に定まるに至つた経緯と、古代の和歌が後の日本人の精神生活を形式してゆく過程を述べられ、「他の多くの古典の名歌とともに、現代の日本人の生き方の中に和歌の伝統がつかつて生き続けてゐる」と語られた。最後に「正しく美しい言葉は正しく美しい思想を育む。言葉の習得を通じて正しく美しい人生が皆様の前に開かれてゐる」と言葉の大切さを述べられ、現在の言葉の乱れに憂慮されてゐる心が伝はつて来るすばらしい講義であつた。

伊藤哲夫・小堀桂一郎両先生は、ご多忙の中を講義のみならず、班別討論にも時間を惜しんで同席された。たしかに班の雰囲気、先生方の心をお引き留めするだけの真摯な気魄にた、へられてゐたことも事実であつたが、それにもまして、先生方の青年学生の心情の開發を願ふ一途なお気持がさうさせたと思はれるのである。

現下の学校教育における心の荒廃は救ひやうのない状況に至つてゐる。その根本原因の一つである占領政策の落し子の「教育基本法」の改正に着手すべき絶好の秋なのに、何故、審議のみで、改正することを明示しないのか、まことに残念である。改正

しないで放置しておけば日本人の道義は地に墜ちてしまふことは火を見るより明らかである。

対外的には「拉致問題」、近隣諸国への「謝罪外交」、「靖国神社の首相参拜」は我が国にとって最も大切な重要案件であるのに、一向に解決される動きが見られない。独立国としてあるまじき我が国の姿ではなからうか。普通の国と同じやうに軍隊を持ち、我が国への侵害に対しては毅然とした態度で臨むことを内外に示し、真の意味での「主権国家」になるために、速やかに憲法を改正すべきと思ふ。

なほ、こゝに編した「感想文集」は、参加者全員が帰り際の走り書きで記したため意を尽せないところもあるが、今、日本がただならぬ行き詰り状態に当面してゐる中で、精魂を傾けて過ごした合宿での経験を書きとめてくれたものである。紙面の都合上全文をそのまま、載せ得ないことは残念だが、なにとぞご容赦いただきたい。

この文集全体の編集に、十余名の会員（編集後記に記載）が休日や終業後の時間をさいて取組んでくれた。またこの合宿を運営して下さった運営委員長の折田豊生さんをはじめ運営委員の方々、指揮班長の岡山英一さんをはじめ指揮班の方々の御苦勞にも心から感謝申し上げます。

また最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当り、本年もまた、朝野からお寄せ下さった得難い御支援の数々に対し、会員一同に代り、心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成十六年）の「第四十九回合宿教室」は八月五日（木）～八月九日（月）までの四泊五日間「国立阿蘇青年の家」で開催することが決定。「合宿運営委員長」には、福岡県立香住丘高校教諭酒村聰一郎氏を煩はすことになりました。改めて会員各位に格段のご協力をよろしく願ひ申し上げます。



第48回全国学生青年合宿教室（平成15年8／7～8／11）於「富士のさと 国立中央青年の家」

参加者

（学生班 三十五大学）（洋数字は参加学生数）

北海道医療大 1 東北女子大 4 東北女子短大 5 東北大 1 上越教育大 1

筑波大 2 亜細亜大 2 亜細亜短大 1 青山学院大 1 学習院大 1 國學院大 1

上智大 1 拓殖短大 1 大正大 1 中央大 1 東京大 1 東京理科大 1

東京女子大 1 獨協大 1 明治大 1 明治短大 1 明星大 4 早稲田大 4

防衛大 2 名古屋商科大 1 皇學館大 1 京都大 1 龍谷大 1 大阪芸術大 1

九州大 2 九州工大 6 西南学院大 1 福岡大 1 佐賀大 2 熊本学園大 1

高校卒 1

計 五十九名（うち女子十七名）

（社会人、教員参加者） 二十一名（うち女子四名）

（招聘講師） 二名

（国民文化研究会） 七十八名

（神職） 一名

（事務局） 八名

（写真） 一名

（見学参加者） 一名

総計 一七二名

㈫国民文化研究会・大学教官有志協議会 主催  
**第48回（平成15年）“全国学生青年合宿教室” 日程表**

	8月7日（木）	8月8日（金）	8月9日（土）	8月10日（日）	8月11日（月）
6:30		（起床） 洗面・清掃 （7:00）	（起床） 洗面・清掃 （7:00）	（起床） 洗面・清掃 （7:00）	（起床） 洗面・清掃 （7:00）
7:00		朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食 （8:30）	朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食 （8:30）	朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食 （8:30）	朝の集ひ （国旗掲揚・国歌斉唱、体操） 班別散策 朝食 （8:30）
8:00		短歌創作導入講義 熊本県立宇土高校教諭 久保田 真 先生 （9:30）	講義 「日本人の生き方」 明星大学教授・東京大学名誉教授 小堀 桂一郎 先生 （10:00）	講義 「甦る歴史のいのち」 福岡県立太宰府高校教諭 占部 賢志 先生 （10:00）	清掃 （9:30） 合宿を顧みて 国民文化研究会会長 小田村四郎氏 合宿運営委員長 折田 豊生氏 （10:00）
9:00		レクリエーション	質疑応答 （10:30）		
10:00		箱短歌 （昼神創社参拝） 制作	班別研修 （12:00）	班別研修 （12:00）	参加者による 全体感想自由発表 （11:00） 感想文執筆及び 第二回短歌創作 （12:00）
11:00			昼食 （1:00） 創作短歌全体批評 戸田建設㈱開発課長 青山 直幸 先生 （2:00）	野外炊飯 （1:00） 野外活動	閉会式 （挨拶）国民文化研究会副理事長 磯貝 保博 氏 （1:00） 昼食 解 散
12:00					
1:00	随時受付				
2:00	開会式 （挨拶）国民文化研究会理事長 上村 和男 氏 オリエンテーション （合宿趣旨説明） 合宿運営委員長 折田 豊生氏 （諸注意伝達） 合宿指揮班長 岡山 英一氏 （4:30）	講義 「内外情勢を見る眼をどう養ふか」 日本政策研究センター所長 伊藤 哲夫 先生 （3:30） 質疑応答 （4:00）	班別短歌相互批評	講話 国民文化研究会常務理事 長内 俊平 先生 （3:00）	
3:00		班別自己紹介 事務連絡打ち合せ （5:30）	班別研修 （5:30）	班別研修 （5:00） 地区別懇談 （5:30）	
4:00		夕食 入浴 休憩 （短歌提出）	夕食 入浴 休憩 （短歌提出）	夕食 入浴 休憩	
5:00					
6:00					
7:00					
8:00	合宿導入講義 「戦後思想の超克」 福岡県立香住丘高校教諭 酒村 聡一郎 先生 （9:00）	輪読導入講義 「古典輪読の意義」 国民文化研究会副理事長 小柳 陽太郎 先生 （9:00）	講話 国民文化研究会副会長 宝辺 正久 先生 （8:30） （懇親会の説明） 小田原市立矢野小学校長 若越豊雄氏 （9:00） 慰霊祭 （9:30）	体験発表 朝ハウインターナショナル 桑木 康宏 氏 企画デザイン工房Beatup 諏訪田尚子 氏 （8:30） 夜の集ひ （10:00） 班別懇談 （10:30）	
9:00		班別研修	班別懇談		
10:00					
11:00	就床 （11:00） 消灯	就床 （11:00） 消灯	就床 （11:00） 消灯	就床 （11:00） 消灯	

# 第四十八回「合宿教室」のあらまし

## 第一日目

(八月七日・木曜日)

第四十八回全国学生青年合宿教室は、静岡県御殿場市「富士のさと国立中央青年の家」において開催された。ここでの開催は三度目である。霊峰富士の雄大な姿を間近に仰ぎ、木々の緑に囲まれた素晴らしい環境のもとで、四泊五日の合宿教室はスタートした。北は北海道から南は九州に至る全国各地から学生・社会人が次々と参集した。受付を各自済ませ宿泊棟の各班室に入り、初めて顔を合はせる班員たちと挨拶を交はして、ただちに開会式に臨んだ。

## 開会式

明治大学理工学部二年の小柳雄平君の開会宣言で始った。主催者を代表して本会の上村和男理事長は「正しく事態を認識する力が今の日本には欠けてゐる。それは学問の歪みから来てゐる。例へば北朝鮮の言動であるが、これまで事態を正しく捉へてきただらうか。正しい判断からどのやうに接するかが決まる。正しい判断力を養ふ本当の力のつく学問をしよう」と参加者に呼びかけた。続いて、参加者を代表して九州工業大学三年の多賀祐之介君は「この合宿は日本人として、ひいては人間として生きていく自分たちにとってとても大事なことを伝へようとしてゐる。僕たちはそこから一つでも多くのきっかけを把んで持ち帰り、

自ら育てていくことが大切だと思ふ」と参加の決意を語った。

## 合宿導入講義 「戦後思想の超克」――閉ざされた言語空間の中で――

福岡県立香住丘高校教諭 酒村 聰一郎 先生



先生はまづ、「日頃、高校生と接して感じるのは、『自信を失った大人社会に対する不信感』と『公に奉ずる心の欠如』である」と指摘された。「それらの背景にあるのは何かを考へていくと、昭和二十年から七年間に互つて実施されたGHQ（連合国軍総司令部）による占領政策に辿り着く」と問題提起をされ、「占領政策の中でも検閲による言論統制は最も過酷で、実に巧妙なやり方であった。昭和二十一年に公布された日本国憲法には、表現の自由と通信の秘密の保障、検閲の禁止が謳はれてゐるが、その裏ではGHQにより、私信は開封され、電話は盗聴されてゐた。新聞・出版物等は事前（のちに事後）検閲され、その上検閲してゐる事実そのものが検閲の対象になつてゐた」と、その実態を詳細に説明された。

「その結果、大東亜戦争に対しては徹底した贖罪意識を植え付けられ、国家意識は軍国主義に結びつく『悪』と断定され、わが国の伝統文化の根幹をなす、祖先の霊を祀り祖先と心を通はす習俗までもが根絶やしにされようとした。国民として公に奉ずるとは何か、国家の命運とともにある個人の生き方とは何かについて、もう一度考へ直さなければならぬ」と痛憤を込めて語られた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも続けて行はれた。お互ひ初対面のせるか、初めのうちは緊張して意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、

班員相互の心の交流が深められていった。

第二日目

(八月八日・金曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行はれた。折しも接近中の台風による雨で、初日はこの合同の集ひは中止され、当合宿参加者は体育館での独自の朝の集ひ挙行となった。国旗掲揚の後体操を行って、一日の研修を新たに迎へた。

なほ、この朝の集ひの後、合宿期間中毎朝、既にプリントで配布されていた明治天皇御製につき、拝誦と紹介が行はれた。紹介された御製は次の通りである。

明治天皇御製

(八月八日)

をりにふれたる

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも (明治四十五年)

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり (明治四十一年)

(八月九日)

学問

事しげき世にたたぬまに人は皆まなびの道に励めとぞ思ふ (明治三十七年)

蟲聲

さまざまの蟲のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは (明治四十四年)

(八月十日)

誠

いかならむ時にあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ (明治三十九年)

日

さしのぼる朝日のごとくさはやかにたまほしきはころなりけり (明治四十二年)

(八月十一日)

友

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき (明治三十六年)

をりにふれたる

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり (明治四十五年)

### 短歌創作導入講義

熊本県立宇土高校教諭

久保田

真 先生



先生は、高校で生徒達に短歌を創作させた体験からお話になられた。「運動会が終わった後クラスの生徒が創った歌を集巻にして同僚や父兄に紹介した処、思ひもかけない反響の広がりには驚かされた。良い歌は人の心を打つことをあらためて知らされた」と感慨深く語られた。そして先人の歌をいくつか紹介する中で「社会的地位に関係無く、短歌の世界では人間としての『心』の内容如何だけが評価される。歴史上の人物のまごころはその歌に表現されてゐる。歌を詠み習ふことはわが国の歴史を学ぶ道にも通じてゐる」と、創作上の留意点に触れつつ短歌の学問的意義を力強く示された。

講義後、心待ちにしてゐたレクリエーションの時間となった。あいにくの台風で待望の富士登山は中止となり、バスに分乗し箱根神社に向つた。雨にけぶる神社は鎌倉時代からの杉の大樹に囲まれ、散策するものに登山とは別の意味での深い印象を与へた。合宿地に戻つた参加者は、散策の折、又それまでの日程での心象を定着すべく、短歌創作に余念がなかつたが、中でも多くの人がこの箱根神社での情景を取り上げてゐたことであつた。

### 講義 「内外情勢をみる目をどう養ふか」

日本政策研究センター所長 伊藤 哲夫 先生



先生は、まづ、日教組の平和教育を取り上げられ、「戦争の悲惨さのみを強調して今の平和がどう成り立ってゐるのかに全く顧慮せず、脱北者や中国に侵略されてゐるチベット民族の悲惨な現実には目をふさいでゐる」とその歪みを強く批判された。

続いて拉致問題に話を移され、「国交正常化を急ぐ政治家の姿勢は、異常な功名心とマスコミへの媚態によるものだ。拉致問題を無視し続けた外務省とマスコミに共通するのは、日本が悪いことをしてゐないはずがないから仕方がないといふ恐るべき自虐意識・贖罪意識である。彼らはいはば憲法前文を実践してゐる。諸外国は平和愛好国ばかりであるといふ憲法の観念が優先し、中国や北朝鮮の軍事力増強の現実を見ようとする。これでは世界の情勢を正しく捉へられるはずがない」と喝破された。

さらに、先生が知覧の特攻隊記念館を訪ねられた際、観光客が口々に「可哀相に。戦争はしちゃいけないね」と話す言葉に違和感を感じた御体験を話された。「戦後の日本人は厳粛な歴史事実を受け止める言葉を教へられてゐない。全て反戦イデオロ

ギーに流してしまひ、人間として見るべきものが見えなくなつてゐる。自国を肯定し、大切にしたいといふ気持ちが必要ならば歴史や世界を見る大局観を形づくることはできない」と述べられた。

最後に、愛国心と誇りを持ち、大局観を失はず、堂々と意志を貫いた吉田茂と岸信介の生き方を紹介された後、「我々一人一人の力は小さいかもしれないが、国を背負ふ志を持つて頑張つていかうではないですか」と強く訴へられ御講義を終へられた。

### 輪読導入講義 「古典輪読の意義」——吉田松陰を中心に——

元九州造形短大教授 小柳 陽太郎 先生



先生は、「教育が悪い」「道徳教育がなされてゐない」と一般に言はれてゐるが、おとなに道徳を教へようとする意欲が欠けてゐるのではないかとまづ問題を提起された。論語、小林秀雄、吉田松陰の言葉を引かれつつ「古典はいはゆる古文ではない。道徳は結局のところ感動だ。感動をともしながら読んだといふ思ひが人生を豊かにする」と、古典輪読の意義を語られた。

論語の「朋あり遠方より来る。また樂しからずや」の「朋」とは「深い人生を学問を通じてともに味はへる友のことである。一つ一つの言葉を掘りさげながら読むとともに、言葉の調べを大切にしたい」と強調された。

続いて吉田松陰の遺文「野山獄囚名録叙論」を読まれ、文章のリズムと美しさを強調された。久坂玄瑞の手紙に対する松陰の返書「久坂生の文を評す」を懇切な解釈をまじへながら「事を論ずるには、當に己れの地、己れの身より見を起すべし」といふ箇所に留意すべしと語られた。「杉蔵を送る叙」では、「天下は大物なり。一朝憤激の能く動かす所に非ず。其れ唯積誠之を動かし、然る後動くあるのみ」といふ言葉に関連し、「松陰の溢るるばかりの氣迫と求める姿勢の厳しさを学んでほしい」と述べられて講義を結ばれた。

講義後参加者は、各班に分かれて輪読研修を行った。小柳先生の御講義を振り返りながら、紹介された論語や吉田松陰の文章を皆で声に出して読み味はついていた。

第三日目

(八月九日・土曜日)

講義 「日本人の生き方」——和歌の伝統と日本文化——

明星大学教授・東京大学名誉教授 小堀桂一郎 先生



先生はまづ『古今集』仮名序に即し古代歌謡の変遷を辿られ、文字なき時代の社会生活の意思伝達が短歌形式に定まるに至った経緯を語られた。次に、古代の和歌が後の日本人の精神生活に連続してゆく脈絡を「歌で呼びかけ歌で応へる『筑波の道』は倭建命と翁との歌の応答に源を発してゐる。世に例を見ない日本人特有の望郷の心の原形は『思国歌』くしのびうたに辿ることが出来る。また、軍団の無事の生還と人の長命を願ふ心は『一つ松』の歌や有間皇子の歌、そして宗良親王の歌に源がある」と語られた。そして「幕末の孝明天皇と草莽の臣宮部鼎蔵との間の唱和歌の源流は、南朝の北畠親房、宗良親王の天皇への奉答歌に求められる。桜に因む宗良親王の奉答歌が六百年余りの歳月を経て昭和十六年真珠湾攻撃の際の特殊潜航艇乗員古野繁貫少佐の遺詠に蘇つてゐる」と具体例を挙げつつ述べられた。

そして先生は「かうした残された言葉を通しての子孫と祖先との対話は、危機の時代に現れるものだが、実は日常ごく普通生活の中にも生きてゐる。『古今集』の『秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる』といふ立秋に因む歌は、

日本の風土に於ける大変微妙な季節の推移と、その微妙さに対応して人間の方でも実に精妙な観察を働かせて感情生活を営んできたことを、私達に教へてくれる。このやうに他の多くの古典の名歌とともに、現代の日本人の生き方の中に和歌の伝統がつかうて生き続けてゐる」と述べられた。最後に「正しく美しい言葉は正しく美しい思想を育む。言葉の習得を通じて正しく美しい人生が、皆様の前に開かれてゐる」と述べられ御講義を終へられた。

### 創作短歌全体批評

戸田建設(株)開発課長 青山直幸 先生



先生は「短歌とは個人の芸術ではなく、皆で心を通はせ高め合つていく国民芸術である」と前置きされた後、全体批評に移られた。各班から一、二首を選び作者の気持ちを推し量りながら丁寧に添削してゆかれた。「感動したことを具体的に詠み込んでいくことが大切で、自分の口から自然に出てくる言葉を整へていけば良い短歌ができる」と話され、御講義は和やかな雰囲気の中で進んだ。そしてこの後に予定されてゐる班別の相互批評について、「お互ひが作者と同じ立場に立ち、全員で努力して詠者の気持ちに添つた的確な表現を探すことで相互に心と心を繋ぐことができる」と述べられた。

### 短歌相互批評

全体批評の後班別短歌相互批評が行はれた。一首の歌に作者の心を偲び、不明点は確認しつつ作者の感動に適ふ表現を探す場である。初めて短歌を創作したといふ人も共に、参考作を披露し合ひ研修が進むにつれ、班員相互の心は通ひ始め、心とむ場が現出した。心楽しきひとときであった。

「一隅を照らす」——合宿教室で学んだことをどう生かすか——

住友電装㈱生産技術部長

布瀬 雅義 先生



社会人参加を対象に行はれたこの講話で先生は、「合宿での学びを今後どう生かせばよいか」について体験を交えて話された。先生は、ご自分の小学生の娘に配られた建国記念の日のプリントがあまりに偏向してゐることを学校に抗議したことや、国歌斉唱がまともに行はれてゐなかつた小学校の卒業式で国歌を一人起立して歌った体験を通して、「一人からでも地域の教育を是正してゆくことができる」と述べられた。そして「一燈照隅、万燈照国」といふ言葉を紹介され、各々が地元で国の一隅を照らす燈火とならうと呼びかけられた。

「命を捨てて」——昭和の青春・萬代の功——

㈱宝辺商店取締役会長

宝辺 正久 先生



先生はこの「命を捨てて」といふ言葉には、強い決意があると語られた。「命を捨ててでも国のために尽す、これが自分達が生きた昭和といふ時代の青春であり、このような青春が確かにあったといふことを若い皆さんもよくよく考へてほしい」と語られた。「世間では、祖父父母の時代の戦争を他人事のやうに否定する風潮がある。何故かつての青春をありのままに伝へようとしないのだろうか」と、戦歿した親友のお名前を挙げ、その面影を追ひながら語られた。

## 慰霊祭

慰霊祭に先立ち、岩越豊雄理事によつて慰霊祭の意義と祭の次第、心構へについて説明がなされた。

続いて生憎の雨天のため齋庭を屋内にしつらへ慰霊祭が厳修された。長内俊平常務理事が三井甲之先生詠の「ますらをのななきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の和歌を朗詠。次いで今林賢郁副理事長による御製拝誦、山内健生常務理事による祭文の奏上の後、上村和男理事長の拝礼に続いて折田豊生合宿運営委員長に合はせ参加者一同が拝礼した。その後「海ゆかば」を斉唱して、滞りなく終了した。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

## 祭文

霊峰富士の麓なるここ御殿場の地にて開かれし 第四十八回全国学生青年合宿教室に集ひし我ら 折しも合宿の中つ日を  
迎へ 日の沈みし高原の雨もよひなれば 合宿会場のみ中に齋庭を定めまつりて 遠き御代よりいやつぎつぎに み命重ね  
ましてみ国を承け継ぎ護りまします数多のみ祖たちのみ霊 はたまたみ祖のみ心仰ぎつ近きたたかひにみ命ささげましし  
同胞たちのみ霊 もろもろのみ祖のみ霊招ぎまつりまして 海の幸山の幸くさぐさ供へまつりて み祭り仕へまつらんとす  
かへりみれば昭和二十年八月のポツダム宣言受諾に基づきし占領統治は六年八ヶ月に及びて その悪しき影響は 独立の  
回復なりて半世紀余りの年月経ぬれど なほ深くみ国の中枢を蝕みつつあるは 悲しきことの極みなりき 政治の世界にあ  
りても教育界に於きても み国のため生涯つらぬきましし み祖たちのみ心を直に仰ぐになほ躊躇のありて 憲法改正かつ  
また教育基本法改正とふ言の葉のやうやう行き交ふも その大本の結ぶべき焦点の見失ひしままなるは嘆くも愚しきことな

りき

「深い泉の国」とかの日本滞在四十余年に及びしスイス人（トーマス・インモース）に言はしめし「君が代」のみ調べのままなるわが国柄の連綿性の事実と その意義と価値こそ 国政の場はもとより教育の場においても また種々の文化活動に於きても それらの根底に据ゑられるべき筈なるも 過てる「平和観念」と国際化情報化の時代なりしとの声の喧しく自らの拠つて立つる足元等閑なほざりにして 徒いたづらに外に目を向るのみなれば ために国民の共に拠るべき道筋の 在りか尋ぬる心の 日々に薄れ行くかに見ゆるは この上もなく嘆かはしきことなりき

とりわきて 一時しのぎをことし来たれる政治指導者は 世迷ひ事を振り撒きし一部マス・メディアの意のままに つひには尊き命捧げましし戦歿者のみ霊に對しまつりても いとものも軽々かろがらしく論ふ浅ましき事態とはなりぬ

断つべからざりし米国の歴史を自ら足蹴にするが如き これら悲しき事ども目の当りにするにつけても 世の誤りを糺すべき正しき学問の 漲り興りて米国の中うちに充てる日の一刻ひとときも早からんことを 乞祈まつる ここに集ひし我ら み祖のみ教へ仰ぎつつ み国の内と外的情勢広く正しく読み取るべき 眼養まなごはんと願ひ 併せて日本人の生き方のいかにあるべきかを尋ねんと 諸先生の御講義に耳傾けつ思ひを凝らし 短歌の創作にては遙か太古に連なりしヤマトコトバの妙なる調べの 今日の日ひに続くあるを悟らしめらるる ここ御殿場にて学びを共にせし我ら 今より後も 学びしひとつひとつを 自らの心に問ひ質しつつ 人生のしるべとなさしめんと思ひ定めん

もとより力たらざる我らにはあれども 大御歌に人の世のまことなる姿を仰ぎ 汝み祖たちのみ言葉に力与へられしを胸に刻みて いや励まんと決意新たにせしを 聞き届け嘉よみしまして 我らが行く手を照しませと 参加者一同に代りて

山内健生 謹み敬ひ恐み恐みも白す

平成十五年八月九日

御製拜誦

明治天皇御製

夢

今も世にあらばと思ふ人をしもこの暁の夢に見しかな

おもふこと多かる頃のならひとて常にはみざる夢をみしかな

をりにふれたる

むかしよりためしまれなる戦におほくの人をうしなひにけり

さまざまにも思ひこしふたとせはあまたの年を経しこちする

ひさかたのあめにのぼれるこちして五十鈴の宮にまゐるけふかな

大正天皇御製

夜雨

降る雨の音さびしくも聞ゆなり世のこと思ふ夜はのねざめに

猫

國のまもりゆめおこたるな子猫すら爪とぐ業は忘れざりけり

社頭暁

神まつるわが白妙の袖の上にかつうすれ行くみあかしのかけ

昭和天皇御製

曉鷄聲

ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきどりの聲ぞきこゆる

平和条約発効の日を迎へて

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重櫻咲く春となりけり

國の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

今上天皇御製

沖繩平和祈念堂前

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

對馬丸見出ださる

疎開児の命いだきて沈みたる船深海に見出だされけり

阪神・淡路大震災被災地訪問

六年の難きに耐へて人々の築きたる街みどり豊けし

講義 「甦る歴史のいのち」——国是『五箇条の御誓文』と近代日本——

福岡県立太宰府高校教諭 占部賢志 先生



先生は冒頭で、福住正兄の『二宮翁夜話』の中の「氷を解すべき温気胸中になくして」なほざり経書を世上の用に立てることはできないといふ旨の一節を引きながら、歴史上の言葉の味はふことを等閑にしてゐる学校教育の実情を指摘された。そして「皆さんは氷を融かすやうな温気を心に湛へながら、歴史と向き合つたことがあるだらうか」と問題を提起された。次いで五箇条の御誓文を解説される中で、最後の一節「：朕身ヲ以テ衆ニ先シ天地神明ニ誓ヒ：」についての意義を説かれた。「神々にお誓ひになつたといふこの一節が歴史教科書に載つてゐないため、天皇と官僚の間のみ成立する五箇条の御誓文と誤解されてゐる。しかし本来は、由利公正・福岡孝弟・木戸孝允や、津和野学派の活躍があつて成立したもので、明治天皇が神々に誓ふといふ儀式形態にこそ五箇条の御誓文の第一義がある」と力強く話された。

また、五箇条の御誓文が諸外国に与えた影響として、明治天皇の御偉業を讃へるホノルルや香港の英字新聞の記事を紹介された。同じく国内に及ぼした大きな影響として、「自由民権運動の秩父事件の首謀者、落合寅市は五箇条の御誓文に感激してゐた。万機公論二決スベシの政治を実現すべく自由民権運動を展開した。御製を拝誦しながら、天皇から友よと呼びかけられてゐるやうな感じを抱いてゐた。自ら勤皇尊王立憲志士と名乗るほどだった」と明治時代の重大な側面を提示され、『新日本建設の詔書』の冒頭に、昭和天皇の二度にわたる強い御要望で五箇条の御誓文が入られた経緯を紹介し、講義を締め括られた。

四日目の昼には、合宿としては二度目の体験となる野外でのバーベキューが行はれた。班ごとに、薪を用意する人、火をおこす人、野菜を切る人、肉を焼く人等の役割を分担して調理が進められた。あちらこちらで炊事の煙が立ちこめるなか、やがて皆で力を合はせた料理ができ上り、楽しく語らひながら、おいしさうに料理を頼る姿が見られた。張りつめた合宿の日程の中で、リラックスした班員相互の交流のひとつときであった。

講話 「若き友らへ語りかける言葉」——公と私——

元電源開発本部長代理 長内俊平先生



先生は東京でのご勤務を持ちながら、青森で病の床に就かれた母上に孝養を尽された御体験から、まづ話を始められた。「父や母を思はずして、社会だの人類だのと言ふのはやめよう。親を思ふ心こそ、『公』の始りではないか。身近なところを大事にすることなくして『公』はない。親を思ふ心と国を思ふ心は同じまごころから発する。『公』と『私』は分ちがたい」と日常の姿勢の大切さを語られた。そして青森の小さな漁村で「村人達と心を通はせ喜びと悲しみをともにし合ってきた」といふ生ひ立ちを語られた。

「鉛筆を置き、心を開放して僕の話聞いて欲しい。そしてたった一つでも心に感じたものがあれば、それを大事に、親鳥が卵を抱くやうに温めて行って欲しい」と心に染みるやうに説いて行かれた。

初めにハウ・インターナショナルに勤めてゐる桑木康宏氏が登壇した。氏は自らの仕事を紹介し、会社の仕事を通して地域を活性化していくといふことを目標にしてゐる体験を語った。そして学生時代の合宿や輪読会で、先生方から温かいご指導を頂いたことに大きな感謝の念を感じ、そのご指導の中で先生方は若者に対して、日本に対して確たる信を持つてをられると感じたと語った。

先生方や日本を培つてこられた先人の方の心に応へるためにも「日本を次に支へるのは自分自身だといふ気概をもたなければならぬ」と熱く参加者に語った。

次に登壇した企画デザイン工房banup勤務の諏訪田尚子氏はアルバイトに明け暮れた学生時代であったが、フリーターの生活をしてゐる時に交通事故に遭つたことで、「自分は何をしてゐるんだらう」と真剣に就職活動に取り組み出した体験を語った。父親の選挙運動を手伝つた経験から、家族の絆の大切さを知り政治に関心を持ち始めたことや、国文研の会員の父の勧めで合宿に参加して、父からは多くを学んでめたと気づかされたことを語った。「自分の生れた国を誇りに思ひたい。日本のことを悪し様に言はれると、自分の家族がさらし者になつたやうに感じる。自分を傷つけるやうなことはやめるべきだ。子ども達に誤つた価値観を刷り込んでほしくない」と率直な思ひを語った。

## 夜の集ひ

厳しい日程を送つてきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」は屋外でのキャンプファイヤーとなつた。あいにくの小雨まじりの天気ではあったが、各班ごとや大学、地区ごとに楽しい出し物が続いた。合宿中の講義や出来事に材を求めた寸劇や力強い合唱に、場内大いに沸いた。最後に全員で文部省唱歌「ふじの山」を合唱し、夜の集ひの楽しいひとときがお開きとなつた。

## 第五日目

(八月十一日・月曜日)

### 合宿を顧みて

初めに本会の小田村四郎会長は、合宿の初日からの講義・講話、短歌創作、相互批評を順を追って振り返りつつ、「短い五日間ではあったが、将来に向つての大きな糧が得られたはずである」と総括し、「ここで研修したことを胸に刻んで、日本の将来のために力を尽していただきたい」と呼びかけた。

続いて、折田豊生合宿運営委員長は、自らの学生時代の体験や、恩師との関わりに触れながら、「『国を思ふ』『天皇様と共に生きる』といふことが、今日わかりにくくなってゐるが、その意味の大切なことをこの合宿では学んだはずである」と述べ、今後の学びの指針として、「御製にこめられたお気持ちをお偲びすることと併せて、他と共に学ぶ友情をも大切にして欲しい」と訴へ、五日間の合宿を振り返った。

### 全体感想自由発表

次々に登壇した参加者は胸内に籠る思ひのままを發表した。

「伊藤哲夫先生の『日本は信じるに値する国だ』といふ御言葉が、この合宿を通じて実感できるやうになった。先の大戦に出陣した祖父に感謝の言葉を言ひたい」「長内俊平先生の『親を思ふ心と国を思ふ心は同じであり、それはまごころから発せられる』といふ御言葉が深く心に刻まれた。国のことをまごころをもつて考へていけるやうにならうと友と誓ひを立てた」と語る者もあれば、「良い短歌を作らうとするのではなく、自分の心を素直に詠まうと努めた」「夜を徹して自分の短歌を一生懸命に直

してくれる友達がゐて、自づと心が開かれた。合宿後も友と短歌を歌ひ交していききたい」と短歌創作で学んだことを語る者もゐた。

そして、合宿後の抱負について、「宝辺正久先生がお話された『信を同じくする友』のことを胸に刻み、日本の歩むべき正しき道を探し求めていきたい」「かけがへのない友との出会ひを大切にして、まごころが通ひ合ふ生活を送っていきたい」等々の思ひがこもごも披瀝された。

## 閉会式

いよいよ閉会式を迎へた。主催者を代表して磯貝保博副理事長は「一部の日程が大雨で変更になつたが、無事に終了できることを感謝したい」と述べ、「読書尚友は君子の事なり」「志を立てて以て万事の源と為す」（吉田松陰）を引いて「友とは互ひに尊敬できる友のことで、志を立てても時に揺らぐことがある。その時に力になれるのは友だ。今後とも学ぶ中で、友情を育て欲しい」と挨拶した。

続いて合宿に参加した学生を代表して上智大学文学部四年の青砥敬子さんは「国のことを自分のこととして語り合ふことができた。これから歪んだ世界の中に戻るが、ここでの研修を思ひ起して、日本のことが自分のこととして確信を持てるやうにもっともつと励んでいきたい」と、今後の思ひを語った。最後に亜細亜大学短期大学部二年・佐野宣志君の閉会宣言をもつて第四十八回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

助言者の紹介

元学校法人 拓殖大学 総長

元(株)千代田コンサルタント相談役

(株)宝辺商店 取締役会長

元九州造形短期大学 教授

新日本製鉄(株) プラント事業部 (嘱託)

大日本園芸(株) 常務取締役

元電源開発(株) 環境立地本部本部長代理

昭和音楽大学短期大学部 教授

元アサヒ飲料(株) 専務取締役

拓殖大学日本文化研究所 客員教授

(株)国民文化研究会 事務局長

(株)柴田 代表取締役

小田原市立矢作小学校 校長

(株)竹中工務店

東急建設(株) 執行役員コストセンター長

福岡県立稲築志耕館高等学校 教諭

元新潟工科大学工学部建築学科 教授

中島法律事務所 弁護士

熊本市東部環境工場

福岡県立太宰府高等学校 教諭

伊佐ホームズ(株) 取締役社長

住友電装(株) 生産技術部長

小田村四郎

上村 和男

寶邊 正久

小柳陽太郎

今林 賢郁

磯貝 保博

長内 俊平

國武 忠彦

坂東 一男

山内 健生

山口 秀範

柴田 悌輔

岩越 豊雄

稲津利比古

奥富 修一

小野 吉宣

大岡 弘

中島 繁樹

折田 豊生

占部 賢志

伊佐 裕

布瀬 雅義

山口県立下松高等学校 教諭

(株)みずほコーポレート銀行

日章工業(株) 代表取締役社長

(株)中央塩ビ製作所 会長

元法政大学 人事部長

元高千穂商科大学 教授

主婦

元日立製作所

(株)アクアテルス

元川重環境エンジニアリング

富山県立富山工業高等学校 教諭

(株)リョーイン 監査役

防衛庁

元富士通

神奈川県立小田原城内高等学校(定時制)教諭

戸田建設(株)東京支店開発営業部 開発課長

関西熱化学(株) M・C事業部

産経新聞社

(株)三井三池製作所 数理学研究科

(株)講談社

湯亭こんや 代表取締役社長

新明電材(株) 調査部

防衛庁

寶邊矢太郎

小柳志乃夫

藤新 成信

星野 貢

香川 亮二

名越一荒之助

尾関千枝子

日高 廣人

村山 寿彦

山本 博資

岸本 弘

島津 正数

小川 楊司

濱田 實

原川 猛雄

青山 直幸

天本 和馬

大内 保治

坂本 精児

高瀬 正仁

藤井 貢

青砥 誠一

飯島 隆史

鏗 信弘

羽後信用金庫

防衛庁技官

若築建設(株)東京支店建築部 建築部長

(株)IHIエアロスペース 営業部

福岡県立香住丘高等学校 教諭

熊本製粉(株)

熊本県立天草高等学校 教諭

(株)アルバック

(有)群馬タマ加工

田浦町立田浦小学校 教諭

(株)日本教文社

アダマント工業(株)

熊本県立宇土高等学校 教諭

小諸市役所

神奈川県教育庁 管理部総務室教育情報班

福岡南公共職業安定所

(有)岡山商事

東北女子短期大学 講師

志門塾 講師

船橋市議会議員

(株)国民文化研究会

マップ・ビジュアル・プレゼンツ(株)

アサヒ飲料(株) カテゴリーマネジメント部

(株)国民文化研究会

須田 清文

山根 清

池松 伸典

内海 勝彦

酒村聰一郎

吉村 浩之

今村 武人

北浜 道

吉川 理夫

蓑田 誠一

坂本 芳明

眞田 博之

久保田 誠

中澤 栄二

大日方 学

古川 広治

岡山 英一

土井 郁磨

三林 浩行

中村 実

茅野 輝章

濱田 雄一

澤部 和道

有本和香子

(株)モノリス NEO事業部 私立中学受験グループ 庭本秀一郎

日本青年協議会 学生局 別府 正智

(株)ハウ・インターナショナル 桑木 康宏

banup企画・デザイン 諏訪田尚子

福岡県立久留米高校 講師 小林 国平

(株)ラック 高橋俊太郎

横浜市中区役所 徳田 浩介

日本青年協議会 中園まどか

合宿運営本部 折田 豊生・酒村聰一郎・茅野 輝章

指揮班 岡山 英一・古川 広治・須田 清久

眞田 博之・中澤 栄二・濱田 雄一

事務局 山根 清・天本 和馬・有本和香子

私立開成高等学校二年 内海雄太郎

都立戸山高等学校二年 小柳 元

学習院高等学校一年 小田村康正

東山中学校二年 山根 誠一

藤沢市立大清水中学校一年 工藤晋太郎

私立開智中学校三年 濱口 梨紗

私立開智中学校三年 飯島 正子

放送・記録班 内海 勝彦

神職 棠陽神社 宮司 根上 久野

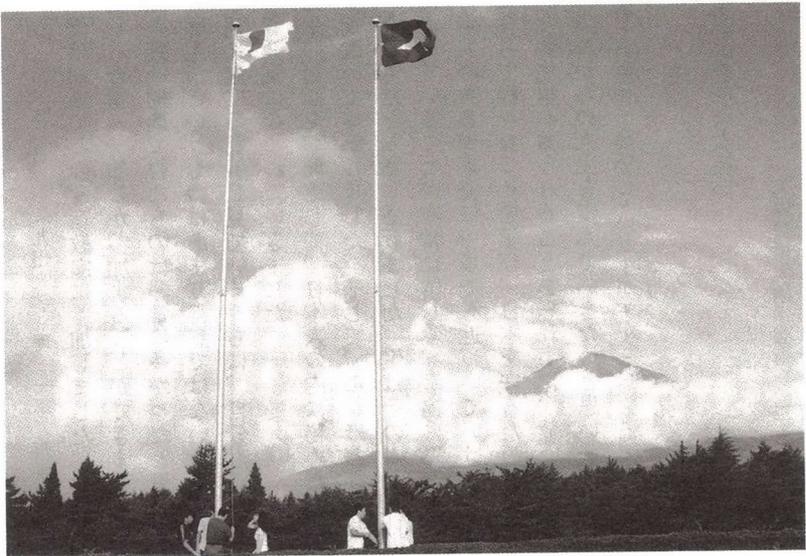
写真班 カメラマン 國武利貴弘

見学者 会社経営 小田村芳忠

# 走り書きの “感想文集”

これは閉会間ぎはの一時余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままに掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目的のものです。



## 第一班—男子学生—

### 思いやりの心

(早稲田大学 法 三年 濱崎史嘉)

私は合宿に参加するにあたり、何か一つでも自分の身になることを発見しようと思っていた。今回の合宿では、短歌相互批評の際に、相手との付き合いにおいて相手の心と接近しながら、また相手を思いやりながら付き合い合うことが真の友情ではないか、ということを発見した。自分の心と話し合いながら苦労し、またうまい言葉を見つけることができなくてやしく思いながら提出した和歌を、班の友達から批評される際、すこく的確に自分の気持ちを歌い、的確な言葉でつづられる和歌を聴かされた際、すばらしく感動するとともにみんなの思いやりに感謝した。これは、相手の心を感じるといふ、合宿で学べる最も大切なことの一つだと思った。

私は友達関係で相手の心を感じとることに鈍く、相手を傷つけることもしばしばある。それを反省し、心と心の付き合いをするということをお忘れずに、これからも生きていこうと思ふ。

合宿で学びしことを身にきざみ生きゆく道を豊かにしたし

### 日本人の血の自覚

(九州大学 理 一年 西原林太郎)

今回、僕は初めてこの合宿教室に参加しました。初日から体調を崩し、合宿の一部しか参加することができませんでしたが、その短い期間で得たものは非常に多かったと思います。僕は集団生活というものはあまり得意ではないのですが、班員の合宿に対する姿勢を見ていくうちに、自分もいつの間にかその雰囲気になじんでいきました。

長内先生の講話をお聞きして、日本人の内に秘めた暖かさ、強さなどを改めて実感しました。そして、これほど絆の強い民族はいないのだとお話しされました。僕はそのような日本人の血が流れていることが非常に嬉しく、幸福に思います。本来の日本人のあるべき姿に一步でも近づいていけるような素直な気持ちで様々なことを学び、日本を守るため御命をも捧げられた御先祖がおられることをお忘れずに、敬い、感謝しながら、これからの人生を歩んでいきたいと思えます。

我が心富士の里にて洗はれていすがすがしき朝を迎ふる

### 人生の哀しみと笑い

(大阪芸術大学 芸術 二年 大西 洋)

この合宿に参加して、まず不思議に思ったことは、班付の高瀬先生なのですが、どうしてそんなに笑っておられるのだ

ろうということでした。十秒に一回ぐらいのペースで笑っておられて、私はあまり笑わない性格なので、すごく怪訝に思ったものでした。しかし、五日間共に生活させていたいただいて、笑うことの素晴らしさと大切さを実感できたような気がします。笑う、というのは実は難しいことです。日本の歴史や文化を顧みる上で、かたくるしいという側面はどうしても拭い切れません。それでも楽しく笑う。笑うこととふざけることは全く別で、本気で笑うにはパワーがいると思います。私が忘れていた笑うことの素敵さを、高瀬先生は思い出させてくれました。私は第一回の短歌創作で、人生は哀しいものだと思いましたが、けれどその哀しみを払拭してくれる手段として、笑いがあるのではないかと今なら思えます。

大切なプライドを持ちていざ行かん富士山で得た「心」とともに

### 楽しい合宿だった

(学習院大学 法 三年 黒田康裕)

合宿を顧みて思うことは二点あります。まず一つ目は、祖国日本の歴史と文化を素直な心でみつめ、愛することがいかに大切であるかということです。二つ目は、今回の合宿における尊敬できる師、良き友人との出会い、その感動です。心の内を語り合うことのできる機会はそうはありません。短歌創作もこの合宿における貴重な経験の一つです。歌を詠むということは、「良い歌を創ろう」と身構えるものではなく、



主催者を代表して、(社)国民文化研究会理事長・上村和男先生が「正しい判断力を養ふ本当の力のつく学問をしよう」と参加者に呼びかけた。

自分の心を素直に表現する事が良い歌を詠めることに結び付くという事に気付かされました。

「楽しい合宿であった。」私が心からそう思えるのは、講義をいただいた先生方、身近で御指導下さった先生方、そしてこの合宿に集う志ある友人たちのおかげであります。夜遅くまで語りあつた事は忘れません。合宿を終えた今、ただただ皆様に感謝いたします。

輝ける祖国日本の将来を共に築くは我らが使命

## 慎みと至誠の大切さ

(九州工業大学 情報工 三年 大津健志)

この合宿で一番心に残つたのは小柳先生の御講義でした。御講義を聴いていると心の奥からふつふつと学問がしたい、勉強をしようという気が起こってくるのです。特に松陰先生が久坂玄瑞の文を評した中で「己の地、己の身より見を起すべし」は班別輪読でも深く読み、議論していききました。私自身も含めてですが、己の地、己の身とは何なのか、私達がやるべきことは何なのかという深い疑問を投げかけられたのです。輪読を通して各々が自分に深く迫れた経験でした。

「聖賢の貴ぶ所は議論にあらずして事業にあり」という言葉にも深く考えさせられました。事業とは行為であり、成果である。当たり前日本人であることであり、真心から発した行動なのだと思えました。この合宿は今の生活、心を見

直す機会になり、「慎み」と「至誠」の大切さを実感する合宿になりました。これを元に、事業を起こしていきたいと思っています。

友らとの心震へる体験が真心尽くすと心に誓はん

## 英霊の心

(明星大学 人文 聴講生 久田広光)

宝辺正久先生は「命を捨てて」の講話において、出征する一月前に「信を同じくする友」、松吉正資命、百武禮之命、江頭俊一命等々と小柳陽太郎先生たち十名程と霧島に行かれた時の事を話された。皆、私にとっては今は亡き方々であり、英霊であり、手の届かない御存在との思いがあつた。しかし宝辺先生が霧島の事をありありと話してくださる姿から、今も先生の中に生きておられるのではないかと思つた。百武禮之命が「わが肩に手をおき語る友の心しのびつ泣きぬうれしさあふれて」と詠まれたが、肩に手をおかれたのは今は亡き「生の記念」の加藤敏治さんだつたと、先生は話された。先生は「当時の男は男つぶりを大切にし、その心に恥じない生き方をした」と仰せられたが、「いのち捧げて」に出てこられる方々が、先生を通して私にもあたたかく流れ入るように感じた。この体験をしつかりとみつめて、先生や出陣学徒が「命をすてて」との強い決心を持ち、願われた事を日々おしのびし、受け継ぐ努力を重ねていきたい。

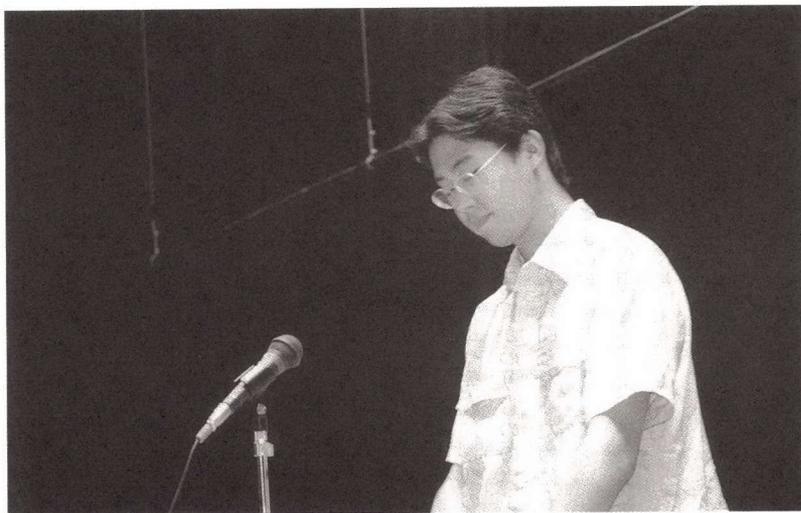
## 感動する心と天皇

(亜細亜大学 国際関係 四年 大橋広和)

今回で四回目の合宿参加となった。初めて参加した時は感  
いが多かった。一つは、多くの参加者が「感動した」といい、  
涙を流していたことである。その頃、世の中に感動という言葉  
葉が溢れていて、ブラウン管を通して毎日流れてきていたの  
で、私には軽薄に聞こえた。しかし今回の合宿で、私は何度  
も涙を流した。心が奮え、何かが込み上げる瞬間が何度も  
あった。何に感動したのか考えてみると、それは自己犠牲、  
他者への思いやり、感謝の念に関する話であった。それらは  
美しい。そして美しいと感じられる感性を養うことが重要で  
あると思った。

もう一つは天皇に関してである。私には天皇という御存在  
が遙か遠くに感じられていた。しかしこの合宿で御製に触れ  
る機会を得てから、徐々にではあるが、天皇の御存在が身近  
に感じられるようになることができたことをうれしく感じる。

数々の心こもれる御講義に胸熱くする我に気付くも



参加者を代表して、九州工業大学3年・多賀祐之介君が「この合宿は日本人として、ひいては人間として生きていく上でとても大事なことを伝えようとしてゐる。そこから一つでも多くのきっかけを把んで持ち帰り、自ら育てていくことが大切だと思ふ」と思ひを語った。

## 第二班 男子学生

思いが言葉にのって迫ってきた

(九州工業大学 情報工学 三年 多賀祐之介)

特に寶邊正久先生と長内俊平先生のお話は自らの体験談を元にお話され、先生方の思いがまさに言葉にのって自分に迫ってくるようなそんな感じを受けました。思わず涙することもあり、感動というのはいささかという事言うのだろうと思つた瞬間でもありました。また、班においては班友の一人が四日目の昼、突然帰ると言い出したことがありました。その班友は実はクリスチャンで今までの講義や講話で何か胸に迫るものがあったと同時にクリスチャンである自分がこんなことをやっていていいのかという心の葛藤があったことも涙ながらに語ってくれました。今思うと言葉の端々に行動の端々にその思いが出ていたような気がします。僕は何故いまままで氣付いてやれなかったのかという思いと苦悩していたその班友の気持ちを思うと、思わず涙があふれ、留めることができなせんでした。

感動と信するものに挟まれて思ひ悩める友を偲びぬ

祖父母や先人への畏敬の念を再確認した

(筑波大学 医 五年 石川雅俊)

自分は親、友人、先生、たくさんの人に支えられ教えられ生きてきた。祖父母と同居していたこともあつてか戦争、先祖といったものには以前から興味があり、自分なりに興味のおもむくままに本を読んできたつもりだ。しかし、「理系」であるためかはわからないが、短歌創作、講義は難しかった。自分の勉強のせいではあるが、とうてい興味のもてるものとはならなかった。班のメンバーはそれぞれ個性的で味がある人達であつた。特に「社会科教師」を目指す川畑君と「政治家、アメリカ留学」を目指す赤城君は将来が楽しみだ。長内・寶邊両先生の生き字引のようなお話は本当に自分の心を動かすものであつたし、祖父母や先人に畏敬の念を再度もつものであつた。自分を含めてかわりものの集まりであつた。思想的にバランスのとれた人間となるためにもたくさんの方が来年参加されるとよい。

国のためと生きた先人の話聞き止む祖父思ひて涙あふるる

言葉の重さについて強く考えさせられた

(早稲田大学 法 三年 高木雅史)

今回最も強く考えさせられたのは言葉の重さということですから。真にその考えを人生の指針として、常に実践されてこら

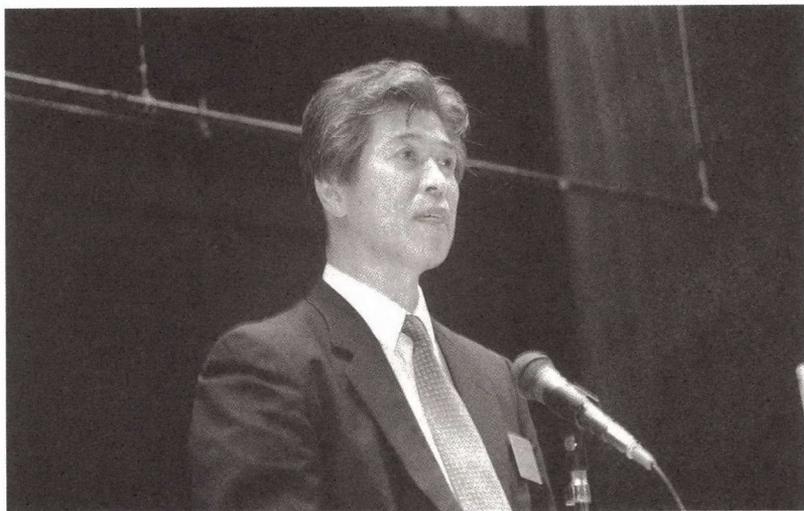
れた方々の言葉は何と重いのだろうと思いました。「誠」や「親」を大切にしろとかいう言葉は目新しい言葉でもなんでもありませんが、それが吉田松陰であったり、長内先生の口から出ると激しく私の心に響いてくるのでした。翻って私の言葉にどれほどの重みがあるのか、それはそのままこれまでの私の人生にどれほどの重みがあったのかということをおもわずにはいられませんでした。班の中にはクリスチャンであったがゆえに慰霊祭等の行事に耐えられずに合宿も半ばで帰ってしまった班員がいました。同じ班同じ部屋で暮らしながら、敬虔にクリストを信仰するがゆえに苦しんでいた彼に気付くことができなかったことが悔やまれてなりません。いったい自分は彼と何を話していたのだろうか、悲しい気持ちです。幾年も胸に持ちたる言の葉は磨かれ人の胸を打つなり  
磨かれし言の葉持ちたる人々に学びし喜びいかほどなりや

しっかりと地に足のついた物の見方をしていきたい

(佐賀大学 経済 二年 川畑孝志)

私は今回の合宿で一つの目標があった。それは「誇りある日本」を誇りをもって発言するということだった。私は大学に入り、日本の美しく誇りある歴史を学んでいたが、中々自信を持って発言することが難しいと思っていた。最初の班別討論で小柳先生に指摘された。私は発言の中で「当時の日本人は」という言葉を使ったのだが、そこを指摘された。大東

カメラ・レポート 3



オリエンテーション。合宿運営委員長の折田豊生氏から合宿趣旨説明がなされた。

亜戦争に試し切りをしなかった。中には変わった人もいたかもしれないが、「当時の“日本人はそれを戒める日本人だった。そのような発言をした時に小柳先生は「私は今の日本人も試し切りなんてしないとと思う。あなただってそんなことはないでしょ」という言葉で指摘された。私は自分で考えてみると確かにそうだと思います、自分の言葉が浮いていたのだな」と反省させられた。観念的に日本というものを美化するのではなく、しっかりとした学問をした目で物を見る大切さを考えさせられた。それは寶邊先生のご講義の中で学問をしていた先生方が疑問を持つて運動をしていて、また戦後の左傾化された社会に疑問を持たれて合宿を開かれていることから私にはそれが足りないと思ったのだ。私は古典を勉強するのは歴史を学ぶことに繋がると思っていたが、学問をしてしっかりと地に足がついた物の見方をすることがとても大切なものであると知った。疑問をもったらそれに関する本を読み解消していく学問をこれからの学生生活、また、これからの人生において続けていきたいと思った。本を読むのは苦手だが、松陰先生が読書について「自ら已むこと能はず」と仰っているのを目標にして本を読んでいきたい。

先生の言葉に感ぜし学問を本読むことで始めて行かむ

合宿を通して我が志を改めて確認した

(愛知県立松蔭高卒 赤城元氣)

自分の周りに心から語り合える友があまりいない状況で、この合宿に参加しましたが、普段話すことが憚られるような内容をこの合宿では話すことができ、とてもうれしく思いました。幸いにも私はこの合宿に来る前から自虐史観から抜け出しており、日本国のためにこの生涯を尽くすことを誓っておりました。この合宿を通して我が志を改めて確認するとともに、その志を果たすために努力せねばということを変更しました。

日の本に生まれし私の運命とは命をとし奉公にあり

湧き上がる祖国日本への我が想ひ命にかへても守りてみせむ

先人の凄い生き方を学ぶ体験の大切さ

(アサヒ飲料㈱ 澤部和道)

合宿全体の流れの中で「先生方のご講義・講話」「古典」「短歌」を通して「ああこんな凄い生き方があったんだ」と感じ、かうした体験の大切さを改めて感じた。吉田茂や岸信介といった国を愛する心をもって日本再建にあたられたことを初めて知り、そのやうな素晴らしい生き方をされた先人が近現代史においてもをられたといふことが素直にうれしく感じられた。これまでは明治維新前後までの歴史について触れ

ることはあったもののそれ以降の近現代の歴史といふのはあまり触れてをらず、私の中で歴史の糸が繋がる思ひがした。

また、この四泊五日といふ合宿の一コマ一コマは私にとつてそれぞれが大変重要な意味を持つてをり、「発見」や「気付き」がちりばめられてゐると感じた。さういふことを考へると今回、残念ながら途中で帰らざるをえなかつた班員に対して「あのご講話を聞いて欲しかつた」「あの体験発表までして欲しかつた」との思ひがつきない。目の前に相對してゐる相手への「思ひやり」が足りず、至らない自分を省みて自分自身の「まごころをつくす」姿勢について問はれた気がしてゐる。ただ、今回小柳先生に終始班付としてご指導いただき、時に暖かいお言葉をかけていただき、救はれた気がした。班員はそれぞれ思ふところがあり今回合宿に参加したわけだが、それぞれがそれなりの課題を持ち帰ることになつたと思ふ。それらの課題は折田運営委員長が最後に述べられたが、すぐに答へのであるものではない。私自身学生時代解決しきれない問題を多く抱へてゐた。未だ答へのでゐないものも多々ある。何かの縁で今回同じ班になつた班員へは今限りにしてしまはず、合宿から帰つた後も付き合ひをつなげられたらと思ふ。

縁ありて出会ひし友と真向かひて心通はせ語り合ひたし



合宿導入講義。福岡県立香住丘高等学校教諭・酒村聡一郎先生は「国民として公に奉ずるとは何か、国家の命運とともにある個人の生き方とは何かについて、もう一度考へ直さなければならぬ」と切々と語られた。

### 第三班—男子学生—

#### 命を分かち合う友の付き合いを

(早稲田大学 法 三年 穴井宏明)

私は、今回の合宿で改めて考えさせられたのは、人付き合いについてです。

長内先生が、班別研修の中で、「命をわけてもいいと思える友をもつことは、人生で最高の喜びである」とおっしゃっていました。

宝辺先生のお話しの中の友達付き合い、長内先生のお話しの中のお母様との付き合い、近所の人たちの漁に出た人々の帰りを大勢で出迎える人付き合いなど、私はその姿を思い浮かべるだけで、胸の中があなたたかくなりました。これが「胸中の温気」というものではないか。そして、この「胸中の温気」の元にあるのが「まごころ」というものではないかと考えております。

今の私にどれほど「まごころ」をもった人付き合いができるか。長内先生は研修の中で、「我々にもそのような付き合いはできる」とおっしゃいましたので、私はそれを信じ、長内先生が「最高の喜び」とおっしゃるところの友をもとう、男らしい付き合いをしたいと思いました。

先人に負けぬ付き合いこの我もやってみむとぞ心に誓ふ

#### 「積誠之を蓄へよ」

(九州工業大学 情報工 一年 瀬木裕太郎)

合宿初参加ということで大きな期待と不安をもって静岡の地に来ました。しかし、先生方の熱のこもったご講義や班員の皆さんの温かさに徐々に不安が和らいでいきました。その中で自分の知らなかったこと、普段気がつかない祖国の歴史、文化の素晴らしさに涙が自然とあふれてきました。その中でも吉田松陰先生の「積誠之を蓄へよ」というお言葉は私のこれからの人生の指針となるほど大きなものとなりました。私はこの言葉を胸に置き、日々懸命に生きていきたいと思えます。

この合宿をよりよいものとするため、朝早くから夜遅くまで頑張っておられた国民文化研究会の方、そして我々をご指導して下さった先生方、また私を成長させてくれた先輩方に深く感謝したいと思います。また、特に班付の長内先生にはご講義だけでなく、班別研修の際、素晴らしいご指導をしていただき深く感謝したいと思います。

合宿で得られたものを胸に置き日々懸命に行ふのみなり

#### 頭で考えるより体と心で学んだ合宿

(上越教育大学 大学院 一年 寺澤 卓)

私は大学院生とは名ばかりで、昔の歌を詠んでも訳など分

からない。読み方すら分からない。一語一語辞書を調べなければ意味も理解できない救いようのない馬鹿者であります。ただ、ご講義の中で聴いたり、班別で輪読をしたりするうちに、意味も分からないのに、心が澄んでいき、体が動き、泣きもしました。また最終日の朝の集いのとき、眠たくて仕方が無いのに、なぜか日の丸を掲揚したくて志願致しました。この合宿、頭で考えるよりも感覚で吸収するものが多かったです。

合宿で素晴らしい仲間に出会えた、友と夜中に語った、その様なことは当り前だと思います。一年後の再会を誓うのも結構なことでしょう。でも大切なのは、せっかくできた友達と今後どのように接していくのかだと思います。一年後までにどのようなやり取りを行うのが大切です。来年の合宿までの過程を大切にしましょう。出来た友達に手紙を書きましよう。短歌を添えて。

学び舎も郷里も違へど通じ合ひ友と云ふ名の花を咲かさむ

### 伊藤哲夫先生の御講義が心に残った

(東京理科大学 理工 三年 小堀知輝)

講義や班別研修など、とても役立つことが沢山あったと思う。一番心に残り、感動した講義は、伊藤哲夫先生の御講義だった。国のために戦い、国のために死んでいった特攻隊の青年たちの遺書を読んで出てきた感想の言葉は「戦争はいや



カメラ・レポート5

朝の集い。この日はあいにくの雨、体育館にて国歌を斉唱し体操をして一日の研修が始まる。

だね」だけではあるまいに、みな画一的にこうした決まり文句を口にしてしまうボキャブラリーの貧困さがみじめに思えた。結局のところ、この例をとおして分かるのは、大人たちの口から出る言葉、世間に瀰漫している一般的な評論や価値観というものはそれを発している人間の素直さから出たのではなく、貧困の中で自分の位置を維持するための保身術から出た虚構、建前に過ぎないということだった。普通の人間はこうした虚構の言葉を自覚せぬまま無意識のうちに発しており、自分が今虚構の世界にいるということすら気づかないのではないだろうか。

晴れわたる空に富士の嶺美しき御国の未来もかくぞあれかし

### 「家族を思うこと」と「国を思うこと」

(明治大学 理工 二年 小柳雄平)

長内先生の講義の中の「家族をおもふことが国をおもふことである」という言葉が強く心に残っています。私の母の教えに「何をして良いけど、何か迷うことがあれば、お父さんの顔、おじいちゃん、おばあちゃんの顔を思い浮かべなさい。」というものがありました。

父、母、祖父、祖母は祖先を大切にしております。その顔を頭に浮かべて恥じない行動を取れば、きっと祖先の方々にも恥じることのない行動が取れると思います。また、それは我が国日本のことをおもう行動へとつながっていくのでしょ

う。本当にありがとうございます。

青空の広がりにける暁の富士を拜まんと歩みはやまる

大空は快晴なれど富士の嶺に雲残りたるはいともどかしき

昼過ぎてふと見上ぐれば雲消えてつひに見えたり富士の高嶺の

前田秀一郎さんとお会いして

父のこと静かに語らるる先輩の優しき言葉に涙あふるる

### 長内先生の話を聞いて

(中央大学 商 四年 仲里賢宏)

この合宿で一番の収穫はなんと言っても「聞く」ということだ。これまで僕は日本や日本の歴史について自分なりに本を読み考えることで自分なりの価値観や歴史観を培ってきた。結果的には「自分が生まれたこの日本という国は、どの国と比較しても決して見劣りする事はない」という答えを持つようになつた。そのような下地があつたからであろうが、合宿に参加してカルチャーショックはなかつたが、先生達の生の声を聞くと、やはり驚かずにはいられなかつた。中でも長内先生の戦争体験は実に興味深く貴重なものであつた。私は祖父が他界しており、今後、当時の方の体験を聞く事には余り恵まれないだろう。それは、戦争を知らない子供にとって惜しい事である。なぜなら活字では伝えられないものこそ、私達の胸を打つ実直な想いがあるからである。長内先生の歌われた「我は海の子」を聞いて涙が抑えられなかつた。私はそ

う確信した。

学びあひ共に語りしはらからと今別れゆく名残り惜しくも

### 熱い会話が出来た五日間だった

(亜細亜大学 短期 二年 佐野宜志)

合宿を終えて、とても感動しています。この四泊五日の合宿はとてつもない感動があつたのです。勉強だけでなく、班付の長内先生のお話、まるで兄の様だった班付の別府さんや班員の友と語つた事、また趣味である映画の話が出来る友がいた事など、熱い会話が出来た五日間でした。

慰霊祭が終わって帰ろうとする時、小柳先生と宝辺先生が談笑しながら帰られる背中を見て、お二人の大東亜戦争以前から続く友情を感じました。僕も八十歳を過ぎても心から語り合える友を持ちたいです。

長内先生の「真心」の話は僕が将来の仕事について考える時、常に心に留めておきたいお話でした。

友と会ひ語り合ひたる五日間この友情を永く続けむ



短歌創作導入講義。熊本県立宇土高等学校教諭・久保田真先生は高校で生徒達に短歌を創作させた体験から「良い歌は人の心を打つことを改めて知らされた」と感慨深く語られた。

## 第四班—男子学生—

### 最後の夜の出来事

(東北大学 院 五年 大岡一巨)

夜のつどいのあとに始まった秘密の班別短歌相互批評が、この合宿の本番であった。それまで体力面でも指導力面でも生彩を欠いていた班長の目が輝き始め、個性の強い面々が班長を一目置き、繊細な男が自分の意見を一気にまくしたてた。こんな議論に引き込まれないはずがない。そういう状況がやっと来たと思つた。河合君の本来の骨太な表現力が歌の調べになつたときは、ぞくぞくした。多久君の話の仕方には、まだ理屈ばい前置きは多少あるが、それが嫌味でなくなつた。気安く話せる友人が増えると、モチベーションが変わる。みんなの間で何かがかまようようになる。

多久君へ

み友らの厳しき批評を神妙に聞く君の顔は紅潮したり

河合君へ—多久君の感想発表を聞きし折に

眠りたる友呼ぶ声のありければ疾く伝へむとしたたか打つなり

初めて日本語の美しさにふれる事ができた

(名古屋商科大学 総合経営 三年 河合高明)

私は初めてこの合宿に参加したのですが、当初はここでやっていたけるのだろうかと大変不安でした。しかしそんな不安はあるもののすぐに班員の方と馴染め、普段の生活ではどんな人であれ気をつかい、本心をかくす為と言葉をかざり、真に本心でぶつかり合う事はありませんでしたが、ここでは友と共に学び語らううちに、本心で裸の付き合いができるようになり、人の真心というものを知ることができました。そしてこんなにも真剣に生きている奴がいたことに何より心打たれました。彼らの言葉はすべて本気で、とても熱意が伝わつてき、自分の中にあつた今までの価値観が変わり、新たに違う角度で物を見る事ができました。唯、自分の日本語能力不足から彼らの伝えたい真意を十分汲み取ることができなかったのが残念でなりません。

この合宿で初めて日本語の美しさにふれました。

友の声かざることなき言の葉はありがたかれとよくわからざりき

心温まる思いがした

(拓殖短期大学 貿易 二年 白井勇太)

私は、諸先輩の御講話や童心で共に学び合う御姿勢に魅力と高揚感を胸一杯に感じました。日本人として生きている事

の誇りと自信、そして他者への真心と国を思う心意気、これは喜怒哀楽ある私が生きておられるのは決して一人の力ではない、という他者への感謝であり共感であると思います。

私は今回の合宿で目標としていましたものは、人生の諸先輩の方々との思いの共感であります。先輩方のうれしさ、たのしさ、かなしさを肌で感じ、少しでも先輩方のお気持ちに感じ入りたかったです。そして合宿期間中に、先生方と接してまいりまして、本当に心温まる思いがし、一人一人の方々が我が学友であるが如くに思え、日本人であることに大変喜びを感じました。

学びあふ友のことばに我が無力気づかされたり心地よきかないにしへのいまに思へる和の心熱き血かよふ永久のたましひ

### 班別相互批評のこと

(明星大学 日本文化学部 二年 高橋佑太)

私はこの合宿でいろいろなことを学ぶことができました。中でも班別相互批評の折、一人のために全員でその気持ちを形にしようと、その人の気持ちをわかろうと努力したことは、一生忘れません。

松の色日の出の光ガラス越し友と語りて夜明けぬるかな



カメラ・レポート7

レクリエーション。箱根神社へ向かふバスの中、外は雨でもにぎやかな一行。皆で声を合せて歌ひながら楽しい一時を過ごした。

友と真剣に語り合う事の素晴らしさ

(西南学院大学 文学部 一年 多久彦彦)

今回の合宿で特に感じた事は、心と言葉を一致させる事の難しさ、友と真剣に語り合う事の素晴らしさだった。

常日頃から、心と言葉の一致、つまり言葉に真心を込めて発するという事に対して考える事がよくあった。そんな中でこの合宿に参加する事になり、自分が一番楽しみにしていたのは、和歌相互批評だった。しかし実際に合宿で和歌創作及び批評をすると、伝えたい思いをなかなか伝える事ができず、もどかしかった。相互批評の時間はついにそのままで終わってしまった。しかしその後昨日、夜中の三時ぐらいから、一度寝ていた班員がわざわざ起きてくれて、自分の和歌に対して真剣に考えてくれたのである。私の和歌がどうしたらよくなるかを考えてくれたのだが、私は初めのうちは、批判されるのが嫌でふさぎこんだりしたのだが、次第に酷評される言葉の裏には、皆でよい和歌にしたいという真心があるのだと感じられるようになった。そして皆が徹夜までして私に付き合ってくれた事をうれしく感じ、感謝しなくてはと思えるようになった。友と真向かって話しをする、このような熱い体験ができた事が何よりも嬉しかった。本気で語り合える友を見つけられた事に感謝したい。

我が為に一睡もせず付き合ひし友に囲まれをるは嬉しき  
徹夜して友と真向かひ語り合ふこの一時を忘れじと思ふ

友のありがたさを持った

(筑波大学大学院 地域研究 修士二年 寺澤知之)

ともに笑い、ともに泣き、時に怒り、ともにげむ。友人とはなんと良いものなのだろう。長内先生も寶邊先生も若き日に友とこういうものを共有しておられたのだと思う。悩み多き若者であれば、日々の中で時に現実に向け自らを偽り、時にはおごり、時には自らを卑下して人との深い付き合いを避けてしまう。大人になるにつれ嫌な思いもするし、人が信じられないと錯覚することもある。そのようなとき、無私の心で全力で彼を助けるのは友達であるとおもう。また松陰先生が松下村塾でそうだったように長内先生、寶邊先生も若者の輪の中に入ってこれれば若者を一人の友として接してください。こんなありがたいことはないと思う。最後に戦前からいちはやくししまの道に目覚められ、後世の我々にその素晴らしさを伝えようと命をかけられた国文研の先人の方々があることとをうれしく思った。私も今の友人、これから出会う人にとっての良き友人になれるように研鑽を続けていきたい。

#### 班別研修

班別の研修終へしそのあとも勢ひあまりて議論やまざりき  
みそひともしをはじめて作る友の歌の見違へることなりしを喜ぶ

班員の全てが一人の友のため眠らず和歌の批評続けぬ

疲れ果て精根尽きし友もてペンをにぎりてそのまま寝ねるも  
部屋使ふ我らに氣遣ひ外に出てベンチで寝る友のありけり

良き和歌になさむとしつつ夜を更かしつつひには朝の光さしたり  
徹夜して起きられぬ友をそのままに朝の集ひにむかう今日はも

## 第五班 —男子学生—

何事も誠心誠意やってゆきたい

(防衛大学校 人間文化 四年 鶴川優一郎)

私は、今回で二度目の参加になります。今回最も強く心に残ったのは、「大切なのは誠心誠意である。」という言葉です。大言壮語せずに、自分の立場で日本のために誠心を尽くすということだと思えます。私は、来年には卒業して任官しますが、自分が自衛隊に残っていいのかと自問することが幾度かありました。しかし、今年の合宿に参加して私の迷いは消え去りました。自分のなし得る範囲で、誠心誠意頑張ってゆきます。

また、わずか5日間の間に素晴らしい友らと出会えました。一生の財産です。この友らとの繋がりをいつまでも続けて行きたいと切に願います。来年以降の参加は難しくなりますが、十年、二十年経っても参加できるときには必ず参加いたします。ありがとうございます。

今日ここに集ひ語りし御友らは我が一生の宝なりけり



二日目の午後、日本政策研究センター所長・伊藤哲夫先生による「内外情勢を見る眼をどう養ふか」と題する御講義が行はれ、先生は「我々一人一人の力は小さいかもしれないが、国を背負ふ志を持って頑張っていくかではないですか」と強く訴へられた。

カメラ・レポート 8

## 班員と深く交われた

(大正大学 人間 四年 末次信宏)

私は初参加で、合宿の趣旨もはっきりとは理解せぬままの参加だったが、質の高い、そして普段では滅多に拝聴することのできない講義には驚いた。それ以上に驚いたのは、集った友人たちの姿だった。自己紹介の時から、自分の思いを延々と語る様には圧倒された。初対面の友人がすぐに腹を割って話ができる場所であると感じてはいたが、班別研修ではその意味が実感できた。

最近の学生には少なくなったという、友人と真面目に討論するという姿がこの合宿教室には存在し、その友人たちと深く親交を深めることができたのは大変有意義なことだった。合宿を終え、帰路につく今、友人たちと別れなければならぬことが残念で仕方がない。平生の生活においてもこのような志の高い人たちと一人でも多く出会ってゆけることを切に願う。

夜明けまで友と語りて朝空を見上げる気持ちの何とすがしき

心を正しく表す言葉を古典から学んでゆきたい

(九州大学 農 四年 森永賢司)

今回の合宿で心に残った言葉は、伊藤先生が仰られた「日本を信ずる所からスタートしなければ、国際情勢を見ること

はできない」というものだった。ではどのようにしたらいいのか。伊藤先生が班別討論に入られて、「日本のことを『我が国』と表現するのか、それとも『この国』と表現するのか。それによって日本に対する思いは大分違ってくる」と仰った。私は「この国」と日本のことを表現しても、気にとめることはなかったが、このように無意識に使う言葉の中に私の日本に対する意識が定められてしまうのだと思うと怖ろしい気がした。小柳先生が仰られた「古典とは命の源にふれること」という言葉が思い出され、私の心を正しく表す言葉を古典から学んでゆきたいと強く思った。

素晴らしい合宿を過ごすことができ、班員には感謝の気持ちでいっぱいです。語り合ったことや共同体験を忘れずに、これからの学びを重ねて行きたい。

御友らと共に学びしこの日々を忘れず学びを重ねゆかなむ

戦争に行つた祖父をととても大切に思えるようになった

(九州工業大学 情報工学 四年 結川高志)

私はこの合宿で多くのことを学び、気づかされました。そのなかで特に「歴史を学ぶことの大切さ」を実感しました。小柳先生の、「『義を見てせざるは勇なきなり』という言葉の意味を別の言葉で理解することもできるが、そのままの言葉で自分の中に取り入れないとすぐには出てこない」と言われた言葉がとて心に残っています。それまでの自分は、意

味を取ればよいと思っていました。この言葉にはつとさ  
せられました。「古典を輪読する意義」ひいては、「歴史を  
学ぶことの意義」は、こういうところにあるのだと思います。

またこの合宿やこれまでの勉強を通してとても嬉しかった  
ことは、戦争に行った祖父をととても大切に思えるようになった  
ことです。今までの自分は日本は悪い戦争をしたと思込  
んでいたので、祖父のことが嫌いではなかったのですが、信  
じることはできませんでした。日本を守ってくれたのはそん  
な祖父のような人なのだと分かったとき、心の底から「あり  
がとう」と言いたくなりました。実家に帰って、祖父の墓参  
りをするときに、この言葉を伝えたいと思います。

国のため家族のために戦ひし祖父を今では誇りにぞ思ふ

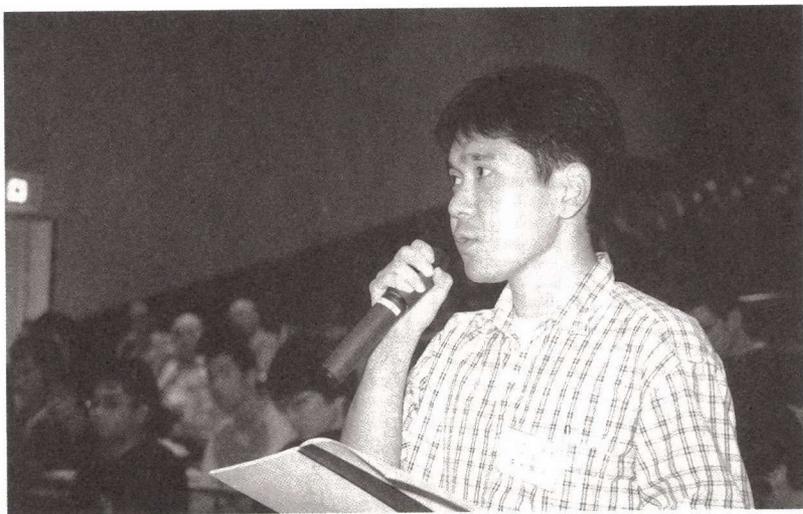
### 合宿の体験をこれからの人生に繋げたい

(明星大学 日本文化 二年 宮地順造)

初めての参加でしたが、期待以上の合宿内容で大変満足で  
きました。この合宿で学んだことを忘れないように、また、  
ここを出発点として新たな分野での知識を深めてゆきたいと  
思いました。

そして、この合宿で得た友人たちとこれからも関わりを持  
ち、様々のことを学び合えれば幸いです。この合宿でのよき  
経験をこれからの人生に繋げてゆきたいです。

夜更けまで語りし友と別るるは名残惜しきと思ほゆるかな



質疑応答の一コマ。真剣なまなざしで質問する学生、講師の先生方は一つ一つ真心をこめて答へられた。

## 短歌は素晴らしいコミュニケーションの手段

(熊本学園大学 社会福祉 一年 折田安正)

今回二度目の合宿となりました。今年は短歌を作ることを楽しみにしていたので、友人と夜中まで短歌を詠み合いながら語りました。短歌は素晴らしいコミュニケーションの手段であり、短歌を通じて多くの友人と楽しい時間を過ごしました。また、我が国の歴史を知るためには古典や漢文を読めなければならぬことを痛感し、来年の合宿までには少しくらい読めるように努力してみようと思いました。

この合宿は全国から多くの人が集う、出会いの場であると思います。去年・今年と合宿に参加するたびに友人が増え、様々な話を聞かせていただくことが自分にとって非常に貴重な体験になっております。出会った友らに、また会えることを楽しみにしていると伝えたいです。仕事や学校などが忙しく毎年は来られない方もいると思います。五年・十年と間があいても、また集いの場へ来てほしいと思います。

御友らと結びし心の絆糸遠く離れど切るることなし

## 素晴らしい班員との出会いに感謝して

(熊本県立宇土高等学校教諭 久保田 真)

鶴川祐一郎君

防大で鍛へし体を持つ君の時折浮かべる笑顔やさしも

末次信宏君

汗だくで手早く焼きそば作りたる君の姿の頼もしきかな

森永賢司君

おだやかな言葉で語る君なれど人を思ふの心熱しも

結川高志君 (全体感想発表)

言葉にて表すことに苦しみて過ごせし君が壇上に立つ

武田有朋君

初日より積極的に発言す君の姿の意欲にあふれて

宮地順造君

年若き身をば自覚しやりますと気迫を見せるは嬉しかり

折田安正君

友どちと語らふことを激しくも求むる君の心ずがしき

友と心を通わせることができた

(東京大学 法学部 三年 武田有朋)

私にとつては二度目の参加となった今回の合宿であるが、前回以上に刺激的だった。そんな中で特に強く感じたのは、人との縁の大切さであった。新たな友との縁を結び、腹を割って話し合えるという経験は本当に嬉しいものなのだとも確認することが出来た。

というのも、今回の合宿では、班員に非常に恵まれていたからである。合宿初日から心ゆくまで話すことが出来たし、合宿導入講義後の班別研修を終えて班員の顔を見渡した時に、

皆が昔からの友のように見えたことは今でもはっきりと覚えて  
いる。家庭の事情で三日目に帰ることになったのが残念で  
仕方なかったが、新たな友たちと二泊三日の間、しっかりと  
心を通わせることができた。彼らとの縁を結べたことが、今  
回の合宿での最大の収穫であった。

班員の皆とことん話して思ったのは、彼らの言葉は生き  
ているなあということだ。自分の実体験に基づいて、自分の  
言葉で話そうとする人が多く、彼らの言葉を私は素直に受け  
入れ、共感を抱くことができた。森永君が拉致問題に自分が  
いかに取り組んでいるかということを中心に話してくれ、拉  
致問題が一気に身近なものに感じられたし、介護を頑張っ  
ている折田君と夜通し話したときも、仕事に対しても短歌に対  
しても真摯に真正面からぶつかっていつている彼の姿があり  
ありと感じられ、嬉しくなったし、刺激にもなった。他にも  
班員みんなが自分という存在の礎をきちんと持ち、自分の感  
じ方で話をしようとする班だった。こういった付き合いを今  
の世の中でできるというのは、本当に希有なことだと思う。  
それを体験できた私は、本当に恵まれているのだろう。

今合宿を振り返って一番強く感じるのは、学生にとつての  
合宿の本質とは、本当にいい友を作るところにあるのだろうか  
ということだ。実際今回得た友人との付き合いは今後もずつ  
と大切にしていきたいと強く思っている。そして、自分自身  
もこういった付き合いができる友達をどんどん増やしてい  
きたいと思うようになった。秋からは就職に向けての勉強に本



御講義の後、伊藤先生は、班別研修に参加されて学生の疑問に丁寧に答へられた。

腰を入れなければならなくなるが、勉強会も大切にしようと思っている。これからも、いい友といい付き合いをしていきたい。

富士のもとで我が得たるは心より語りあひたる友らなりけり  
み友らと心を通はす付き合ひを学びのうちに育みゆかむ

## 第六班——男子学生——

この合宿に参加できた事がただ嬉しい

（國學院大學 神道学専攻科 大和哲司）  
他の人の持つ理に触れる事。本当に嬉しく、楽しい。他の人の持つ考え方を自分の中に取り込むことは、本当に自分の成長を実感させた。

他の人の持つ思想を知る。本当に触発される。多くの発言や御講義がその通りであつたわけではない。ただ、本当にごく稀にしか得られないことが多々あつた事は、この合宿教室のような特殊な場でなければ出会えなかつた事だと思ふ。本当にこの合宿教室に参加できて良かった。

純粹な己の中にある実を告ぐる眼差しいと輝きたり

貴重な自分作りの場を頂いた

（京都大学 総合人間学部 二年 中原有輝）

この合宿での友人との交わりというものは、日本の事について考えようと集つた語らいの場という、私の学生生活の中でも特別な意味合いを持つ、日本の真の歴史や優れた文化について思いを巡らす機会は日常ではなかなか得られない、周囲にそのような意識を持つ者がいないと、勉強しようという気持ちになるのも難しいものである。

しかし、この合宿に來れば、祖国日本について徹底的に考える場がある。そして、そこで吸収した「日本を愛しよう、信じよう」という気持ちは、合宿から帰つた後の私生活における心の基盤になるように思える。諸先生方、先輩方の日本を思う心、それに基づくご自身の人生における体験談を、時には講堂で厳肅に、また時には班別研修の場で心打ち解け合いながらお聞きする時間は、「中原有輝」という人間を形作る上で、大きな影響を与えてくれていると心から思つた。

桑木康宏先輩の体験発表を聞いて

堂々と自信を持ちて生きようと全身以つて語り給ひし

語り合える友に出会えた

（九州工業大学 情報工学部 一年 林 祥人）

今回初めてこの合宿に参加させて頂き、多くのことを感じ

ました。最も心に残った事は（友の大切さ）です。五日前まで全く知らなかった人達が全国より集い、共に語り合うという事はすばらしい喜びでした。諸先生方に御講義して頂いた事を夜遅くまで語り合ったりしました。短歌相互批評では詠み手が「こう詠みたかったんだ」と思えるまで班員みんなで考えたりしました。四泊五日という短い間でしたが、僕から多くの事を学び、多くの事を考えるきっかけをもらうことができました。

これからも、友と日本について、祖先について語りたと思うし、また語り合える友をもっと作りたいと思います。それと同時に自分自身も常に学び、考え、実行できる人間になれるよう努力したいと思います。本当に短い期間でしたが、この合宿に参加できたことをとても嬉しく思います。

夏の夜に新しき友と語り合ひしこの思ひ出を永久に忘れず

「己の身より見を起さん」と友と誓った

（佐賀大学 理工 五年 片岡正憲）

最も心に残ったのは、長内先生のお話の中にあつた「親を思う心は国を思う心とは別々のものではなく、共に同じ心、真心から発している」という言葉でした。

松陰先生の「己の地、己の身より見を起こすべし」という言葉と、福沢諭吉の「国の独立に係る所に逢えば、たちまちこれに感動してあたかも蜂尾の刺たいに触るるがごとく心身



二日目の夜。国民文化研究会副理事長・小柳陽太郎先生による古典輪読導入講義が行はれた。先生は「古典はいはゆる古文ではない。道徳は結局のところ感動だ。感動をともしながら読んだといふ思ひが人生を豊にする」と、古典輪読の意義を語られた。

ともに穎敏ならんことを欲するのみ」という言葉がなかなか解らない中で、長内先生の言葉を受け、自分は国家の危機というものを頭で考えていた事に気づきました。

そのとき、己が身というのは自分の心から発する真心であると思いました。班員と共に「自分は国のことに対して誠実にどれだけ思っていたらうか」と省み、夜中まで語り合った四人と「本当に少しずつでも、国のために尽くしていきたい自分であろう」と誓いました。この誓いを忘れずに、北朝鮮有事などに全力をもって立ち向かっていきたい、己の身より心を込めて国と向き合っていきたいと思えます。

心から素直に思ひを語り合ひ共に過ごせし夜忘れざりけり  
今日よりは少しづつでも国のため誠尽くさむと共に誓へり

### 友の言葉が私を生かす

(亜細亜大学 国際関係 四年 野村 亮)

合宿参加は四回目ですが今年も多くの御講義に感銘を受けました。ただ、私が最も心に残ったことは、語り合いの中から生まれるものの大切さです。それは「友の言葉が私を生かす」ということです。私はこの合宿の中で、友の真剣で素直な言葉をそのまま受け入れることが出来た。それによって心動かされ、自らを深く省みることが出来ました。私の心構えが何と未熟で、真剣な相手、友に礼を欠いていたのか気づかされました。そして、私は心から感動し、その友ら

に答えるべく、自らを律し、語り合いました。友との素直な交わりは、決して打算的なものではありませんでした。こう感じたとき、語り合い、共に何かをなそうとすることが、楽しくて仕方なく感じました。私たちの偉大な先人たちや諸先生方も同様に生きてきたのではないかと思います。

友からのまごころこもる言の葉に思ひ起こせしつしみの心

### 私は合宿で学んだ事を鵜呑みにしない

(龍谷大学 経営 四年 菊池太一郎)

この合宿に来てお話を聞いていると、私が小・中・高と教科書で勉強してきた事とまったく逆に感じる事が多々ありました。「アー、あれは嘘だ。本当はこうだ。」という事を聞き、「あれだけ信用してきた大人達の作った教科書は何だったのか。だが、十二年かけて学んだことをたった五日で否定することも無理だ。教科書を作った大人達は何と無責任なんだ!」と思い、一瞬自分達が被害者になった気分でした。

この合宿をきっかけにしたい。誰の話でも鵜呑みにして、理解した振りをして、「素晴らしい」などと口に出すことは、私には到底出来ません。話や事柄一つ一つを自分自身で見つめ、体験し、「理解した」と私が感じるまでそのような格好の良い言葉はとっておきたい。恥をたくさんかきながら、身をもって体験していく事が実学であると私は考えます。先輩達以上に努力して、この素晴らしい我が国日本の正しい認識

を次世代に伝えていきたい。

つやつけず歩んでゆきたい我が人生真の誠ぞ学ばんがため

## 大きな「公」と小さな「公」

(皇學館大学 文 三年 田米 巧)

今回初めての合宿で多くの事を学びましたが、実感として、また確信となつて自分の中に湧いてこないというのが正直なところです。それは、やはり「これからの日本また世界でこのような生き方が通用するのか、仮にその生き方を私自身が出来たとして賛美されるのか」という合理主義的かつ打算的な考え方が私の心の中にあるからであろう。

例えば「公」という事に関しては、家族・故郷といった数多くの小さな「公」があつて、そして国という一つの大きな「公」ができあがっていると私は思うのです。では、大きな「公」と小さな「公」同時に別々の危機が訪れたらどうすれば良いのでしょうか。多くの先人達はこの局面における葛藤を乗り越え、選択してきたと思うのです。どうして、そこで大きな「公」を選択できたのか、私はまだそこに確信が持てませんし、自分自身がそのような立場にさらされた時どうすべきなのか分かりません。

志一にする友と語れども大和心は未だに見えず



三日目の午前、明星大学教授・東京大学名誉教授・小堀桂一郎先生による「日本人の生き方」と題する御講義が行はれ、「多くの古典の名歌とともに、現代の日本人の生き方の中に和歌の伝統がつながっていき続けてゐる」と述べられた。

## 温気が引き出された占部先生の御講義

(福岡県立久留米高等学校 講師 小林国平)

「みなさんの心の中に温気はありますか」という占部先生の問いが心に残っている。福住正兄の言葉であるが、書物や先生方の御講義は氷又は氷柱であつて、学ぶ側の心の中にそれを解かす温気を持たねばならないという教えは、私の学ぶ姿勢を正すものであつたように思う。

特に、①五箇条の御誓文は明治天皇が神に誓うという儀式形態であることの重要性、②自由民権運動には五箇条の御誓文の大意を徹底するための第二維新という意義があつたこと、③戦後、昭和天皇が何よりもまず五箇条の御誓文を国民にお示しになつた真情など、誇るべき史実によつて今までの誤つた解釈を一掃され、驚きと共に、生徒に胸を張つて御誓文について教えることが出来る喜びが心の底から湧いてくるのを感じた。

正に占部先生が解かされた五箇条の御誓文という氷柱を、自ずと引き出された私の温気が水に解かし、潤沢しているかのようにあつた。私も生徒の温気を引き出すことの出来る教師を目指していきたい。

桑木兄の体験発表を聴きて

自らの指針綴りしノート読まるる桑木兄の声力強しも

日本を変へる気概に満ち満ちし御姿尊く我言葉出す

言葉出す自づと胸に込み上げし悔しき思ひ忘れざらめや

これからの日本を共に背負はんと誓ひし先輩のあるぞ嬉しき

## 第十一班—女子学生—

両親から授かつた尊い命を大切にしたい

(早稲田大学 教育 二年 小林由香利)

私がこの合宿に参加して心に残つたことが二つあります。一つ目は、長内先生がご講話の中で、「親を思ふ心が強ければ強いほど、国を思ふ心が強いのです。」とおっしゃられたことです。大変心温まるお話でした。私は両親から尊い命を授かり、今かうして元気に生活してゐます。合宿で良き友と学び合ふことができるのも、決して当たり前のことではなく、両親が私を今まで健康に育ててくれたからこそだと感謝の気持ちで一杯です。

二つ目は、人とのつきあひを通じ、人の心と心が繋がつて行くことの素晴らしさです。今回の合宿で、私は班長といふ役割を頂きました。相手の心に語りかける言葉を選びながら皆が和をもつて学び合つて行きたいと思ひ努めました。そして、班別研修や短歌相互批評を通じ、皆で思ひを語り合ふことができ、とても幸せを感じました。

私のことを支へて下さつた先生方、先輩方、友人に大変感謝してをります。ありがたうございました。

当り前のことを当り前に行ふことの難しさ

(明治大学短期大学 経済 一年 内海美咲)

「ありがとうございました」合宿教室を終へるにあたり、感想を一言で言ふとするならば、私はこの言葉を選ぶ。そして、感謝の気持ちで終はることのできる今を幸福に思ふ。

自分の視野の狭さ、心の未熟さ、考への浅さ……。気づかされたこと、教へられたことが多かった。その度に頭の下がる思ひがした。

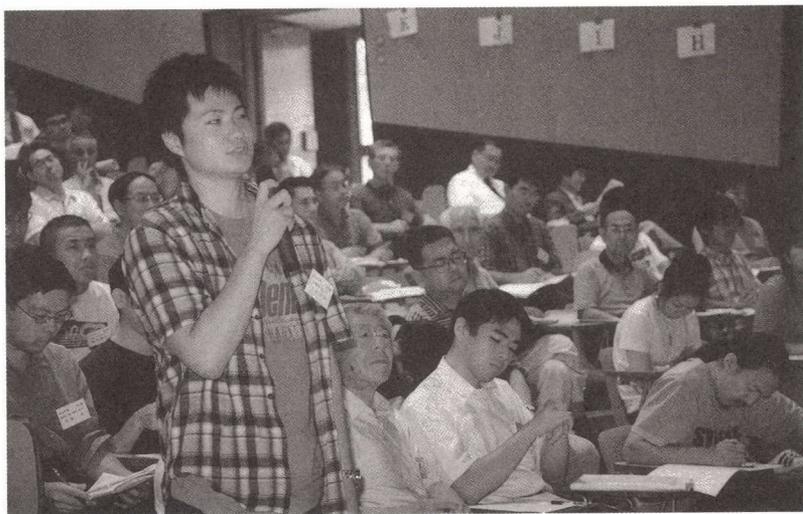
二日目、小柳先生が女子用のプリントを用意して下さいました。ご講義では時間がなく、読むことができなかったのだが、班別輪読を行ってゐたところへ、わざわざ先生が足を運んで下さり、話をして下さった。私は、先生のその気遣ひに本当に心を動かされた。

最終日には、足を引きずってごみ袋を運ぶ私の姿を見兼ねた桑木さん、中村さんが声を掛け、手伝って下さった。

当り前のことを当り前に行ふことはなかなか難しいことだ。また、素晴らしい班員、班付の先生に恵まれたことにも感謝したい。

父の短歌を読んで

裏方で一度も見えぬ我が父の働く姿を想ひ感謝す



小堀先生の御講義後、熱心に質問する学生。

自分の中の観念が崩れていった

(東北女子短期大学 生活 二年 松永尚子)

たった五日間という短い期間でしたが、本当に多くのことを学ばせていただきました。

酒村先生のご講義を始め、たくさんの先生方の貴重なお話を聞くたびに、自分の中の何かが変わっていくのが分かりました。今まで私に植えつけられた観念が一つ一つ崩れ、またそこから整理されるといふ繰り返しが起こっていました。その中でやはり葛藤もありましたし、素直に受け入れられるものもありました。そうした心の中の変化は、見えないにもかかわらず、自分自身少しではありますが人間として成長したという実感が持て、心から嬉しく思います。

この合宿で学び得たものは、何よりの財産であり、これからの人生の糧として、常に心に止めておき、温め続けていこうと思います。今後更に自分を磨き、高め上げるため日々努力していきます。関係者の皆様、本当にありがとうございます。来年もまた是非参加したいと思えます。

学び得た多くの言の葉胸に止め我が精神を鍛へゆきたし

父母や友人にまごころを尽くしたい

(東北女子短期大学 保育 二年 吉田あすか)

合宿教室に参加し、不安や戸惑いで一杯でしたが、良き友

に巡り合うことができ、本当に良かったと思っています。四日目に体調を崩したときも班の友人が心配をしてくれ、感謝の気持ちで一杯でした。合宿教室で得た友人をこれからも大切にしていきたいと思いました。

ご講義は、とても難しいものもありましたが、今までの勉強のあり方や、日々の生活のあり方を考えさせられました。

私は今まで日本の歴史を誤まって学び、愛国心を持たずに来たのではないかと思いました。酒村先生は、ご講義の中で「悪いことに対して、悪いと言える態度が必要である」と話されましたが、これからは何が悪で、何が善なのか、正しくものを見る目と、それを言える勇氣を持ちたいと思いました。

また、私が一番感動したのは、長内先生のご講話で、父母を思う気持ちや国を思う気持ちであり、公に通ずる道であり、それはまごころであるとおっしゃっていたことです。このお言葉を心の中で温め続け、父母、友人、周りの人々に私なりのまごころを尽くしていきたいと思いました。

合宿で得た感動を刻みつつ進みゆきなむ夢に向ひて

物事の背景を知ることができた

(東北女子大学 家政 二年 坂下千佳子)

今回この合宿に初めて参加して、始めは自分には場違いなのではと思っていました。正直講義内容は難しく、理解できないことが多くありましたが、班別研修の時に感想や疑問点

をお互いに出し合ううちに、自分とは違う考えや価値観に触れ、「なるほど」と思うことが多々ありました。ご講義は私がかつて受けていた授業とは違い、物事の背景を学ぶことができずにはいられません。背景を知ることが、素直に受け止めることができずにはいけません。学ぶことがとても多く、新たな一歩を踏み出すきっかけになったように思います。

また、友との出会いも私にとつて忘れられない思い出となりました。四泊五日を共に過ごし、いろいろなことを語り合い、友情を深めることができました。

この合宿に参加するきっかけとなった学長先生に感謝すると共に、運営して下さいました方々、講義をして下さった先生方に感謝したいです。これで終わるのではなく、ここをスタートとして、新たに頑張りたいと思います。

日本の本尊歴史を知るうちに国思ふ心芽生えたるかな

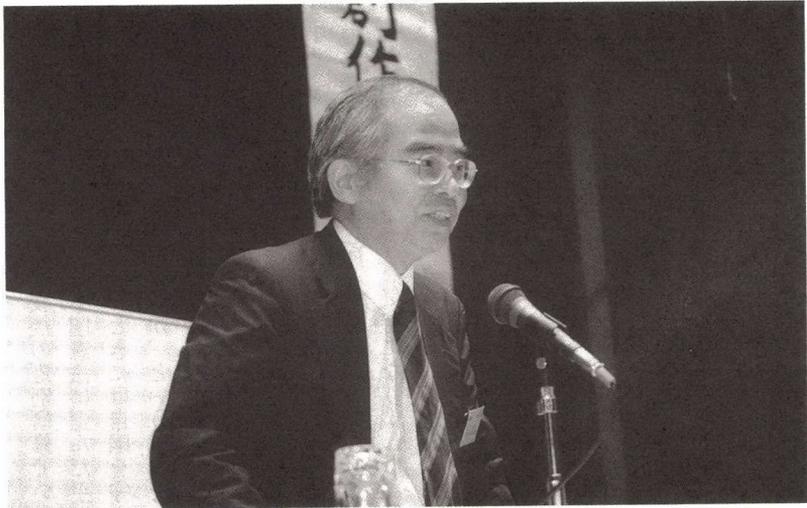
合宿で出会ひし友と語り合ひ友情深めたこの五日間

今日この日共に語りし友とちと別れてゆくは寂しかりけり

## 日本人として生きるということ

(日本青年協議会 中園まどか)

この度、合宿教室に参加させて戴き、久しぶりに古典をひもとく中で言葉の美しさ、律動を感じ、胸が躍動する思いがし、本当に充実した五日間を過ごさせて戴きました。又、この合宿教室で小柳先生や長内先生のお姿を拝見する中で日本



戸田建設開発課長・青山直幸先生による「創作短歌全体批評」。各班から一、二首を選び作者の気持ちを推し量りながら丁寧に添削してゆかれた。

人として生きるということを具体的に教えて戴いた気が致しました。二十七年間お母様がお使いになられていた風呂敷を今も大切に持つていらつしやる長内先生。女性の研修の為に吉田松陰先生が妹の千代にあてた手紙の資料をご準備して下さった小柳先生。親や私達若い世代に対しての細やかな愛情と信頼を寄せておられる先生方のお姿を拝見するたび私も日本人として少しでも先生方のお姿に近づいていきたいと思いました。

私が勤めている職場は日頃から日本で起っている諸問題に対して行動を起こしていくということが仕事となっています。ともすれば私自身目まぐるしく自己を顧りみないことが多くありますが、その時こそ自己をしつかりと顧み、又古典を日々ひもとく中で充実した気持ちをもち、仕事に臨みたいと思います。

## 第十二班—女子学生—

日本のことを我事として話し合う

(上智大学 文 四年 青砥敬子)

今回の合宿で一番心に残っていることは、日本のことを自分の問題としてみんなと語り合えたことです。私は、日頃感じていた疑問への解答が見つからず、すつきりせずにいまし

た。私は、この問題を表面的にしか考えることができず、心につつかえていたのです。

しかし、伊藤先生のご講義後の班別研修でいろいろな話をする事ができました。日本国憲法は歪んだ平和主義を唱えています。敵が攻めて来たときには自国を守るだけの力をつける必要があるのではないか、という討論をしました。

私がうれしかったのは、班員全員が日本の抱える問題を自分のこととして捉え、語り合うことができたということです。伊藤先生の熱いお気持ちに触れ、私たちも同じような気持ちになれたことがうれしく思いました。表面的にしか考えることができなかったのが、深く考えることで、心にかかった雲がすっと晴れていったような気持ちになりました。最後に、先生方、親友となった班員のみなさん、ありがとうございました。心より涙を流して語り合へる友に出会ひて我はうれしき

## 班友と学び合った日本の歴史と文化

(東北女子大学 家政 二年 加藤亜紀)

今回、初めて全国学生青年合宿教室に参加させていただきました。私がこの合宿に参加したきっかけは、大学の先生に勧められたことからでした。

合宿所へ来たときは、不安や戸惑ひがあり、「五日間を過ごしていけるだらうか」と思っておりました。一日目の班別研修での班友の意見を聞き合ふ内にわかり合へたと実感させら

れました。私は今回の合宿に参加し、たくさん偉大な先生方のご講義を聞き、日本人として恥づかしいと思ふことがたくさんありました。今まで十九年間、日本に生まれ、日本人として生きてきたのですが、学校で学ぶことをそのまま暗記してきたやうに思へてなりません。しかし、今回の合宿のご講義では、知られざる日本の歴史、文化を身をもって、学びました。

ありがとうございました。

班友と別れを惜しみ涙ぐみ時の過ぎるを忘れ語りぬ

日本人として誇りが持てた

(東北女子短期大学 保育 二年 伊藤仁美)

これまで国内外の情勢や、日本の歴史に疎く、興味を持ってないでゐました。ニュースを見ても深く考へることもなく、新聞も最後まで読んでゐなかつたため、知識も何もない自分が今はとても恥づかしく、また、少しでも勉強して来なかつたことが悔やまれます。社会科といへば、中学・高校の授業で学んだことしか思ひ浮かびません。またその授業といふのも、年代やその時代の人物などを受験のために覚えるといふ感じが自分ではありましたので、時代背景や内容を詳しく味はうことがありませんでした。しかし、諸先生方のご講義をお聴きして、戦争時代の兵隊の思ひや日本の真実といふものが学べ、今は誇りを持って日本人で良かったと感じてゐます。



カメラ・レポート15

班別による短歌相互批評。班員の歌を一人づつ皆で作者の気持ちを確かめながら、歌の表現がよりの確になるやうに心を傾けて添削してゆく。

熱い思ひ語らひながら涙する友の姿に胸熱くなる  
よき出会ひこのめぐり逢ひに感謝しつつ大切にすることを忘れまじ

### 後世に語り継ぎたい美しい日本

(東北女子短期大学 生活 二年 出町麻乃)

今回、この合宿は大学の先生方のご推薦があり、私としては軽い気持ちで参加しました。それまでは君が代を歌ふことも、他の歌を歌ふやうに強い思ひ入れもなく歌つてゐました。しかし、諸先生方のたくさんの方の力あるご講義を聴き、日本人であるのに日本のことを全く知らないといふことに気づき、愕然としました。日本のために力を捧げて下さった先人方のお蔭で今の私があるのだと感じ、先人方のためにも微力ながらこの日本を守っていかねければと強く思ふやうになりました。長い歴史と素晴らしい伝統文化、言語をもっとたくさん勉強し、正しい歴史と美しい日本を後世に語り継ぐことがこれからの日本を守ることだと思ひました。先人方の思ひを聴き、考へ方も日本に対する思ひも全く変はりませんでした。この合宿で得たことは数へきれない程あり、どれもこれからの私の人生に多大な影響を与へるものだと思ひます。

最後になりましたが、このやうな合宿を開いて下さった国文研の皆様、ご講義して下さいました先生方、共に涙を流し分かち合った班のメンバー、そして私たちの日本を愛し、命を捧げて下さった先人の方々に心から感謝申し上げます。ありが

たうございました。

先人の熱い思ひに聞き入りて我の中には変はりしものあり  
はらからと共に流せしあの涙永遠に忘れじと心に誓ふ

### 父を通じて「真心」の大切さを学ぶ

(東京女子大学 文理 三年 中島朋子)

この合宿で、長内先生の「国を愛する心と親を愛する心は同じことであり、それはすなわち「真心」から発せられる」というお言葉に大変感銘を受けました。今回父と一緒にこの合宿に参加しましたが、父が何故こんなに国のためにさまざまな活動や勉強をしているのかと正直、疑問に思う部分もありましたが、この合宿を通して、そう思っていた自分の浅はかさを感じると共に、日々頑張る父を誇りに思うと同時に、そんな父に敬意を表したいと思ひます。

長内先生から学んだ「国を愛する心と親を愛する心、それはすなわち「真心」から発せられる」というお言葉のように、真心を持って、両親に接していきたいと思ひます。ここまで自分が学び感ずることができるとは思ひませんでした。本当にこの合宿に参加できて嬉しく思ひます。ありがとうございました。

合宿で友と語りし多かるは我が人生の糧になるべし

我が父と語りし時は少なかれど共に学べし事ぞうれしき

いろいろ考へさせられた合宿

(獨協大学 外国語学部 二年 高橋由佳)

軽い気持から参加した私ですが、まさかこんなに深くいろいろなことを考へるとは思ってもみませんでした。

合宿での講義では、自分が今までに持つてゐた歴史観と全く違ふ歴史観があるのだといふことを知り、とても驚きました。私の祖母は戦争中、満州にをり、日本は「侵略」したのだと思つてゐた私にとつて、祖母の「中国人のお友達とも仲良く生活していた」といふ話はいつも矛盾を感じていました。その意味が理解できたやうな気がします。

短歌創作も高校卒業以来、久しぶりのことだったので、とても楽しく感じました。自分の心の感動を三十一文字といふ短い言葉の中に凝縮することの面白さ、楽しさを改めて実感しました。また、この合宿で古典といふ先人から伝はる言葉の美しさといふものについて初めて考へ、短歌を創作することの素晴らしさを思ひました。

夜のつどひで「ふるさと」を歌ひて

世代こえ心ひとつに大合唱その感動に鳥肌立ちぬ

「ふるさと」を歌ひて実感す先人より伝はる言葉の素晴らしさ



社会人参加者を対象とした住友電装(株)生産技術部長・布瀬雅義先生によるご講話。ご息女の学校でのご体験等をもとに、参加者各々が地元で国の一隅を照らす燈火とならうと呼びかけられた。

## 真心について学び合ふ

(熊本県立天草高等学校教諭 今村武人)

私は社会人班の班員、その次に女子班の班付きとして参加したが、両班とも熱心な議論を交はし、参加者の真摯な姿に感銘を受けた。殊に女子班では長内先生がご講義で言はれた「親を思ふ心と国を思ふ心は同じです。それを真心といひます」という言葉の意味をみんなよく噛みしめた。また、「真心」は何か、「信」とは何かについて議論を深め合った。今回の合宿は、同郷の折田豊生さんが運営委員長を務められた。その責任感の強さに敬服させられるが、その折田さんが「合宿を顧みて」の時間に、時折胸を詰まらせながら、「この国を守るものは他に誰もいない。自分しかゐないのだ」と述べられ、改めて折田さんの志の大きさに接し、胸が熱くなる思ひがした。これこそ人の「真心」だと思ふ。私ももつと研鑽を積み重ねねばならないと反省させられた次第である。

夜の集ひで女子学生が唱歌「ふるさと」を歌ふ

ふるさとの父母を想ひて歌ひたる乙女らの声は夜空に響く

また感動してしまつた

(企画デザイン工房banup 諏訪田尚子)

また感動してしまつた。今回は女子班の班付をさせていだきました。皆実に素直で、心の清さにこちらの心も洗はれ

ました。かう思はなければならぬと無理に思つてないかと心配しましたが、加藤さんが疑問や引掛かりを正直に話してくれて、皆がより深く考へ直す切掛けとなりました。一番印象に残つた事は、親孝行について話し合つたことです。皆それぞれ事情を知り、涙して語り合ひました。そして、親孝行とは何かをあらためて考へ直すことができました。まごころのこもつた親孝行をしてゆかうと決意しました。体験発表もたくさんの方々御蔭で無事終へることができました。そして合宿を運営されてゐる国文研の方々、思ひ切つて来てくれた学生さん、社会人の方々御蔭で今年も充実した合宿となりました。ありがとうございました。

けふこそとまちにまちたる富士の嶺やうやくあらはれ心晴れけり

### 第十三班—女子学生—

合宿で知つた「強い想ひ」

(東北女子大学 家政 二年 鈴木綾子)

私はこの合宿に参加して、今までの日本に対する想いを考え直し、とても強い想ひへと変えることができた。日本の歴史などについてある程度分かっていると思つていたが、講義を受けて班別研修を行ううち、実際に起こつた事実は言葉では表せないほど深い内容のものであり、そこで携わつた人々

は家族だけでなく、友人や全てのの人々とともに辛い時代を生  
き、辛い体験をしていたことを、心に沁みわたるほど印象深  
く心に残すことができた。私は今まで、祖先に対して本当に  
深い気持ちでありがとうという言葉を投げかけたことはな  
かった。だが今では祖先が私たちに与えてくれた平和で、自  
由な日本を心から大切に思えるように残してくれたことに、  
本当に感謝できるようになった。本当に嬉しく思います。ま  
た短歌を作ったり批評し合った体験を通して、この合宿の中  
でできた真の友情を知ることができた。また、日本人への想  
いや親への想いもあらためて考え直すことができました。新  
しい気持ちでこれからの生活を行えることと思います。

最後の夜友との深き友情を言葉に出さずも星空に誓ふ

## 感謝の言葉

(東北女子大学 家政 二年 加賀彩織)

この合宿への参加は、最初不安でいっぱいであったが、講  
義を受けていくうちに、自分が何も知らず今までを過ごして  
きたことを痛感しました。講師の先生方が伝えたいことをよ  
く理解できたとはいえませんが、しかし班で話し合うことで、  
あいまいな点や聞き逃していたことをなどを気付かされ、意  
見を出しあう中で理解していくことができました。あまりの  
勉強不足という思いもありつつも、でも班員と語り合えたこ  
と、今まで学んだことのなかった歴史の真実に出会えたこと



カメラ・レポート17

三日目の夜。国民文化研究会副会長・宝辺正久先生による「命を捨てて」と題する御講話が行なはれた。「命を捨てても国のために尽くす、これが自分達が生きた昭和といふ時代の青春であり、この様な青春が確かにあつたといふことを若い皆さんもよくよく考えてほしい」と語られた。

に感謝して、これからいかにしたいと思えます。

また、班別研修で何もまとまりなく、深い考えもない私の意見に耳を傾け、それに対して意見を言ってくれた班員との出会い、そして短い間ではありましたが共に行動できたこと、貴重な体験をさせていただいたことを嬉しく思い、感謝しています。ありがとうございます。

夜のつどひで全員で「ふるさと」を歌って

合宿で共に学びし参加者は世代を超えて一つの輪となる

## 故郷への思い

(東北女子短期大学 生活 二年 丈口幸世)

まったく知識が無に近く、軽い気持ちで参加した私にとつて、合宿初日は衝撃の一日でした。自分なんかここにいても良いのか、場違いではないかとも思い、早く帰りたくなつたのを覚えている。だが日に日に考えて討論していくことで、自分の中に色々なことが吸収されていくことを感じるようになった。そしてそれと共に、自分の故郷をあらためて考えることができた。私の実家は青森の山の中の何もない所で、以前はそんな家を早く出たいと思っていた。だが今は、祖父母を育み、父母を育み、私を友を育み、そしてこの土地を守り、この地に眠る先人たちを静かに抱いている故郷を愛おしく思う。自分が日本人としてこの時代に生まれたこと、この地で生きていくことに意義を持つていけるように、この合宿のこ

とを忘れず精進していきたいと思えます。日本という国をしつかりと理解し、次世代の子どもを育てていける日本人に、教育者になれるよう努めていきたいと思えます。

忘れえぬ友よ我は進みゆく君と誓ひし明日へのこの道

## 素直な心

(九州工業大学 工 四年 木城理恵)

合宿を通して、素直な心で物を見、正しい言葉で表わすことを学びました。私達の物を見る目がいかに占領政策で曇っているか痛感した。日本を肯定することから始める。この言葉の意味の深さを感じた。和歌を創作し、素直であること、正しく表わすことの難しさを実感しました。私は素直であることを頭で理解しても、体にしみわたらせるには至っていません。だが古典を読み、先人らの言葉を水から水に戻す。水に戻った言葉が私の中にすうっと流れこんでくる。その時の感動。感銘。大変素晴らしいことだと思う。信じるに値する国、日本に生まれたことに感謝し、父母祖父母、祖先に感謝し、日本人であることに誇りをもち、祖国日本に恥じない生き方をしたい。帰ったらすぐに入院中の祖父を見舞い、ありがとうと伝えます。合宿に参加されたみなさん、次世代を担うもとして志を持ちともにあげ、子どもたちに日本が辿った真の歴史、日本の誇りを伝えていきましょう。手を合はせ祖先のことを偲ぶれば我が身命の尊さを知る

見たままを感じたままをつづりゆく和歌の楽しさここにありけり

## 五箇条の御誓文のお言葉

(福岡大学 科目等履修生 小野実里)

小学生の時に習ってはいたが、天皇陛下が国民に向けて発布したぐらいにしか考えていなかった。しかし占部先生のお話をお聞きする中で、たくさんの方の想いや願いが詰まって発布されたものであることを知った。班別討論で一つ一つのお言葉に迫っていく中で大変心に残ったのは、「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス」というお言葉だった。「官武一途庶民」と書かれ、「臣民」とか「国民」とか略されていない。占部先生は各々が「人生の生きがいをうるように」と解され、この御誓文のお言葉は一人一人の国民のことを祈られる温かいお言葉だと感じた。言葉の姿としてこのように銘記されていることを思うとき、この言葉に責任をおとりになろうとし、共に志をとげようと、国民のことをすべて背負われようと思われていると思われてきた。そのことを「朕躬ヲ以テ衆ニ先シ天地神明ニ誓ヒ」と、誰よりも一番先に神に誓われ、天皇としてのご覚悟を定められていると感じた。十六歳の天皇陛下が、この覚悟をさだめておられる姿に感銘を受けた。この明治という時代は明治天皇のご決意より始まったのだと思はれてきた。



慰霊祭に先立ち、小田原市立矢作小学校長・岩越豊雄先生により、慰霊祭の意義と祭の次第、心構へについて説明がなされた。

## 第二十一班——社会人——

素直な心で見えるものが正しいことだと学んだ

(市原市在住 牧美和子)

私は昨年を引き続き二回目の参加をさせて頂きました。今年も学んだことが沢山ありました。この合宿の良い所は一つの講義で起きた感動や疑問がまた別の講義や班別研修で関わってきたり学びが深まったり、疑問が氷解することだと思います。

今回私が感動したことは、伊藤哲夫先生が吉田茂、岸信介に関して表現された「愛国心ある者におのみ『国の置かれた状況』が見える」という言葉でした。私共の日常生活においても「自分の置かれた状況（暗に未来が見えるということも意味していると思います）」が見えるように対象物に愛情をもつて接していきたいと思います。

私は五箇条の御誓文に関するご講義で明治天皇のお言葉を知りました。その後の日本は明治天皇が危惧されていた通りの歴史が刻まれましたが、未来を見通されていたということ、いかに明治天皇が日本を愛しておられたかということ、物語っています。そして現在の私達がそのお心を受け継いでいないことを申し訳なく思います。

日常生活の繁忙さや私共を惑わせようとする情報操作に負

けずに、真心の大切さを忘れずにこれから生きていきたいと思えます。

夜の集ひにて

月清し皆の心が歌になり火の粉と共に天に昇りゆく

自分の思いを素直に話せた

(熊本市長嶺中学校 理科教諭 渡邊五十二)

全国学生青年合宿教室に参加できて一番嬉しかったことは、自分が思っていることを素直に話せたことでした。又そのことを若い人達が真心をもつて聞いてくれているということを感じられたことでした。

現在の教育界では真心をもつて自分の考えを述べることができせん。平和教育、同和教育、ジェンダフリー等の偏見に満ちた意見や考え方を受入れることができないで無口になつていく自分の姿がそこにありました。しかし、若い皆さんがそれぞれの場、地域で頑張っておられる姿を知り、私ももう一度真心をもつて子供（生徒）達の将来を考えてみたいと思つています。

退職を二年後に控へて

残された仕事のできる日月を真心こめてやりおおせなむ

## ここに「日本の良心」がある

(福岡県中小企業経営者協会 竹村 優)

一番強く感じたことは、年を召された先生方が涙ながらに話をされるお姿を見て、何と強い感受性をお持ちなのだろうということでした。

最近人の人格には年齢は必ずしも関係しないと思いはじめ、若い人にも尊敬できる所が沢山あり、年配の方にも眉をひそめる行動をする人がいる、人間不信とまで行かないまでも何か人を信用できないところがありました。しかし今回この合宿に参加してこれまで抱いていたことは異なる年配の方への畏怖を強く感じました。暖かさ、厳しさ、そして心の広さです。「日本の良心」ともいべきものが、ここにはまだあると思いました。

またお話をされる先生方は、非常に勉強されていて、あやふやな物言いはされず、科学的に実証されたことを実に分かりやすく教えて頂きました。

これから先生方がおっしゃったことが自分の血や肉になるように勉強していきたいと思えます。

美しく正しく生きるもひととは真心を信じる心とぞ思ふ



「慰霊祭」。台風のため今年は屋内に祭壇がしつらへられ、戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を、参加者一同が心を込めてお慰めした。

この合宿で自分が変わった

(吉村アケティブ産業株 濱田浩司)

合宿を振り返って思うことは私自身の変化です。合宿参加の切っ掛けは、会社に勧められてということでした。そんな気持ちで参加した合宿でしたので、「あゝあ、また何時ものような研修か」、「また何日か仮面をかぶった自分で過ごすのか」という思いでした。そして合宿に来てみると「何だこは?」、「右翼の集まりだ」と思い、とても耐えられないと思いました。そういう訳でいやいやながら過ごしていましたが、二日目以降、ちよつと待てよ、ここは何かが違う、そんな考え方もあるということをうすうす感じ始めるようになりました。今迄私が受けてきた教育の全てが間違っていたとは思いませんが、間違つたまま受けてきた部分も沢山あるのではと思ひ知らされました。そのことに気付けただけでも今迄よりも大きく自分が変化したのだと思ひます。

最後にこの合宿で出会つた仲間、国文研の先生方、そして今回合宿に参加させて頂きつた会社の方々に感謝致します。

有難うございました。

富士のもと先生方の講義聞き気持ちの変化を嬉しく思ふ

物の見方、考へ方を次世代に伝へたい

(元日立製作所勤務 日高廣人)

昨年度に続く二回目の合宿参加でした。講話を拝聴することにより、より広い視野と考へる視点を学ぶことができ、前回同様、否、それ以上に有意義でした。そして合宿の成果は、班別研修で今回初対面の班友達の感想を聞きながら、最近の若年層の考へてゐることを理解する機会を持たつたことに尽きると思ひます。

日頃自分が勉強したこと、思つてゐること等を相手に伝へて理解してもらふためには、相手の理解度を確認しながら段階を踏んで話してゆくことの必要性を強く感じました。自分が学んだ知識、修得した物の見方・考へ方を次の時代の人々に伝へて行くことが自分の使命だと思つてゐますので、考へ方をしっかりと確立させると共に、それを伝へる技術の修得を図りたいと思ひます。今後ともご指導を宜しくお願ひします。

研修にて熱く道説く御姿に学問の姿勢を学びて帰らん

合宿で学びしのみ止まらず学びしことを実践に生かさん

来るたびに新しきことを学びしがまだまだ深し知識の海は

学ぶ、生きる切っ掛けを与えてくれた

(亜細亜学園 千葉繁行)

今回が初めての参加となりました。初めはこの合宿についての先入観から、無事に合宿を終えることができるのだろうかと不安で一杯でした。イメージしていたことは「そんなことも知らない（理解していない）のか」とか、「こんな和歌しか詠めないのか」と言われて精神的に参ってしまふのではないかという危惧を抱いていました。ところが実際には、変な先入観を持ちすぎたなと思いました。他の方の合宿へ接する姿勢には予想を超えたものがありました。それも情報共有の場でした。班別研修では色んな考えを聞け、私も話に参加できましたが、皆で話し合えたという経験が重要であったと思います。この五日間の意見交換から私が今後生きていくための切っ掛けを与えてもらったと思います。家に帰ってからも合宿で学んだことを咀嚼して、物を考えていく際に大いに生かしていくとともに、色んな勉強を積み、成長して行きたいと思います。本当に有難うございました。

雨雲が覆ひし富士の頂きを見たき想ひが雲をどかしぬ

班別討論は実に爽やかだった

(福岡県中小企業経営者協会 右田敏一)

今回の合宿に参加が決まり、全く予備知識のない私は非常

カメラ・レポート 20



四日目の午前。福岡県立太宰府高校教諭・占部賢志先生による講義「「甦る歴史のいのち」」。先生は「皆さんは氷を解かすやうな温気を心に湛へながら、歴史と向き合ったことがあるだろうか」と問題を提起された。

に不安であり、またパンフレットを見た限りでは、少し偏った思想の集まりではないかと複雑な気持ちでした。一日目、二日目と合宿の日程が進むにつれ、今までとは逆に、いかに日本という国を知らなかったか、いかに間違った情報を鵜呑みにしていたかを痛感させられました。そして個々のテーマに沿った班別討論は、とても有意義なものでした。班員は父親と同年の方から社会人になりたての方まで、世代を超えて本音で語りました。それは相手を尊重しつつ、実に爽やかなものでした。この合宿では日頃目の仕事に追われ物事を真剣に考えることができていなかったことを気付かせてくれたと思います。

この合宿を終えるにあたり、私の「頭」「心」が健康になってきたような気がします。これから今の気持ちを忘れずに、この合宿での経験を日常生活に活かして行きたいと思えます。有難うございました。

班友と膝を交へて語らばわが未熟さを思ひ知らざる

### 合宿でまた活力を得た

(みずほコーポレーション銀行 小柳志乃夫)

酒村君の導入講義で教科書では戦前の日本につき「わが国」といふ表現は今も使はれないと聞き驚きました。戦前戦後を通して「わが国」と自然に言へること―そこに問題の勘所があると思ひますし、この点で昭和天皇が「新日本建設の

詔書」冒頭に五箇条の御誓文を掲げられ明治天皇からの連続を明示されたことの重大な意義を思ひました。イデオロギーや様々な観念を排して「わが国」といふごく自然な素直な表現に戻らうとすることは合宿教室の営みそのものでもあると思へます。合宿教室は自分自身を考へさせてくれる場でありますが、それは自己の変革を要求しない。むしろ素直な自分自身を再発見するやうに働きます。それは丁度小林秀雄先生の「よい文学といふものは、君は君自信であたまへと語ってくれるものです」といふ趣旨のお言葉を想起させるものでした。

合宿では様々なことを感じ、考へました。二十一班の班友のこと、本部で頑張る友のこと、合宿に來れなかった友のこと、講義・講話も宝辺・長内・小柳先生揃ひ踏み有難いお話、諏訪田さんの発表等忘れ難いものがあります。

ややくぐもれることの多い最近の精神生活でしたが、息子と共に参加でき、活力を頂きました。有難うございました。

諏訪田さんの発表を聴きて

関西弁の君の話の楽しくて友らとあまたたび高笑ひしつ  
父君をただに信ずるまごころのしのばれていつか涙こみあぐ

一隅を照らせるようになりたい

(新日鉄ソリューションズ 浅井丈司)

私は義務教育の間、「平和」という言葉が絶対視されるのを見て、居心地の悪さを感じ、大学に入ってから自分なりにいろいろな本を読んだりしてきました。社会人になっても、あちこちで占領政策についての話をきくこともあったのですが、国文研の合宿で本当によく研究されたお話が聞けて、大変よかったと思っています。さらに、そうした日本の問題について共に語り合える仲間が得られたことを大変うれしく思います。そうした学びと語り合いの体験をぜひ実践に移したいと思います。自分自身が一隅を照らすことができるように常に自分に問いつづけたいと思っています。「多言を費す事なく、積誠之を蓄へよ」という松陰の言葉を胸に刻んで生きていきたいと思います。合宿を支えて下さった皆様、本当にありがとうございました。

合宿で得たる仲間のありがたし我も一つの灯とならむ



野外炊飯。皆で作った料理は格別。たくさんの食材がどんどん減っていく。

感動をいただき、来た甲斐があつた

(墨田区役所 山崎 栄)

勉強の成果は、すぐにといい訳にはいきませんが、このような見方、考え方もあるのかと、ヒントをいただきありがたいがたく思っています。同室の皆様には、気がきかない私に代つて雑事でいろいろ助けていただき感謝しています。

最後の日に参加者感想発表で私たちの部屋の班長である中島さんのお嬢さんが登壇されました。「今まで親の行動に無関心だったが、父は素晴らしい活動をしていることがわかった。来てよかった。父に敬意を表したいと思いました。」と発言されました。中島班長さんが泣いておられるのを見て、私も本当に最後にこの感動をいただき、来た甲斐があつたなと思いました。中島さん、お嬢さん、諏訪田さん、皆さん、どうもありがとうございます。

勉強の合宿終はりて考へる意見達へど仲良くしたしと

先祖や国を考えるよいきつかけになつた

(吉村アクティブ産業㈱ 濱屋正太郎)

私はこの合宿がどのような内容かもあまり想像のつかないまま初日を迎えてしまい、その内容の濃さ、重さにただ圧倒されるばかりでした。普段から歴史、文化というものに興味をもたない私にとって、この合宿は知らない事、考えもしな

かつた事ばかりでとても新鮮なものに感じられました。特に先祖に感謝する事、愛国心を持つ事など今までの私の中には到底なかつた思いでした。先祖の何千、何万という出会いによって今の私があるのだと教えられては感謝の念を抱かずにはいられません。また自分が生まれ育つた国の事を考えない方がおかしかつたのかもしれない。

私は今回この合宿に参加した事が先祖や国を考えるよいきつかけになつたと思ひ、これを心に留めながら日々を過ごしていこうと思ひます。

晴れわたる空に浮かび富士を見て願ひ叶ひて我はうれしき

古典を深く学んでいきたい

(吉村アクティブ産業㈱ 奥永修平)

私は、このような合宿教室に参加した事がありませんでした。だから、初めのうちは嫌で嫌でたまらなかつた。でも、講義や講話を聞いていくうちに、だんだん楽しくなつてきました。そして、この合宿で学んだことは、国と親を思う心は同じであり、まごころであるという事、さらに日本は信ずるに値する国、古典は先人達の考え、心を理解することができるといふ事です。だから、これからはまごころを持ち、愛国心を持ち、古典を深く学んでいきたいと思ふ。本当にこの合宿ではよい経験が出来ました。

時経ても友との思ひ繋<sup>つ</sup>せるなく今でも浮ぶ楽しき日々を

## 日本と世界、自分を見つめる視点を学んだ

(株)ゼネテック 松江正幸

個人的に学ぶ事も多かったが、「公」の精神と「自他の二境なし」の精神とのつながりが日本古来の文化の中に感じられた事が一番の学びでした。これから自転車で世界見聞に行くことを計画しておりますが、海外へ行った時どのような日本と世界、そして自分を見つめてゆくかの大切な視点を勉強させていただきました。

この合宿を知るに至るきっかけとなった「国際派日本人養成講座」を主催されている布瀬先生と、この合宿教室を支えて下さった皆様方、そして講師の先生方に感謝し、御礼を言いたいと思います。世界を見た後も同世代の人々の苦しみに心を寄せる人間でありたいと思っており、何かできればと思っております。

真実は伝へられねばならぬから伝へることが使命と思ふ

## 自らを表現していく力を養っていきたい

(株)福岡県中小企業経営者協会 中尾雅幸

今回私が合宿教室に参加した動機は、「自らの考えの基軸」づくりを考えるという事でした。正月に転職し、新たな環境で人生の再スタートを切りましたが、周りに流されることが多く自分の考えを持たないことに気づかされ、自らの限



皆で協力して作って、食べて。全部食べ終わったあとの満腹の笑み。

界を感じることもありました。合宿では様々なご指導を賜り、仲間との議論の中で自らの考えの基礎となる点を身につけていく必要性を痛感しました。第一歩として日本の歴史や思想を自分の血肉になる方法で学んでいきたい。娘が近々小学校で歴史を学ぶという事で、昨夜電話で一緒に学ぶことを約束しました。次に、自分の考えをまとめ表現する意味で一日の出来事、感動を短文で綴っていきたいと思っています。時には短歌も詠みながら、自らを表現していく力を養っていきたいと考えています。

合宿で学びし心念じつつ己の生き方磨いていかん

### 諏訪田尚子さんの体験発表は素晴しかった

(中島法律事務所 中島繁樹)

毎年参加するのを私自身の習慣としてゐる合宿教室ではあるが、今回も例年に変はらず劣らず、よい合宿教室であった。現下日本の最重要課題を主題として掲げるのであってみれば、最新の情報と問題意識が必要であるところ、諸講師の講義は、この点において十分満足されてゐた。

諏訪田尚子さんの体験発表は素晴しかった。このやうな体験発表を得て、ほんたうに痛快であった。

朝雲はいっしか去りて大空にしるくそびゆる富士の見えたり

日本は信ずるに足る国である

(戸田建設㈱ 青山直幸)

昨年に引き続き、社会人班の班付となり、二十代から五代まで幅広い年代の班員と語り合ふことができて非常に楽しい合宿であった。班員の方々は、知識の多少の差はあつても、講義の内容や短歌相互批評に真摯に取り組み、各々に大切なものをつかまれたことと思ふ。

今回の合宿は、戦後思想の呪縛から解き放たれて素直な気持で、日本の国や歴史文化、又現実の国際情勢を見てみようといふ点が、一貫してプログラムに流れてをり、参加者にとつても理解し易かつたと思ふ。全体意見感想発表にも、その結果が現れてゐたやうに思ふ。伊藤哲夫先生の「日本は信ずるに足る国である」といふ言葉は、本当に心に響く言葉であった。この言葉を胸に、自分にできることを実行していきたい。

深夜、前庭にて占部兄と五ヶ条の御誓文について語り合ふ  
久々に会ひしみ友は御誓文に込められし思ひ切々と説く  
自らが思ひ定めし問題に寝る間も惜しみ取り組み給ふ

真実を明らかにせんと手を尽し究めたまへる気迫に驚く  
語り終へ空み上ぐれば雲晴れて出でし満月さやけくも見ゆ

## 古典を読むよるこび

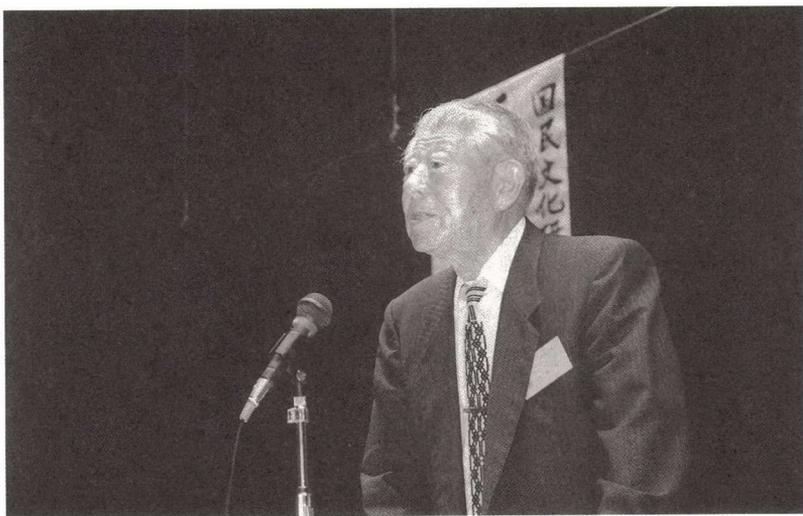
(株)日本教文社 坂本芳明

今回合宿で感銘を受けたことは多々ありますが、特に小柳陽太郎先生の古典輪読導入講義は心踊るものがありました。学生時代以来努めて古典を読もうと努力してきましたが、今ようやく古典を読むことによるこびを感じるようになってきました。それはある程度古典の言葉に慣れる時間が必要だったからだとも思います。改めて吉田松陰を読むつもりです。また宝辺正久先生、長内俊平先生の気迫のこもった御講話に得もいわれぬ感銘を受けました。我々の世代がどんなに頑張っても足元にも及ばない何かが先生方にはみなぎっている。そういう先生方と共に合宿を受けられただけでも幸せなことであつたと思います。

最後に充実した時間を共にすごした班員の方々に感謝いたします。

夜のつどひの出しもの稽古にて

声をあはせ心をあはせ班員と明治天皇御製を詠うたふ



四日目の午後。国民文化研究会常務理事・長内俊平先生による「若き友らへ語りかける言葉」と題する御講話が行なはれた。「親を思ふ心こそ、『公』の始りではないか。身近なところを大事にすることなくして『公』はない。親を思ふ心は同じまごころから発する。『公』と『私』は分かちがたい」と日常の姿勢の大切さを語られた。

心許せる友や師と呼べる方々と出会った

(横浜市中区役所 徳田浩介)

敬愛すべき友らは今年も来られるかと期待を胸に富士へと向かひました。残念ながら、去年と同じ班だった方々は参加できなかったやうですが、今年はまだ心許せる友、師と呼べる方々と出会い、大変有難い合宿でありました。

皆さんの熱意にはいつも驚かされ、負けてたまるかといふ気になるのであります。諸先生方が紹介してくれた二宮翁の云ふ「胸中の温気」を、常に内に秘めるやう努力せねばと思ひます。

台風の過ぎし晴天を仰ぎ思ふ是れぞ明治帝の愛したみ空か

新たに歴史の勉強を

(伊佐ホームズ倶 伊東雄一郎)

それぞれの講義を受け、講師の方々の話を聞いていく内に歴史に対する新たなアプローチの仕方を学ぶことができた。今までも歴史には興味があり、洋の東西を問わずいろいろな書物を読んできたが、あくまでも客観的な視点でしか捉えていなかったように思う。

しかし自分の存在を歴史の中に置いて考えてみると主観的に捉えることで自分の存在意義のようなものを意識できるのではと感じた。

特に宝辺先生の講話はその朴訥とした語り口に感動させて頂いた。

しとしとと降る雨の音聞きながら窓辺に座りて黙念とする

『日の丸』に新たな思い

(榎神木印刷 神木宏恒)

短歌創作や先生方の熱弁を聞くという機会は、日常の生活では体験できない事であり、今思うこの気持を今後生活する上で忘れずに維持するよう心がけたいと思います。

「日の丸」という国旗を今までは「国の旗」としか見ていなかったのですが、白地に赤く浮きあがるものに何か背筋を伸ばして見上げ、先輩達の熱い思いに対して敬意を示さなければならぬ、そんな気持ちになりました。

壇上で熱弁振ふ先生の姿に心熱くうたれり

歴史・文化・短歌の勉強に精進する。

(小金井市議会議員 高木真人)

議員となり三年が経過し、この間、日本文化、日本思想を考える機会が必然的に多くなって来ました。私の政治信条と

する「保守気運の再起」の活動中でこの合宿教室を知り、参加し、結果として、これ程すばらしい研修会を経験できたことを大変嬉しく思いました。苦手な短歌創作もあり、戸惑いもありましたが、今回の合宿で初めて「文化」は政治的イデオロギーを超越した世界であることに気が付きました。

これからは、先人達が築き上げた歴史、文化、特に短歌の勉強に精進しようと決意を新たに致しました。

四十四は人生なかばいかがせむ新たに強く思ひ定めむ

### 自分の子供に伝えたいこと

(福岡コミュニティ放送 廣末純子)

ご講義の中で私が一番興味を持ち心動かされた「戦争」について「日本が戦争したのは悪い事である。」という教育が今なされているという事を聞き、そんな伝え方では、先人の方々がどんな苦勞をされて、今の世があるのか、その感謝の気持ち、いつか途絶えてしまうのではないかと不安になりました。

私は自分が日本人である事を再確認し、改めて何を学び、何を後世に伝えていかなければならないか考えたいと思います。少なくとも自分の子供には「戦争をした日本は悪い」ではなく、「昔の人のお陰で今があるんだよ。戦争には負けたけど今の「平和」を勝ち取ってくれたんだよ。」と教えたいです。



「青年体験発表」で学生時代に「合宿教室」で学んだことを社会人になっても生かしている体験が語られ、学生を打った。(右・諏訪田尚子さん、左・桑木康宏さん)

先人がつらき思ひを乗り越えて我ら平和の今の世にあり

## 「言葉」の深さを知った

(元富士通働 浜田 實)

「幼な児の次第次第に知恵づきて仏に遠くなるぞ悲しき」といふ歌がありますが、子供を育てる過程では様々な苦労、心配が伴なひますが、靖国神社に参拝された小学生の「兵隊さんたちありがたうございます」と云ふ言葉が心に深く沁み入りました。子供たち、若者たちを美しい世界に誘ふことは私達の責務だと思ひます。

又「言葉」の深さをあらためて学ばさせていただきました。  
“温気”といふ言葉にも新鮮な印象を持ちました。

さらに若者に天皇、ご皇室のご存在とその意義をどの様な語り方で伝へるべきか私の大きな課題でもあります。

合宿三日目の早朝グランドより富士を望む

まなかひに映れる赤富士色変へて嵐のあとの静けさ漂ふ  
刻々とすがたを変へる赤富士に時も忘れて見入るわれかも

## 歴史を学ぶといふこと

(新明電材働 飯島隆史)

歴史を学ぶことは決して趣味や知識を得るのではなく、  
人生を豊かにし、真に生きることだと改めて知った思ひです。

小堀桂一郎先生は万葉集から現代まで連続と続く和歌の伝統を説かれ、美しい言葉の背後には美しい思想があり、人生を正しく美しく生きて欲しいと結ばれました。小柳陽太郎先生は吉田松陰の文章を中心に語られ、「杉蔵往け。月白く風清し」の書簡は詩になつてゐると言はれました。これも美しい言葉は美しく正しい人生に通ずるといふことをお示しになつたと思ひます。そして歴史を自分の心に甦へらせるには、古典を熟読精読してゆくことの中にしかないのではないかと思ひました。占部賢志先生も五箇条の御誓文の成立するまでをたどられ、正に歴史を甦へらせて頂いたと思ひました。

早朝桑木康宏君と会ふ

朝まだき友と肩並べ庭中より富士にかかれるにじを眺めぬ

一年振りに長内俊平先生にお会ひして

にこやかに吾が名を呼びて肩たたき「ようきたあ」てふ言葉たまはる

夜の集ひにて

友どちと肩をならべてはにかみて歌唄ふ吾子みるはうれしも

教育の正常化について

(田浦小学校 蓑田誠一)

笑って読んでください。夢のやうな話を書きます。

①自分が熊本県の教育長になったら、夏休み期間中の初任者研修は国文研の合宿に全員参加させたい。

②自分が校長になったら、職員を、PTA役員をやはりこの合宿に参加させたい。

③二人の息子たちにもいつかこの合宿に参加してほしい。

③は必ず実現させたいですね。

極論かも知れないが、この合宿に参加するだけで教育はきつと正常化の方向に向かふと思ふ。識者はいろいろ難しいことを述べるけれど、もっと単純に、そして民族の核なるものを学べばそれでいいと思ふ。

つまらないことを書いてしまいました。先生方、スタッフの皆様、班の皆さんありがとうございました。

いつの日か愛しき家族と集ひたし富士の裾野のこの合宿に



「夜の集ひ」は屋外のキャンプファイヤーを囲みながら、班や大学別に寸劇や歌が披露された。

## 一緒に学びの道を歩む

(住友電装 布瀬雅義)

社会人班短縮コースで短かい期間であったが、班員の方々のひたむきな姿勢とまごころのこもった輪読、対話ができた。それぞれ勉強を続けたいとのことなので、是非国文研会員になつていただき、今後も一緒に学びの道を歩み続けることができたらと思ふ。

台風のために運営にあたられた方々は例年以上に大変だったと思ふが、本当にありがとうございました。

宝辺先生の御講話に

らうらうとまととつとつと霧島の一夜の集ひを師は語りゆく  
ふたたびは会ふ日もあらじとみ戦に征く若人ら集ひたまへり  
かくの如思ひ残してみ命を捨てにし人のみたままつらむ  
みたまらに心安けく見守りていただく国になすよしもがな

## 古典と歴史を学んでいきたい

(トピー工業 林 文也)

紹介者からの「勉強してみなさい」の一言でこの合宿に参加しましたが、何も考えずに過ごしていた私には、己れの勉強不足を多いに反省させられました。

「祖先と子孫との会話」という言葉がありました。これは古典と歴史を学ばなければ出来ないことであると思ひました。

また短歌は非常に困りました。「継続は力なり」ということで少しづつでも勉強していこうと思ひます。

講師の先生方、国文研の皆様、班友の皆様本当にありがとうございました。

初めての合宿過ごし気づきは日本国民である誇りかな

## 先人たちの日本への思いを知りたい

(伊藤会計事務所 長田里香)

今回は三度目の参加でしたが、やはりまだ自分の勉強の足りなさを感じました。合宿で学んだことを帰ってからでも改めて見直し、もつとたくさん自分のものにして行きたいと思ひます。とくに幕末から明治維新のことを深く学び、先人たちの日本への思いを知りたいと思ひます。「日本を信じる、そこからスタートしなければならぬ」と伊藤哲夫先生はおっしゃいましたが、信じる思いを高めていきたいと思ひます。

短歌創作では、心を表現することの難しさを感じました。

班友の小学校教諭の方が持参された子供たちの作った歌にはたいへん感動し、素直でかわいらしくほほえましく感じ、私達人人が長く生きている間にその表現の仕方を忘れてしまったのではないかと思ひました。感受性を高めるために書物を読んでいきたいと思ひます。

三度目の合宿に参加して

今回も我のおろかさ身にしみて来年こそはと思ひて帰る

## 明治維新の人間像

(伊佐ホームズ編 菅谷忠由)

たくさんの先人達の偉業、先輩達の努力に圧倒された三日間でした。講義の中では、小柳先生の吉田松陰を中心とした古典に関するものが特に印象に残り、今後できるだけ時間をとって明治維新の人間像を勉強して行きたいと思います。

又、部屋では年齢の近い仲間の皆様と色々な話しができ、自分自身の世界が広げられた事が大きな収穫となりました。ありがとうございます。

先日行った秩父巡礼の山寺の樹齢六百年のもみじの前に  
遙かきて秩父の山にせみしぐれもみちの大樹苔の波立つ

## 古典を通した先人達との心の交流

(ドコモサービス編 阿部良太)

合宿に参加して痛感したことはこれまで古典に対する理解が足りなかったことである。特に先人達を書き残した書物を通じて心の交流ができていない今の自分を悔しく思っている。日本の古典が嫌いなまま読書を経験した自分の姿勢を改める機会が出来た。今までの狭い価値観に囚われずこれからの人



「夜のつどひ」。合宿最後の夜、心の通ひ合った友等とのこの一時は忘れられないものとなった。

生を広い視野で見つめることをこころがけたい。

いろいろな先生方の講演を伺って印象に残ったことは「学問の力を信じることの大切さ」「美しい言葉には美しい思想が背景にある」「氷のような知識を蓄えるのではなく温気ので水のように知識を溶かして自分の人生に活かす」ことなどです。

拙い感想になってしまいましたが、日常生活に戻ってからもう今回の合宿で得た経験を忘れずに活かしていきたいと思っています。

またいつか国文研の合宿を楽しみたいと切に願ひぬ

## 友との付き合い

(若築建設 池松伸典)

二泊三日の社会人班短縮コースに参加させて頂き、一瞬の出来事であったかのように時間が過ぎた。先生方の御講義を班員としてすべて聞かせて頂いたことは、事務局・指揮班の方々の御苦労を考えるとありがたく思ひます。

昨日宝辺先生が「命を捨てて」の演題で御講話されましたが、先生方の友との付き合いの深さと、緊張した内容の濃い生き方をされた姿に深い感銘をうけた。霧島で友らと小旅行された折の和歌を紹介され、言葉につまられながら話される先生のお声を聞きながら私も熱いものがこみあげてきた。時代は異なってはゐても、自分自身の友との付き合いの浅さを

省みさせられた。思想生活においては乱れきつてゐる現代ではあるが、そこで生きてゐる私達が共にいくらかでも高め合へる様な付き合いを行っていききたいと思ふ。

雨風もおさまり今朝は富士の嶺の山膚しるけく望まれにけり  
ま青なる御空にはえて富士の嶺の色あざやかにしばしながむる

## 第二十六班—社会人—

### 新しい糧を得た

( 幟三井三池製作所 坂本精児)

久しぶりの合宿でした。講義もいづもながらすばらしいものでした。それにも増して、班の人との交流が有り難く、今後の活動の力となります。色々な職業や立場での人達の思ひは、自分の経験と違ひ、自分にとって新しい糧ともなりました。

### 班別輪読

日の本の長き歴史に残されし言の葉たどり皆と読みゆく  
声合わせ読みゆく文の活きくと響きわたりにて心しみるも  
杉蔵往け魂こもりし言の葉に我は背中を押さるることし

今から為さねばならぬこと

(産経新聞社 大内保治)

今回で二度目の参加である。当たり前のことだが一個人としての参加である。早いもので昨年、の江田島からはや一年もたつてしまった。ああ我れはこの一年何を為して来たのか。一年三六五日、寝る時以外は酒を飲み、ただただ駆けずり廻つて来たのだが。七月十七日、健康への過信が祟つて三日間身動きが取れず、只今も罹病中で、同室の方々にはいろいろと迷惑を掛けてしまいました。また来年参加出来る幸運に恵れるかどうか分りませんが、また同じことを繰り返さぬよう、明日から、いや今から為さねばならぬ事を左に列記します。

一、平和祈念のための追悼施設建設の粉碎

一、靖国神社参拝の国民運動の推進と参拝せずの国会議員を落戦させる国民運動を。

一、日朝友好議員連盟の議員の公開と落選させる運動を

一、李登輝台湾前總統の来日の実現を

一、新しい歴史教科書の一割以上の採択(二年後)の実現を

八月十五日を目前に控へて

秋立ちてまだまだ熱き靖国の故国再生あご親拝を

日中友好条約締結後二十五周年につき福田官房長官を始めとして大挙して訪中する国会議員に憤りを覚えて

カメラ・レポート 27



「合宿を顧みて」と題して、この合宿で研修したことを胸に刻んで日本が良くなるやう力を尽してほしいと語られる小田村四郎会長。

国賊が数をたのみてたくらむは中国御用の追悼施設  
国賊が独裁者と手を結び謳ふは朝日共同宣言

ひとりぐらしに灯をともされた

(尾関千枝子)

『順番だから。』と三十三年の間に一度か二度自分が先に死ぬかもと言った通り昨年百日の闘病をした主人は死んだ。犬二匹と残された私は助けてやれなかった不甲斐なさを悔いたが、半年後立ち直った。相統の山を越した後合宿に参加出来た。班長さん始め皆様が男性でそれは良く助けて下さり感謝で一杯だ。二泊三日は想像以上に充実していて二日間台風に見舞はれたが、疲れもなかった。講師の先生のお話はそれぞれ私にはいい意味での「宿題」の出た中身の濃いものだった。ひとりにはいい点もある。じっくりレジュメを読んで勉強しよう。来年こそ二人は女性を誘って参加しよう。台風去り国旗掲げる乙女らを見下ろしるや富士の高嶺は

三十三年振りに合宿教室へ参加して

(公務員 小川揚司)

思えば大学卒業以来、三十三年振りの合宿教室への参加であった。  
あつた。

四半世紀余りを隔てて再会した皆様は清々しい笑顔で迎え

て下さり、懐かしさ嬉しさは一入であった。而して、若い学生諸君とともに、小柳陽太郎先生の「松陰先生」の御講義を拝聴し、朗々と語り給う御声に聴き入るうちに、自分が、学生として参加した往時そのままの情景の中に居ることを覚え、感慨深かった。しかし、三十余年の時の経過もまた現実であった。小田村寅二郎先生は既におはさず、諸先生もお年を召された。

他方、初々しかった後輩諸君が運営の主力となって頑張っておられる姿が眼前にあり、若い学生・青年諸君がひたむきに学ぶ姿も眩しく目の前にあった。「国文研の合宿」が一貫して変わらぬ姿で行き続け、着実に新たな同志を一人また一人と生み出していることに満腔に感じ入り、心の底から嬉しさが込み上げるのを覚えた。

国文研をはじめ心ある国民同胞の真摯な御尽力にもかかわらず、我々の熱望を裏切る方向に我が国は変貌した。荒廃と汚濁は取り返しがつかないほどに深くなってきたるように思われてならない。

この三十余年、私なりに微力を尽くし闘ってきた。そして、八方塞の苦境も体験し辛酸も嘗めた。勿論、これからも闘い続けるものであるが、依って立つ場として国文研が故郷として在ることをあらためて思い、今、故郷に帰り、諸先生、先輩、同志諸兄、ひたむきな若い学生・青年諸君、そして社会人班において初めての出会いに恵まれた皆様との真摯な触れ合いのうちに、清しく温潤な大きな直き心の輪の中に居るこ



「全体感想自由発表」最終日、合宿生活で得た貴重な体験と感想が次々と登壇する参加者より率直に語られた。

とにひたぶるに思いを致している。

三十余年ぶりに合宿に参加し、小柳陽太郎先生の御講義を聴

きて

若人とともに講義に聴き入りぬ四半世紀の時を隔てて

師の君の朗々の語りに胸せまる往時が今によみがえりきて

### 国語の大切さを改めて痛感

(水資源開発公団下久保ダム管理所 村山寿彦)

今回の合宿では特に国語の大切さを改めて痛感致しました。伊藤哲夫先生に大きな影響を与へたのも子どもの頃の一冊の本でありましたし、小柳陽太郎先生の御講義でも命の源にふれる古典輪読の大切さを思ひ起させられてをりましたところに、班別輪読では「久坂生の文を評す」を全員で輪読致しました。全員で一緒に読みながら、私は小学校の国語の時間にクラス全員が声をそろへて読める様になるまで何度も繰り返し読んだことを思ひ出し、「この時のことが私の原点であったのではないか。今の私に大きな影響を与えてくれたのではないか」と思ひました。小堀桂一郎先生の御講義でも「祖国とは国語。国語の中に生命がある。素読が一番。声読が一番」とのお言葉はその国語の大切さを一層実感させられました。吉田松陰の「兄に従って節に死せんと欲する者計幾人ありや」との文を読む時、身の縮む思ひが致しますが、襟を正し、美しい言葉が使へる様に心がけ、己の地、己の身より見を起

こしたいと思ひます。

声そろへ皆で読みあひし輪読に子供の頃の思ひ出さるる学校の国語の時間の音読は今になりてもなつかしきかな

### 太子のお教への実現を目指して

(東急建設 奥富修一)

二泊三日の短縮コースは初めての経験であった。短縮コース用の特別日程が一般日程の中に組み込まれてゐるために、結構過密日程であった。これはこれで致し方ないが、運営側の気配りは十分に行き届いてゐた。感謝申し上げる。

学生とは違つて職業生活に直面してゐる社会人の合宿参加の意義はこれから益々大きくなるやうに思ふ。布瀬さんの講義にもあつた「他と共なる生」―毎日の上司、部下との交流を通じて一人一人の魂に灯を点じていくこと、濁乱の人間世界の実相から目を離すことなく苦闘を厭はぬこと、―この太子のお教への実現を目指して新たな一步を刻んでゆけたらと念願する。

まき燃やし汗をふきつつパーベキューに舌づつみうつひととき  
柴

時流に迎合することなく、着実を旨とすることを確認

(講談社 藤井 貢)

「国民同胞」七月号の長内先生の御文章中に紹介された黒上先生のお手紙に拝されます、切々たる憂国の情に導かれるやうに参加を決意した次第です。いま、長内先生の御講話を拝聴し、太子の御本の第四編の終りの部分を朗々と暗唱され、まずみ姿を拝し、懐かしさとともに国文研の基本となるものを究め、展開してゆくべきときと気づかされます。御製と黒上先生の御本をもっと積極的に次世代に紹介してゆくことに努めることが必要ではないか、と思ひます。

時代はますます便利になり、軽薄さが競はれるといふなかで、国文研は時流に迎合することなく、着実を旨とすることを確認し合ひ、合宿教室のあり方を再度検討すべきと感じました。

運営を担当された折田さん、飯島兄、岡山兄の、大暴風雨の中での大変な健闘、ご苦労さまでした。二泊三日の短縮コースではたうてい不十分であることが判りました。ゆつくりと話すこと、学生の意見を聞くことができません。講義はいづれも素晴らしいものでした。

早朝の富士

激しがる雨風はやみ深緑の木々の彼方に坐せる富士は

ま青なる夏風のなか赤銅の富士のたかねは雄々しくそびゆ



カメラ・レポート 29

閉会式。国民文化研究会副理事長・碓員保博氏よりこの合宿を終へるにあたって無事終了したことの挨拶があった。

## 第二十七班—社会人—

若い人に力をもらった

(拓殖大学日本文化研究所客員教授・亜細亜大学講師 山内健生)

お仕事の都合をつけて次々にかけつける会員諸兄の姿に頭が下がった。合宿教室の運営にたづさはる者の若い参加者に對する責務は重大で慄然たる思ひがする。

かつては「憲法」とか大きな枠組の是正が叫ばれたが、今や日常の身近なところまで、をかきな考へ方が入り込んで來てゐる。長い長い伝統があるから何とかやってみるが、親のすねをかじるやうな事は長くは続かない。

「体験発表の若いお二人」と「全体感想自由発表の発言者」のお話の内容には大変にこちらに力をもらったやうでありがたいことであつた。言葉にその人柄があらはれるといふことをあらためて目の当りにできた。

八月十日夕方 地区別懇談後広場に出で

雲晴れて富士の雄姿の見えくれば思はずわれらオーツと声あぐいにしへの人らも仰ぎし霊峯と思へば神山いやまし尊し  
富士の雄姿背にしてカメラのシャッターを我に頼める親子づれあり

全体感想自由発表

壇上で語る言の葉だがへども明日への思ひ述ぶるはうれし

本当に勉強になりましたと語りゆく若者の面輪は輝きて見ゆ  
ありがたうございましたとこれからの学びの決意を語る若きら

ただ核心に迫ることの大切さ

(富山県立富山工業高校 教諭 岸本 弘)

十年以上も参加してゐなかつた自分になつかしい方々から次々と声をかけていただき有難く思つてゐる。わづか一泊二日の参加でしたが、やはりこの合宿はすごいと思ひました。短い合宿の流れではありましたが、全体感想発表に至る流れの中で、確かな合宿の営みを感じました。

直接には長内先生のご講義しかお聞き出来ませんでしたが余計なものを取り除いてただ核心に迫ることの大切さをしみじみと思ひました。ありがたうございました。

また今林兄とはそれほどゆつくりと話す時間もなかつたのですが、これからの自分達の歩みに何か楽しいものを見つけれさうな予感がありました。

富士の嶺を真近に仰ぐ山裾になつかしき人らと語るうれしさ  
若きらの語りを聞きつつ確かなる学びの道をしみじみと思ふ  
努め居る友らと共に我もまた学びの道につながりてゆかむ

## 神話教育が必要だ

(元新潟工科大学教授・國學院大學 文 三年 大岡 弘)

占部先生が御講義の中で指摘された次の事が印象に残った。「明治維新以前は、公家を中心となり皇室祭祀を行って来たが、維新以後は改革が行はれ、天皇が中心になって執り行はれるやうになった。」

「日本の政教関係に関する研究」に詳しく出てゐるとのことなので、是非読んでみたい。また、占部先生の日本史の授業では、古事記に記載された神話の世界も学ばせてゐるといふ。「皇室祭祀」が歴代天皇方の重要なお務めであるならば、我が国の国民は少くとも記紀の神話の内容を好意的に受け止める義務があるのではないか。それには教育の場で記紀の神話が教へられる必要がある。

政府が神話や神道に距離を置かうとする或ひは無視しようとする態度はをかしいと思ふ。

長き間おほし雲の消え失せて富士のいただき拝すこの朝

古典が力を与えてくれる

(伊佐ホームズ嬢 伊佐 裕)

今年の合宿では古典の力と学問の取組み方についてしっかりと気づかされました。

小柳先生の御講義は松陰先生との深く共鳴感からの力



「閉会式」で学生を代表して挨拶する上智大学文学部4年・青砥敬子さん

で私に響いて参りました。「：其れ唯だ積誠之を動かし然る後動くあるのみ」の文章はリズム感と云いしみ入る文章でした。小堀先生は古典の力こそ我々に力を与えて呉れるもので有り、「永い生命を保つて来たものに対しては、よしと判定して良いのではないか」とのお話しは、仕事柄建築物にも同様と思うところで、美しい文章に触れることは人生の内容を美しくするものだ」とのお話しに私も日下心定め取組んで参り度いと思ひます。

小柳先生の御講義をお聞きして

松陰がよみがへる如語らるる師の御姿に聞き入る我は

いづこまでたどりてゆかむ師の教へ年ふることと尊さぞ知りぬ

## 良い文の素読を

(小田原市立矢作小学校 校長 岩越豊雄)

少数の学生の参加ではあったが感想発表を聞き充実した合宿であったことを改めて知った。素直な純心な学生の心に接することができ大変嬉しく思った。

小堀先生の「ことばの家に住んでゐる」「正しい心は正しい美しいことばからである」といふお話、自らのこれからの勉強と子ども達に何を教へ導いていったらよいかの大きな示唆を頂いた。良い文を素読させる実践を是非学校にも取り入れ次代を担ふ子ども達の教育に生かしたい。

朝風に雲はらはれて神さびし富士の頂き現はれにけり

## 友らの想ひに力づけられた

(防衛庁 鏝 信弘)

全体感想発表で学生たちが、感動した想ひを述べる姿にこの合宿の必要性を益々痛感した。特に祖父の想ひが分かりお墓に詣でてありがたうと言ひたいと語った姿に自然に涙が出た。また、合宿運営委員長の折田兄が、声を詰まらせながら自分たちを育てて下さった先生方が亡くなる時、「日本を頼む」と言はれたと語った時、先生方が思ひ浮かび心が揺さぶられた。このやうな深い感動を大事にして、今後も日常の中で、学び続け友らと心を通はせあつて生きていきたい。

富士見ゆ

雲間より洩る日は明かく小雨降る空に大きく虹架かりたり

雲かかり富士は見えねど木々の緑揺らし吹き来る風の涼しき

雲動き今現はれし富士の嶺はわづかに雪の白く残れり

## 親を思ふ心の強い人が国を思ふ心も強い

(朝ハウ・インターナショナル 桑木康宏)

「親を思ふ心も、国を思ふ心も、同じ真心から出てゐる。」だから、「親を思ふ心の強い人が国を思ふ心も強い。」、長内先生のこのお言葉を大切に持つて帰り、あたためたいと思ひます。

今回は、合宿の体験発表といふ素晴らしいチャンスを下さ

いまして誠にありがとうございました。

発表前の夕食時 小野先生と

せまりくる発表のときに高鳴れる心ほぐさんと話かけ下さる

食事終へ外に出ると真向ひのすみわたる空に映える富士山

富士山を小野先生と見あげたるうちに心もすみわたるきぬ

### 素晴らしい学びと出会い

(船橋市議会 中村 実)

学ぶと言うこと、そして人と出会うと言うことは、ありふれているようでありながら、質の高さを求めると堪だ難しい。二回目の参加となった今回も素晴らしい学びと出会いの機会に恵まれた。今回もその機会を与えて下さった国文研の皆様そして御殿場に集った参加者の人々に感謝申し上げます。わが国のことを知りそして先祖に繋がりが、これからを生きてゆく者として、多くを今回も学んだ。そしてわが国は信じるに値する国であることを改めて実感した。そして、弱体化した我国を感じる場面は数多あり、期待に遠い人々も多いことも事実であり、自分自身も他人のことを言うことも心苦しい。しかしながら知ること、学ぶことの切っ掛けさえあれば自身自身に変化を遂げる力量は皆が備えていると思う。限られた期間ではあったが、来る前と後の自分を誰かに見て貰いたい。清々し夜風富士より吹き来たる清けき月に集へる我らに

### 真心で接すること

(憐モノリス 庭本秀一郎)

社会人になってからの四年半は、まさに仕事を通して自分の「真心」と向き合ふことの連続でした。塾講師として子供達と接する中で、彼らが「先生が真心で話してゐるか否かをかぎ分ける」といふ事を痛切に感じ、自分の生き方が如何に真心を出すことを恐れる生き方であったかを反省させられてきました。

長内先生が話された「親を思ふ心と公を思ふ心は同じである」といふ事は、私の仕事を通じての子供との関わり方を考へる上で重要な気付きを与へて頂いたと思ひます。自分と子供との関わりがうまくいかない時があるのは、自分が家族に對して真心で接しきれてゐなかつたからであることを私は五年目にしてやうやく気づきかけておりましたが、先生のお話を拝してその確信をより強くしました。そして今後の家族関係を考へる指針として「努力と工夫」が必要であるといふお話にも心に沁み入りました。

四日目からの参加でしたが、今年も沢山のエネルギーを頂いて名古屋に戻れます。学生の時に立てた志である「自己共に真心を育み合ふ」ことをライフワークにしたいとの思ひは間違つてゐないことを改めて感じました。

台風一過の合宿地にて

嵐過ぎて抜くるがごとく青々と広がる空を仰ぎ見るかな

富士山

夕闇に青く染まりし富士の嶺を仰ぎ見をれば心澄みゆく

七年ぶりに久保田先生と再会す

我を認めやをら近寄り来られたる師は言はれけりやせたらむやと

苦勞してをらむやといふ師の笑みは在りし日とつゆかはらじと思

ふ

あたたかき師の眼差しも声色も身に沁み入りてただただうれし

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



## 短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつてしまつてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごごころを呼び覚まし、人のまごごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする

試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午前、久保田真氏（熊本県立宇土高校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きがはしはしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに青山直幸氏（戸田建設㈱開発課長）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

# 短歌詠草（しきしまのみち） 合宿第一回目の創作作品

（参加学生の第二回目之作）  
（品は感想文の末尾に収録）

## 第一班

九州工業大学情報工三 大津 健志  
箱根神社に向かふバスの中より

深緑の木立ちの中に浮かび出し鳥居の朱のあざやかに映ゆ

明星大学文聴講生 久田 広光  
雨を受け青紫のアザササのしっとりぬれたる花びらうるはし

亜細亜大学国際関係四 大橋 広和  
雨降りしきる箱根神社にて

両脇に千年杉のそびえたつ参道の先の鳥居を仰ぐ

学習院大学法三 黒田 康裕  
合宿教室に参加して

時忘れ思ひのままに語りあふこの良き出会ひをただ感謝すも

早稲田大学法三 濱崎 史嘉  
白々と霧たちこめて山々のかすめる姿美しと見つ

大阪芸術大学芸術二 大西 ひろし  
人の世は哀しきものと知るときに人の人たる

道を知るべし

ひとときの楽しさに心奪はれて世の哀しみを忘れまじと思ふ

## 第二班

九州工業大学情報工三 多賀 祐之介  
親思ふ心を常に忘れじと曾我兄弟の上を偲びて

筑波大学医五 石川 稚俊  
思ふこと思ふがままに詠まんとすれど未熟なるかなまとまらざりき

早稲田大学法三 高木 雅史  
降りしきる雨の最中にそそり立つ杉の木立ちに心かこむ

北海道医療大学歯二 三枝 和明  
北海道医療大学歯二 三枝 和明  
雨の中参拝したれど帰り道にいつしか雨のやみて口惜し

佐賀大学経済二 川畑 孝志  
箱根神社に参拝して

悠々と立ちそびえたる杉の木その大きさに驚きにけり

大木が一本でなく何本も吾を迎へることを感ずる

吉田茂の「戦争は負けても外交で勝った歴史はある」といふ言葉に触れて  
戦争に負けてもなほ日の本を守り戦ふ先人を知りたり

明星大学日本文化二 櫻井 実  
朝早く友と眺むれば大いなる富士の高嶺のそそり立つ見ゆ

大いなる富士の御山に抱かれて心安らぐ思ひす我は

愛知県立松蔭高校卒 赤城 元氣  
バス道の彼方にそびえ立つ箱根山天下の険といふ歌さながらにして

バスで行けど険しき箱根を先人の徒歩で登りし苦劳いかに

## 第三班

早稲田大学法三 穴井 宏明  
レクリエーションのバスの外にて

降りしきる雨にて地面は足の踏む場所のなき

ほど水の溜まりぬ

傘持たぬ我を気づかひ我が友は靴濡らしつつ  
傘さして待つ

中央大学商四 仲里 賢宏

箱根神社の石段を登りし時これまでの勉

強を思ひ返して

石段を先ゆく友らの背をみて我も負けじと段  
を踏みしむ

東京理科大学理工三 小堀 知輝

日の本の閉ざされ来にし美しきまことの歴史  
今にして知る

明治大学理工二 小柳 雄平

伊藤哲夫先生の御講義を拜聴して

心こめ声朗々と語りたまふ講師の御声に心奪  
はる

箱根神社にて

さんさんと降りける雨に逆らひてすつくと立  
ちたる杉ぞ逞し

亜細亜大学短期二 佐野 宜志  
机を囲んだ班別研修で

正坐してお話聴かんと挑むれどしびれ増しき  
て耐へがたくなりぬ

上越教育大学大学院一 寺澤 卓

空さして高く伸びゆく大杉の姿学びて真すぐ  
に生きたし

九州工業大学情報工一 瀬木 裕太郎

富士の嶺は雲に覆はれて今日も見えず早く晴  
れかしと我は願ふも

#### 第四班

筑波大学大学院二 寺澤 知之

美しきしらべと言葉を散りばめた文部省唱歌  
に昔を偲ぶ

みともらと声を合はせて歌ふうちこみ上げし  
ものに咽つたり

東北大学大学院五 大岡 一亘

今のモラルを大人が示してほしいとふ生徒の  
期待に応へ得ず我は

名古屋商科大学経営三 河合 高明

雨の中眼界暗き森をぬけ仙石原の広ごりて見  
ゆる

拓殖大学短期二 白井 勇太

学びあふ友の言葉に我が無力気づかされたる  
心地よきかな

明星大学日本文化二 高橋 佑太

我思ひ歌に詠まむと胸に浮かぶ言葉を探す心  
細くも

西南学院大学文一 多久善彦

合宿地に到着して

久方の故郷に似し山や木に囲まれあるを見る  
は嬉しき

#### 第五班

熊本県立宇土高校教諭 久保田 真

「天下の険」と歌はれて来し箱根路をバスに  
ゆられて登りゆきたり

並び立つ杉の大木ながめつつ「昼猶闇き」往  
時を思ふ

武士の足駄がけたる箱根路と友と歌ひつつ登  
るは楽しも

防衛大学校人間文化四 鶴川 優一郎

未だ見ぬ同輩らと富士に集まりて共に語らむ  
心ゆくまで

大正大学人間四 末次 信宏

箱根神社にて

参道のかたへにたてる杉並木を仰ぎて見れば  
霧のかかれり

かかりたる霧のにはかに杉の木の間にかくる  
る神のあるごと

九州大学農四 森 永賢 司  
箱根神社にて

並び立つ大き神木を仰ぎつつ階登りてみ社参る

苔のむす杉の木立の太くありて神代ながらのいのちと思はるる

九州工業大学情報工四 結川 高志  
箱根神社にて

神杉の根本に広がる古苔は雨の雫に濡れていきづく

東京大学法三 武田 有朋  
合宿導入講義後の班別研修の折りに

講義にて抱きし問ひを出し合ひて新たな友らと語り始める

心を入れし行ひを語る友の声は我が心根に浸み入りにけり

我が思ひを語りかければひたぶるに聞き入り給ふ友ぞ貴し

語り終へて班員の顔を見渡せば古き友らの如き心地す

箱根神社に詣でし折りに

けぶり立つ杉の木立を従へし朱のみやしろはけざやかにあり

朱の門をくぐると雨の不意に止みて神います如き心地するなり

みやしろの前に友らと並び立ち共に手を打ち  
拝みたりけり

○ みやしろに詣でし後に班員と宝物殿を訪れに  
けり

古ほけし宝物殿の館内に貴き宝のあまたあり  
けり

ふと見れば静御前の横笛に不意に出会ひて我  
驚きぬ

白磁にて竹を模したる横笛は眺むるほどに竹  
のご見ゆ

明星大学日本文化二 宮地 順造  
ともどちの讀みの深さに驚きて我が未熟さを  
思ひ知るなり

あいにくの雨で中止の富士登山事前の訓練役  
に立たざり

熊本学園大学社会福祉一 折田 安正  
新しき友との語らひ重ねれば隠れし素顔しだ  
いに見ゆるかな

集ひたる友の話に耳を向け言はんとすること  
聞き逃がさじとす

## 第六班

龍谷大学経営四 菊池 太一郎

自宅で文明の力を享受した便利でだらけた生活を抜け出し京都から富士まで自転車で旅を始める折

なまぬるき部屋を飛び出しいざ富士へ向かふ  
旅路のベダルの軽さ

亜細亜大学国際関係四 野村 亮  
班別研修にて

気がつけけりおのが言葉のうぬぼれに友と交はり語らふ中で

うぬぼるるおのが言葉を省みる機会えらるる  
友あればこそ

皇學館大学文三 田米 巧  
箱根神社にて

天をつく社の神杉見上ぐればおのづと心晴れしに気付く

京都大学総合人間二 中原 有輝  
晴れかしたと空に向かひて念ずるも箱根の路は  
雨に打たれり

久留米高等学校教諭 小林 国平  
富士山頂にて御来光を拝す

ほの赤き雲の海原眺めつつやがて現はる御来光を待つ

おごそかにまぶしき光満ち満ちて手を合はせ  
れば涙のつたふ

國學院大学神道学専攻科 大和哲司  
レクレーシヨンの折に

富士もよし社もよしと思ふゆゑ瀧なす雨も苦  
にはならざり

佐賀大学理工五片岡正憲  
酒村先生のご講義を聞きて

日の本を守る大人らの御心は検閲により知ら  
されざるなり

箱根に向かふバスの中にて

検閲さる「我は海の子」七番まで皆で歌ふこ  
との何とうれしき

九州工業大学情報工一林祥人

合宿のレクレーシヨンの折に  
バスの中集ひし友と歌ひたる「夏の思ひ出」  
忘れざりけり

## 第十一班

明治大学短期大学経一内海美咲  
小柳先生のご講義を聴いて

先生の話に心奮ひ立ち時を忘れて聞き入りに  
けり

国のため命をかけし先人の生きざまに触れ力

の沸さくる

青山学院大学文三吉澤洋子

雨の中友と並びしお社で感謝しにけり今日の  
出会ひを

東京の喧騒離れ御殿場の澄んだ空気に心安ま  
る

東北女子短期大学保育二吉田あすか  
参り路の石段を打つ雨音の耳に入れば心静ま  
る

東北女子短期大学生活二松永尚子  
散策のバスの中から景色を眺めて

窓つたふ雨のしづくを越して見る流れゆく  
木々の美しきかな

○  
木々が揺れ奏でる音色に雨音も重なり響きい  
と心地よし

東北女子大学家政二坂下千佳子

雲間から一条の光差し込みて草木照らせば心  
晴れゆく

早稲田大学教育二小林由香利

散策の折りバスの中で皆で唱歌を歌ひて  
古き良き日本の歌を友どちと歌へば心の晴れ  
やかなる

友どちと心のうちを語り合ふこのひとときを  
大切にしたいし

## 第十二班

東北女子短期大学生活二出町麻乃

湯あがり涼みてをればひぐらしの音の聞こ  
えて心に染みる

獨協大学外国語二高橋由佳  
降りしきる雨の中より飛び入りぬ目にあざや  
かな鳥居の朱よ

東北女子大学家政二加藤亜紀  
うす黒い雲におははれし富士を見て明日は晴  
れよと願ひをかける

東北女子短期大学保育二伊藤仁美  
とまどひと不安を胸に抱きつつ我が師信じて  
我は来たれり

友どちと共に語らひゆくうちに不安和らぎ心  
晴れゆく

東京女子大学文理三中島明子  
伊藤先生の御講義を聞きて

先人の祖国を想ふ精神を我が心にも強く刻ま  
ん

上智大学文四青砥敬子  
しつとりと雨に濡れたる境内の杉の並木に心  
落ち着く

第十三班

東北女子大学家政二 鈴木綾子  
かいまみし富士の姿に魅せられて明日の登山  
に心弾ます

登山当日

目が覚めて雨風音が聞こえてきて弾む心もたち  
まち失ふ

東北女子大学家政二 加賀彩織  
富士登山中止となれど箱根へと行けると聞き  
て心はづめり

窓をうつつ雨のしづくの流れおちて景色も見え  
ずくやしき思ひす

東北女子短期大学生活二 文口幸世  
雨の箱根神社にて

冷たさを不思議と感じぬ雨の中友と傘さし歩  
く嬉しさ

福岡大学科目等履修生 小野実里  
箱根神社の御神木を見し折

まつられし太しく高くそびえたりますぐにの  
びし御神木はも

九州工業大学情報工四 木城理恵

世代こえともうたひき古き歌声音のいろも  
さまざまにして

第二十一班

熊本市立長嶺中学校教諭 渡邊 五十二  
雨の中赤き鳥居は芦ノ湖を守るがごとくま  
ぐに立てり

濃き緑おほひかくせし草花をふたたび見たし  
箱根湿原

天高く立ちほだかりし矢たて杉強く生きよと  
語らんとする

(株)福岡県中小企業経営者協会

右田 敏一

乙女の悲話を聞きて車窓の外眺むればあぢさ  
みの花道のべに咲く

(株)福岡県中小企業経営者協会

竹村 優

班別研修にて日高さんを見て  
班友を見つめたまへるまなざしに思ひ出した  
る祖父の面影

○

国思ひ日本の未来を背負はうと熱き魂富士に  
集へり

牧 美和子

英雄がかつてまうでしみやしろの杉の木立は  
千歳経にけり

吉村アクティブ産業(株) 濱田浩司  
雨の中を宮に詣でて見上ぐれば杉の緑に心や  
すらぐ

(株)亜細亜学園 千葉 繁行

世代こえとも歌ひし歌声は一つになりてバ  
スに響けり

元日立製作所勤務 日高 廣人

箱根権現にて

千年余り樹齢重ねし杉木立うっさうとしてか  
みさびてあり

武将らに厚き信仰集めたる箱根神社の朱塗り  
の社殿

(株)みずほコーポレート銀行

小柳 志乃夫

箱根神社にて

み社にまうづる石のきざはしにせまりて巨き  
杉ならびたつ

空高くのびたる巨き杉の木のごずゑは雨にう  
すがすみせる

父母と妻子とともに新年にまうでしその日思  
ひ出さるる

おじいちゃんの話聞かむと長男のこの合宿に  
来たるうれしき

わが友の御子らとともに長男のいこへる見ゆ  
る何語るらむ

## 第二十二班

中島法律事務所 中島繁樹

伊藤哲夫先生の遊就館の話聞きて

兵士への感謝記せし小学生ありしと聞きて涙  
こみあぐ

墨田区役所 山崎 栄

あらし吹く龍神社まうでなば帰路は不思議  
に薄日さしきぬ

㈱日本教文社 坂本 芳明

箱根神社参拜

降りしきる雨に傘さし宮参る石段のぼるそは  
ぬれながら

石段をのぼりて見ればたれこめる雲にとどく

か宮の大杉

古ゆ生ひ立ちきたる大杉につつまれぬたる

箱根路の宮

㈱福岡県中小企業経営者協会

中尾 雅 幸

新妻の箱根八里の歌声を思ひ出しけり芦ノ湖  
見れば

富士の嶺近づけぬ雨うらめしき友との記憶を

思ひ出したり

天空にそびえ立ちたる杉木立ち雨にぬれつつ

時を数へる

雨の糸岩の上へと降りそそぎ受けとめたるは  
こけの息吹か

吉村アクティブ産業㈱ 浜屋 正太郎

富士の嶺の姿夢見て来たれども雲のかかりて  
いと恨めしき

㈱ゼネテック 松江 正 幸

歌舞伎絵の色豊かにて鮮やかな絵柄の様に心  
ひかるる

新日鉄ソリユーションズ㈱

浅井 丈 司

雨の降る箱根の山の杉の木のますぐに高さ姿  
をあふぐ

吉村アクティブ産業㈱ 奥 永 修 平

見上ぐれば杉の大木立ち並び神々しさに圧倒  
さるる

## 第二十四班

新明電材㈱ 飯島 隆 史

伊藤哲夫先生のご講義を聴きて

日本を祖国を愛せと先生はからだをふるはせ  
叫びたまひぬ

特攻の熱き思ひを述べらるる師の御言葉に吾  
も涙す

小金井市議会議員 高木 真人  
小柳陽太郎先生のご講義を聞きて

古かりし世田谷線の音づれに第二の松陰いぞ  
馳せりけり

○

四十四は人生半ばいかげむ後生何をおもん  
ばかるなり

荒れ狂ふ左翼の渦中富士のもと日本復活願ふ  
は我ら

国会の戦国時代の様相に源平武士よ今甦へれ

伊佐ホームズ㈱ 伊東 雄一郎

あどけなく手足広げて寝る我が子何時に笑ひ  
何時に泣く

ばたばたと手足動かし泣く我が子何を考へ何  
思ふのか

㈱神木印刷 神木 宏 恒

富士山のふもとに集ひし友たちと己が生き方  
語りつくさん

横浜市中区役所 徳田 浩 介

降りしきる雨にしたたる仙石原広がる緑のそ  
のあざやかさ

福岡コミュニティ放送㈱ 廣末 純 子

国の為涙しつつも我を捨つるその姿こそいと  
すばらしき

## 第二十五班

若築建設(株)東京支店 池 松 伸 典

小柳先生の御講義を聴きて

松陰の御文を読まるる師の君の高き調べに聴き入りにけり

師の君の高き調べに導びかれ松陰の姿のよみがへりきぬ

トピー工業(株)東京営業所 林 文 也  
班友の歌つくるさま横目にし刻の迫りてひた

にあせりぬ

田浦町立田浦小学校教諭 蓑 田 誠 一

鹿兒島で拉致された増元ルミ子さんの姉、

平野フミ子さんにお会ひし国文研合宿参

加者へのビデオメッセージをお願ひした

折に

「妹は必ず生きてをります」とカメラに向か

ひ姉は語れり

拉致されし我が同朋(ばいばい)の一日も早い帰国を我も

祈りぬ

湯亭こんや常務取締役 青 砥 潤 子

富士のその皆集まれる笑顔みて同胞の繋が

ありがたきかな

伊佐ホームズ(株) 菅 谷 忠 由

父母(ちちはは)に我が転職を伝ふべく久方ぶりに実家(いへ)に

帰りぬ

香りたつねぎジャガイモのみそ汁に母の真心

伝はりてきぬ

ドコモサービス(株)多摩料金センター

阿 部 良 太

松陰先生の生き方に触れて

獄中の囚人に教へし松陰の姿浮かびて学びゆ

きたし

学問に積誠尽くし人心を変へしことには我は

驚く

伊藤典夫会計事務所 長 田 里 香

伊藤先生のご講義を聞きて

幼き日志士の生きざま読み知りて日本への愛

を養ひませしとふ

## 第二十六班

東急建設(株) 奥 富 修 一

久しぶりに友が合宿参加することを知り

て

北国に転動してより幾年か離れし友と逢へる

日近し

北国に離れ住む友と久々に逢へると思へば心

踊りぬ

忙しき勤めを押しして参加せる友を待つなり明

日の正午に

忙しき勤めなるらむ一日でも逢ひたき思ひに

今は待ちなむ

小柳陽太郎先生の御講義を拜聴して

松陰のみ文読み上ぐ師の君のみ声のはりに引

き込まれゆく

松陰は「教育者」にあらず血の通ふますらを

のこと語り給ふも

肉身の情愛いだき囚人に語りかけたる松陰な

りき

主婦 尾 関 千 枝 子

台風の雨止みてこの山路青く霧煙る中小鳥啼

きたり

台風に鞆濡らして部屋に入る犬を預けて出で

来しわれは

水資源開発公団 村 山 寿 彦

箱根神社の「矢立の杉」にて

その昔武士たちが戦勝の祈願を込めて射たる

大杉

聳え立つ大杉のこずえ見えあぐれば矢弾(やたま)の如く

雨滴飛びくる

防衛庁 小 川 揚 司

二十数年ぶりに合宿に参加し小柳先生の

御講義を聴きて

若人とともに講義に聴き入りぬ四半世紀の時

をへだてて

師の君の御声なつかしく胸せまる往時が今に  
よみがへるがごと

産経新聞社 大内 保 治

甲子園のマウンドに立ってゐるい、きな  
姿の小泉首相をみて腹立ちて憶ひ出す。

一月、突然の靖国神社参拝で、記者に  
「八月十五日」は参拝しますかと問はれ  
て「年に一度だ」と強弁す。

国おもふ心なくして幾星霜年に一度の「お義  
理参拝」

国おもふ心うせにしあかしなり首相は年に一  
度の靖国参拝

八月十五日を目前に控へて

秋たちてまだまだ熱き靖国の祖国再生あ、ご  
親拝

九月十七日のピョンヤン宣言を聞きて驚

き

国賊が独裁者と手を結び謳ふは日朝共同宣言

榎三井三池製作所 坂 本 精 児

久し振りの合宿の受付にて

事務局へあいさつに行けばなつかしき友は笑  
顔で迎へてくれたり

忙しく立振り回る友どちの姿を見れば身のひ  
きしまる

三十年振りの再会なれどあいさつを済ませば  
すぐにうちとけて行く

榎講談社 藤 井 貢

小田急新宿駅にて青砥兄ご夫妻に会ふ

呼びかけの声に應へて目をやれば懐しき友の  
姿ありけり

合宿に夫人とともに参加せる友のえまひの何  
とよろしも

湯亭こんや 青 砥 誠 一

合宿教室に参加せし時に

次々となつかしき顔に会ふ度声をかけては  
あいさつかはす

突然の長女との出会ひうれしくて時を忘れて  
しばし語らふ

小柳陽太郎先生の御講義を拝聴して

幕末の動乱の時生命をかけて御国を守るは尊  
し

獄中にありつづけてもなほ御国を想ふ御心有  
難きかな

師の君の真剣に語る言の葉に師弟の交りは斯  
くあれかしと

## 第二十七班

伊佐ホームズ榎社長 伊 佐 裕

伊藤先生より特攻基地知覧のお話しをお  
聞きして

もののが最後の時を過ごしたる兵舎を訪ね  
思ひ偲はむ

熊本製粉榎住宅事業本部 吉 村 浩 之

久保田兄の「短歌導入講義」を聞き折  
演壇ゆ語り始めし友の顔仰ぎて見ればたのも  
しきかな

生徒への指導の喜び手を振りて身振りも交へ  
て語りたるかな

今日のため準備を重ねし君なれば思ひのたけ  
の届けとぞ祈る

防衛庁 鏗 信 弘

合宿地に着きて

遅れ来し我をば待ちてゐてくれし友らと共に  
夕餉をとりぬ

逝きませしみ友のことを語りつつつながる縁  
ありがたく思ふ

榎ラック 高 橋 俊 太 郎  
久々にまみえし後輩らの笑顔にぞ学び続ける  
たのもしさ思ふ

## 国民文化研究会

国民文化研究会理事長 上 村 和 男

箱根へのリクリエーション

台風のきざしなりしかふりしきる雨ふる中に  
バスに乗りけり

生ひ茂る杉の木立にみ社はおごそかに見ゆ登  
りてゆけば

芦の湖は雨にけぶりて富士の峯もかくれて見  
えず淋しかりけり

ふる雨をはらすがごとく歌声の車中にひびき  
さやかなりけり

### (二回目の作品)

朝あけに赤く染みたる富士峰に虹もかゝりて  
厳かに見ゆ

たちまちに虹は消えさりいただけは雲におほ  
はれ雨のふり来る

朝毎に峰を仰ぎつ集ふ日の少なくなりぬ雨多  
ければ

諏訪田兄のお嬢さんの語るを聞きて

天性と思ひぬほどに間をとりて思ひの丈を語  
る楽しく

幾年も会ふことなくもまなかひに友との語ら  
ひ聞く心地する

元拓殖大学総長 小田村 四郎

### 箱根神社参拜

時ならぬ雨うらめしも山路ゆくバスにしぶき  
の降りそそぎつつ

咲き並ぶあぢさゐは色あせたれど雨に濡るる  
を美しと見つ

箱根山の頂に立つみやしろに詣でて過ぎし歴  
史を偲びぬ

降り続きし雨は小止みてみやしろの樹々の緑  
のあざやかに見ゆ

### (二回目の作品)

吹き荒れし嵐は過ぎて頂もあざやかに映ゆ富  
士の夕影

若人と共に過せし四泊の集ひもここに終らん  
とする

共に学び共に語りし若きらの輝くまなこ忘れ  
じと思ふ

箱宝辺商店取締役会長 宝 辺 正 久  
箱根神社

時に強く雨ふる山路へめぐりて箱根神社に車

着きけり  
神社の中の石段のほりゆけばみ社の上にさ霧

立つ見ゆ  
高々と神社の立つこの岡に三代將軍詣らせる

かも

天平の御代よりここに鎮まります建国の神を  
ろがみまつる

神富士の裾のうみべの森深く鎮まる宮居いつ  
かしきかな

### (二回目の作品)

#### 第四日晴天

雨雲の晴れて窓より朝日子の射す目覚めなり  
声あげて起きぬ

思へば二夜台風暴雨の中にして合宿進みけり  
神の守りに

箱根神社の大杉雨に濡れそぼち靈氣にこもれ  
りバスの旅さへ

室内にをぎまつりける慰靈祭もみな雨の中と  
どこほりなし

富士を蔽ふ雲あつけれどこの朝け裾野晴れた  
り青空も見ゆ

芝草の地に立ち仰ぐ日のみ旗ひるがへり空澄  
みわたりけり

夕まけてまたく晴れたる富士のねのま上こが  
ねの雲光りをり

元九州造形短期大学教授 小 柳 陽太郎  
見上ぐればきざはし高き神しんげん殿の気はあふれた

り箱根権現  
きざはしをのほりゆくまに雨足のさらにはげ

しくしぶきあげつつ

とこしへのいのちと仰ぐみ社のかたへに立て  
る大き神杉  
箱根路を越えしいくたの祖先みなやらの祈りこもり  
けむこれのみ社  
うちしぶく雨のさ中を合宿の友らと詣でしこ  
の日忘れじ

(二回目)の作品

宝辺正久兄講話「命をすてて」

霧島の遠きかの日の思ひ出を友語りゆくに胸  
のせまりく  
出陣の日を前にして生涯のおもひかたむけ旅  
行きし日よ

紅葉美しき枝をかざしてつひの別れと歌うた  
ひつ、一夜すごしき  
先逝きし友の面々の次々に浮びては消ゆ今の  
うつつを

友がよみし民歌かなしもあふれくるおもひに  
耐へてよみしこの歌  
かくも深き友情ありやなき友の残せしみうた  
胸うちやまず

今にしてしみぐ思ふ

心厚き友情の輪のひろごりて国のいのちもよ  
みがへるべし

新日本製鐵囑託 今 林 賢 郁

やみしかと思へばいつしかかきくもりまたも

降りくるけふの雨かな  
降る雨にさ霧も立ちて富士がねは姿かくしぬ  
暗きみ空に  
友ら今箱根めざして出で立ちぬ昼餉のひとと  
き空よ晴れてよ

大日本園芸 磯 貝 保 博

久保田兄の和歌導入講義を聞きて

教へ子の歌詠みゆけば生きくと生徒と語る  
姿浮かびく  
まめやかに富士の姿を歌ひたる歌の一つと我  
が拙歌をひく  
若かりし君らと共に歌作り書を読みしこと思  
ひ出されて

壇上ゆあかるき声で歌作る喜び語る姿たのも  
し

(二回目)の作品

最後の感想発表を聞きて

こみあぐる思ひのために涙しつ語る姿の尊  
くみゆる

元電源開発環境立地本部本部長代理

長 内 俊 平

妻への便りに添へて(八月六日)

妻めを守らせと祖先のみたまにいのりつ、吾家わが  
の方に掌てを合すかな(病がちの妻を家に残し  
て出で立ちければ)

合宿の講話はなうまくゆく様にといふ吾子に見送  
られつ、発ちてきにしか  
ふるさとの浦わ風ぎみていさりする舟あまた  
みゆわがゆく車窓に  
語るべきこと心のうちにくりかへしとなふる  
うちに都につきぬ

宿につきて  
ここの地ははや秋立つらしも夕されば虫のな  
く音のかそかにもして

受付にて(八月七日)

わが友のみ子らみ孫ら受付にゐならぶみれば  
涙ぐましも

(工藤) 千代子さんのみ子と知れば自おづか  
ら寄りて頭あたまのなでらるるかな  
飯島君のみ娘このにこにこ笑みれば初めての  
会ひとは思はれずして

山根君のみ子と思へばいやさらになしきこ  
ころのわきてくるかな

志乃夫君のみ子にも初めて会ひにけり少しは  
にかむが父上に似て  
四郎さんのみ孫は身体健くして頭をなでやる  
もはばかれにける

かにかくにみ子らみ孫らの顔みればたへせぬ  
道とかしこまられる

八月八日

膝を痛み富士登山に同行出来ざりければ  
み友らはいづちゆくらむ裾野さへ雨脚はげし  
くなりきしころを

歌よまむと指を折りつ、雨しぶく山路ゆくら  
む若きら思はゆ

高校生の歌には心うたれしと告げて発ちゆき  
し友のかげみゆ

残りたるわれもみ友ら偲びつ、歌を詠まむと  
筆をとるなり

(二回目の作品)

次々に壇にのぼりてせつせつと語る若きらに  
涙とどまらず

吾が語りし拙き話にもこたへくる、この若き  
らに掌を合すかな

吾が語るにあらず我にのりうつりて語らせ給  
ひし神いますなり

み友らと枕ならべてすぐしたるこれの幾夜は  
永久のかたみぞ

元法政大学人事部長 香川 亮 二  
若き友を送る

—モンゴルの親なき子らの施設に

ゆくといふ—

モンゴルの子らにしあはせ運ぶ旅人さきくあ  
りませつ、がなくあれ

青き大地蒼き大空モンゴルの子らよすくよか

に育ちてゆかな

(二回目の作品)

合宿半ばにして退出す

富士山をえ見ずして今集ひなかなばふりかへり  
つ、坂を下りゆく

班の友ら語らひなかなば富士のさとに心残し  
つ、坂を下りぬ

昭和の御代平成の御代聖王のみ教へあふぎ  
つ、つとめきたりし

この集ひ絶ゆることなかれたやすなと念じ  
つ、今合宿を去る

吹きあれし颱風一過夏の日のもどれど雲のま  
だ多くして

元高千穂商科大学教授 名越 二荒之助  
八十過ぎて思ふはひとつ悠遠の日の本の道い  
かに伝ふる

九州ゆ来りし学生次々に聲かけられて力湧き  
くも

はじめての友にはあれどはらからのあかしか  
語れば心なごむも

(二回目の作品)

慰霊祭に臨みて

シベリアに拉致され死にし六万の魂甦る慰霊  
のさ庭に

万哭の恨みを呑みてシベリアの荒野をさ迷ふ

人々忘れじ

不当なるえん罪により処刑されし千余の人々  
の悲運忘れじ

戦犯の汚名をうらまず死によりてアジアの安  
定祈りし人々

国体の護持を祈りて自決せし六百余人の悲願  
忘れじ

海山に屍さらせし英霊は天がけるなり護国を  
祈りつ

榎中央塩ビ製作所会長 星 野 貢  
明け方の部屋の床のべにカッコウと鳴く鳥の  
声を耳に目覺ぬ

旨寝する友らをあとに独り起きて富士に眞向  
ふ広場に出て来ぬ

一、二、三日御殿場の野の集ひ場に仰き眺む  
る富士のみ山を

昭和三音楽大学教授 國 武 忠 彦  
伊藤先生のお話を拝聴して

沖繩へ飛びたつ兵の話をきき胸ぬちつまる思  
ひするなり

兵たちの若きいのちを思ふとき今の己れの生  
の問はるる

元アサヒ飲料榎 坂 東 一 男  
伊藤哲夫先生の御講義をききて

両手挙げ体動かし論さるる師の御言葉は熱を

帯びたり

日本を誉めたたへずにいられませうかと気道あふるる講義素晴らし

(二回目の作品)

諏訪田嬢の発表を聞きて

飄々と父の勧めをほかしたりと伝ふる話に友を思ひつ

共々に阿蘇の噴煙見上げつつ語りし友を想ひ出したり

綽柴田 柴 田 悌 輔

(二回目の作品)

小柳先生のご講義を聴きて

樹々ゆるる嵐のなかを若きらが走りし姿にしばし見入りつ

学ぶさに不精になりなき吾をおもひ思はず頬を強くうちけり

教室のそとにも響ける師の声に慕はしき思ひの胸につきあぐ

八十歳を超えにし恩師のみ姿は講壇の上に小さく見えをり

まへよりも静かになりし語り口に思はず知れずに引きこまれゆく

はげしかるひとの生きざま語りゆく声音は静かに迫る如くに

窓をうつ雨はしとどに流れゆく吾れの怠惰を

流すごとくに

拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内 健 生

箱根神社参拝

いかばかり長きとしつき経にけらむ杉の木立の神さびて見ゆ

降る雨にゆらぐことなく山はだに根をはり立てる木々を見上ぐる

激しくも降りくる雨にゆるぐなく根をはり立てる木々の厳し

遙かにも齋いづき初めにしいにしへを思ひやるなり杉の木立ちに

小田原市立矢作小学校長 岩 越 豊 雄  
朗々と古典読まるる師の君のみ声のひびき気

迫こもれり  
四十年前学生のころ我が聞きしみ声のひびき

変らぬ今も  
綽竹中工務店 稲 津 利比古

やうやくに辿り着きたる玄関に笑顔で出迎ふ友ありがたし

(二回目の作品)

若き友らの所感発表を聞きて

打ちつけに語る言葉はおのがじし思ひこもりて心打たれぬ

力強き言の葉をもて語りたる立てし誓ひを忘

れざらなむ

綽リョーイン 島 津 正 數

草青き箱根の道辺に咲く鹿の子りりしく立ちて雨に向ひし

草青き箱根の道辺に咲く鹿の子激しき雨にもりりしくぞ立つ

一人して昼食とりつる友どちに我が班長は声をかけをり

友どもも十三班に加はりて写真の話を楽しく語れり

(二回目の作品)

班友と別れるにあたりて

できうればまた来年の合宿も共に過して学び合ひたし

宝辺正久先生の御講義「命を捨てて」を聞きて

時として声詰まらせて話さるる友への思ひの深き偲ばる

今もなほ友への情深かりて熱き思ひのひたに偲ばる

福岡県立稲築志耕館高校 小 野 吉 宣

箱根神社参拝の折に

指揮班の心くばりの傘をさし雨降りしきるやしろに参る

雨風のあらきにたへて年を経し千歳ちとせの杉を仰

ぎみるかな

深く根を下しますらむ悠久の生命支ふる太き根元よ

実朝の祈りの声もききますか「八大龍王雨やめ給へ」

みやしろゆ眺むる富士山最高と友は語るも今日は見えざり

(二回目の作品)

八月十日夕食前に富士を拝む

友どちの指さす方の富士山は夕日まばゆく正視出来ざり

夕食後に再び拝む

夕焼の雲より上に悠遠の姿のみゆる神々しきなり

かの夏は石段の上に腰下ろし関先生とともに眺めき

口開き言葉に出せば感動が消えてゆくがにただ眺めけり

元新潟工科大学教授 大岡 弘

箱根神社に詣でて

畏くもににぎの尊祭らるる朱塗りのみ社雨中に仰ぐ

言依さし受けてぞ天ゆ降り給ふににぎの尊伴引き連れて

言依さしのまに御使命果たさるる今上陛下は今も現に

古へゆ絶ゆることなくみ祭祀の続く御国は尊かりけり

(社)国民文化研究会事務局長

山口 秀範

ご講義のあと、伊藤哲夫先生にお願ひして学生班を巡る

「訪ひませり」と告ぐれば直ちに座布団を空けて迎ふる若き友らは

今の世を招きし因は何処ぞと若きらの問ひ次ぎく止まず

世の様を見る眼開かれ生きくと語らふ姿頼もしきかな

学ぶ意欲高まりし今読むべき書を示し給へと乞ふ学徒あり

「自からに確信を抱けそのために深く学べ」と励まし給ふ

確と得てそれを周りに伝ふるが乱れしみ国を正す道ぞと

お若き日の学びの軌跡をうちつけに語り給へば皆聴き入りぬ

若きらに寄するみ思ひ溢れ出で師のみ言葉も熱を帯びゆく

次の代を託すべき人らここにありて我らが集ひ疎かならじ

(二回目の作品)

全体発表で登壇せる学生に寄す

シベリアに抑留せられしおちいさまを等閑にせしまふ今日まで過ぐすと

み国護る戦に立たれし功しにこの合宿で気付かされしと

合宿ゆ戻りてお盆のお参りに疾く行きたいと思ひ吐露する

誇らしきおちいさま眠る墓前にて心をこめて謝恩捧げむと

若き友の直き告白聴くままに我らが胸も俄にこみ上ぐ

老先生も肩震はせて泣きたまふ今は亡き勇士を偲びまつりて

元富士通㈱ 濱田 實

伊藤哲夫先生のご講義を聴きて根本に立ち還れよと宣ひし師の御言葉に続きゆきたし

幼な児のすなほな言葉に感動す人のこころもかくぞありたし

小柳陽太郎先生のご講義を聴きて

「積誠」てふ言葉の重さ胸に浸む合宿初日の心定むる

神奈川県立小田原城内高校教諭

原 川 猛 雄

伊藤先生のご講義を聞きて

力こめあふるる思ひ語らるる師のお言葉の胸  
に迫りく

戸田建設幟 青山直幸

箱根神社を参拝して

降りしきる雨に濡れ立つ杉の木の深き緑の目  
にしみるなり

うっさうと繁れる杉の森の中に朱き鳥居のあ  
ざやかに見ゆ

古ゆ箱根の山を護りこし御神祭りし宮に詣で

ぬ

御社の御前に立ちて柏手を打てば心の鎮ま  
りてゆく

九州大学 高瀬正仁

語り終へて「短歌はどう」と尋ねれば友はは  
にかみて「まだ」と答へり

熊本市役所 折田豊生

富士山

雨雲の切れ間に見ゆる神山の姿あふげば心晴  
れゆく

いにしへゆあまたの人の仰ぎきし霊峰我也見  
るにあかなく

絶え間なく流るる雲に見え隠れする峰のかげ

神さびてあり

去年の夏亡き師の君が超然と眺めいまししみ  
姿忘れず

伊藤哲夫先生の御講義をお聴きして

国を思ふ思ひあふるるみことばに涙あふれて  
とどめあへずも

ふるさとの知覧の町の特攻のものがたり聞け  
ばつのるかなしと

占領にあひたるときの宰相の孤高の意気を偲  
ばざらめや

皇国の再建をその胸に秘め尽くしし人の心気  
高き

若き日に思ひ定めしまごころの揺るぎしこと  
はなしとのたまふ

(二回目の作品)

酒村大兄に

艱難の道を自ら選ばれしそのころぞしを我  
は尊ぶ

数ならぬ身にはあれどもひととせを君をささ  
へてゆかむとぞ思ふ

関西熱化学幟 天本和馬

合宿受付準備

合宿の時は来りてもろもろの受付け準備にと  
りかかりたり

机並べ受付け準備をいそげども友に手渡す書

類は遅れたり

つぎつぎと人ら集ふも書類いまだならず気持  
ちのあせりくるかな

名前札を奪ふごとくにもらひ受け受け付け場  
所に急ぎ戻れり

名前札を急ぎ並べむと山なりに受付台に移す  
ももどかし

受付けで待つ友らすなはち手を出して名札準  
備はたちまちに成る

(二回目の作品)

諏訪田さんの発表を聞きて

一度ならず聞きし話もこの度は力こもりて心  
おどりぬ

準備の折全力をつくしをりてふメールをもら  
ひその意気込みはひとかなならず

壇上で緊張したるか言葉つまり原稿めくるこ  
とも多かり

言葉つまり話途切れしその折は思はず声をか  
けたき心地す

山口県立下松高校教諭 竇 遼 矢太郎

短歌導入講義をききて

生徒らに歌をすすむる君が思ひかなひて成り  
たる歌集たふとし

バトンつぐ対抗リレーに各隊の応援の嵐目に  
見ゆるがに

優勝のならずてくやし涙ながす乙女のうたを  
校長よみたり

そがうたをききて泣きたる親のありあつき子  
の思ひ胸にあふれて

(二回目の作品)

日の暮れて稜線しるく浮かび来ぬ薄墨の富士  
神さびて見ゆ

羽後信用金庫 須田 清文

いただきは雲につつまれかくれたる富士のす  
そ野をあふぎ見るかな

夜になりて風はしづまり富士の峯の黒きみ姿  
あらはれにけり

いただきをめぐして歩く人かげか光は動く夜  
の富士の峯

雲去りてま近にあふぐ夜の富士はおだやかに  
してあたたかに見ゆ

台風のせまりくるとも心知る友らと語らふつ  
どひうれしも

(二回目の作品)

小柳陽太郎先生のご講義をおききして  
師の声のよみゆく文のしらべとともによみが  
へりくる文のいのちは

ひと文字にこまれるいのち師の君のはなしと  
ともに息ふきかへす

関先生のことを思ひ出して

み足老えおそき歩みにあはせつつ話せしこと  
の思ひ出さるる

小田村寅二郎先生を思ひ出して

追体験の重要性を語らるる御姿御声の思ひ出  
さるる

防衛庁 山根 清

富士合宿二日目

ふりしきる雨ながめつつ箱根山ゆきし友らの  
ことをし思へり

予定せし富士双子山登頂も雨にさへられ中止  
となりけり

台風のニュース見るたび未だ来ぬ友はいかに  
と思はるるなり

不安なる思ひはあれどもどもに練りし合宿  
つとめざらめや

(二回目の作品)

大富士の裾野にみとら集ひせし合宿教室無  
事に終はりぬ

雲かかる富士を後へにみとらは記念写真を  
かたみにとりぬぬ

日本の歴史につらなる学問の道たやさじとひ  
たに思ふも

㈱IHIエアロスペース 内海 勝彦

初めて記録係を命ぜられて

会場に着きて言はれぬ今回の私の役目は記録

係と

機械には全く疎き我なれば誤るまじと手元震  
へる

熱こもる先生方のお話をゆめ漏らすまじと  
テープを廻す

ステージの陰にしをれば会場の吾子の姿の見  
えず口惜し

先生のみ声に込もる真心のしかと届けと音量  
合はす

(二回目の作品)

合宿最終日の朝

やうやくに雨上がりたる大空にそびえて立て  
る富士を仰ぎぬ

いにしへゆ霊峰富士と仰がれし大きな姿眼  
前にあり

合宿に連れ来し吾子ら己もく見つめをりた  
りそのみ姿を

それぞれに思ひ出深き日とならんここに過せ  
し四泊五日は

福岡県立香住丘高校勤務 酒村 聰一郎

久保田真兄の短歌導入講義を聞き  
身ぶり手ぶり交へて語りぬ生徒らの勇みて躍  
る演舞の様を

折々に生徒らよみたる歌草を編みて贈れば皆  
喜びぬとふ

体育祭の歌よみゆけば生徒らの喜び悔やしざ  
素直に伝はる

生徒らの喜び我の喜びとし君つとめます教へ  
の場ばで

(二回目の作品)

慰霊祭にて

国の為命ささげしものふのみ魂祭らむこれ  
の齋いひ場で

み戦に征きにし友の遺しおくみ歌しるべに生  
きこられしか君は

同信の友の遺せしみ歌をぞ偲びまつりぬ祭の  
にはで

憫アルバック 北 浜 道

箱根神社にて

権現をまつるお宮は雨にけぶり杉の巨木に囲  
まれしづもる

夜の富士

雲晴れて小暗き空を背景に黒き富士の嶺目の  
前に見ゆ

(二回目の作品)

合宿最終日班員と昼食をとりつつ話をせ  
し折

昨日は夜を徹して班員は歌の批評をなせしと  
聞きけり

班室に朝訪ねしに机囲み折田君もありしを思

ひ出しつ

夜をとほしかたみに心かたむけつ語らふ様の

思はるかも

我も又そのまどゐにて友の言葉聞きたかりし

と切に思ひぬ

心ぬちくさぐさ語り給ひつらむ友安かれと祈  
らるるなり

日章工業㈱ 藤 新 成 信

八月八日、合宿地への移動の途中、我が  
社の製品が建材試験センターにて行はれ

た六十分耐久試験に合格せりとこの報を受  
けて詠める

飛行機を降りたちし時ベル鳴りて「合格せ  
し」と部長もの声あり

力合はせ一年あまり備へたる皆の苦労はむく  
はれしかな

留守守る人らの御陰を謝しまつりはるる来  
つる御殿場の地へ

神奈川県教育長 大日方 学

「合宿を顧みて」の折田運営委員長のお  
話しをお聞きして

師の君の「日本を頼むぞ」とふ御言葉を涙な  
がらに語られ給ふも

国を思ふ御心のありて日常の御言葉はあり振  
る舞ひはありとふ

国を思ふ深き心に先輩もまた重き務めを果た  
され給ふか

小諸市役所 中 澤 栄 二

久々にま見えし友と握手すれば胸ぬち熱く心  
踊りぬ

箱根神社にて

台風たいふうの雨にうたれる杉木立色も姿も変えぬ  
雄々しさ

(二回目の作品)

指揮班として合宿に参加して

ともどちと力あはせてこなしたるこの合宿も  
終りけるかな

アダマンド工業㈱ 眞 田 博 之

指揮班の仕事と共にしつ、  
難しとも友らと意見を出し合へば心の晴れて  
事も進みし

我せむと回りに頼らず外に行く君の姿に我も  
と思ふも

何くれと皆を思ひて世話さるる友の御心あり  
がたきかな

(二回目の作品)

指揮班で仕事をこなしつつ

我せむと雨降る外に行く君の姿を見れば我も  
と思ひし

一人では難しと思ふ事柄も先輩居ませせば心強

しも

み友らと腹立つ事をも語り合ひ笑ひとばせば  
楽しかりけり

年若き我らの指示に動かるる先輩拝せば辱な  
きかな

師の君(宝辺正久先生)のお若き往時を偲び  
給ふ太くも澄みし御声聞こえぬ

参加者全員で富士山を背にして写真を撮  
りし後

乙女らの看板立ててつきくと写真をうつす  
姿愛しき

雨多き日々に学びし乙女らのはしゃぐ姿に救  
はれしかな

福岡南公共職業安定所 古川 広治  
ふじの山“大きなこゑでうたひゆけばこ  
ろはれゆく心地するかな

合宿地へ向ふ車中にて  
運営委員のつとめほとんどはたさずにこの日

むかふる心苦しき  
さはあれどこにいたればあとほただ己がつ  
とめを果すあるのみ

(二回目の作品)

四日目の朝はじめて富士山を拝して

富士の山の歌詞うかびきてうたひけり富士の  
頂はじめて拝して

志門塾講師 三林 浩行

長内先生の御講義をお聴きして

父母を思ふ努めの大切さ教へられけり師のこ  
とばかり

東北女子短期大学講師 土井 郁磨  
全体感想発表のときに

涙流し声つもらせて語る言葉を涙なくして聴  
くことは出来ず

(福岡山商事 岡山 英一  
指揮班の友ら

はるばると来し友どちは長旅の疲れも見せず  
笑みうかべたる

あいさつの言葉もそこそそ友どちは着替へて  
作業に取りかかりたり

ざぶとんの束をかつきし友どちは足どり軽く  
頼もしく見ゆ

(社)国民文化研究会事務局 茅野 輝章  
合宿の初日、準備に駆けつけくれし濱田

雄一兄に  
わづかなる休みをさきて運営を手伝ひくれし  
友有難き

忙しく久しく会はざりし君なれどこの一日に  
駆けつけくれし

一日の参加なれども潑刺と働きくれし君にあ  
りける

夜のふけて最終電車で帰らんと本部出ゆく君  
を見送る

それぞれに生きゆく道は違へども語りゆきな  
む思ひ思ひを

アサヒ飲料(株) 澤部 和道  
合宿へ向ふ折に

合宿で出会ひし友や先輩に今年も会へると気  
持ち高なる

名簿を開いた折に  
次々と連りてある友達の名前を見ては気持ち  
はやれり

日本青年協議会 別府 正智  
短歌導入講義の折に高校生の歌をよみて

素直なる心そがままうたひあぐ歌のしらべの  
美しきかな

箱根神社にて  
並み立てる杉の木の下ゆく道の真すぐのび  
て拝殿の見ゆ

指揮班起床係古川さん  
「おはやう」と響きわたりぬ班室に朝の目覚  
めのさはやかにして

企画デザイン工房 banup  
諏訪田 尚子

雨上がり霧たちのぼる芦ノ湖の山の辺の家か  
すかに見ゆる

小堀先生に質問された男子学生の意見を  
ききて

声つまる男子学生の思ひきき我も思はず涙あ  
ふるる

日本青年協議会 中 園 まどか  
班別討論の折

素直なる心の内を友どちと語り合ひたること  
ぞ嬉しき

## 事務局

(独)国民文化研究会事務局 有 本 和香子  
夕やみに富士山を観て

夕やみに登る人らの灯り乗せ浮びあがれる姿  
しうるはし

薄墨に濃き墨重ねて描いたよな茫たる稜にき  
らめく灯

人の持つ小さき灯がこれほどに強く輝くさま  
に見とれる

(二回目の作品)

足元から行先見えねど続く道踏み出す勇気を  
与へられしかな

真心に耳を澄まして進みなば親の心に還ると  
信ずる

私立開成高校 内 海 雄太郎

短歌とは短い歌と書きながらなどかくばかり  
長く感ずるか

都立戸山高校 小 柳 元

雨降りて道に一筋川走る流れは強まり他音が  
き消す

学習院高等科 小田村 康 正  
標高が高いと酸素うすいのになぜか空気がい  
つもよりうまし

(二回目の作品)

五日間思ひ出深い体験談今日ねた時間一時間  
なり

私立開智中学校 飯 島 正 子

バスの中うとうとして気付いたらたくさん  
の雨とたくさんさんの自然

(二回目の作品)

五日間バイト仲間と働いて得たもの決して忘  
れはずまい

私立開智中学校 濱 口 梨 紗

雨の中バスに乗りいて山の道しとしとびつ  
ちやしとびつちやんなり

(二回目の作品)

五日間一生懸命働いてやつともらへるアルバ  
イト代

目黒区立東山中学校 山 根 誠 一

アルバイト大人の苦勞が身にしてみるアルバイ  
トのつかれたまるいっぽう

(二回目の作品)

友達と朝になるまで語り合ふかういふ機会と  
出会へたうれしき

藤沢市立大清水中学校 工 藤 晋太郎  
幼なき日ゆ母語りたまふ合宿に我十三才で参  
加を果たす

(二回目の作品)

まごころの人らと出逢ひて忘れぬ思ひ出と  
なりし富士の集ひよ

## 合宿地に寄せられたお歌

佐賀市 末 次 祐 司

合宿地を遙かに偲びて  
思はざる病に伏して合宿の友らに逢へず悔  
しかりけり

亡き友のみあと受け継ぎ心こめみ祭奉仕へ  
んと誓ひしものを(関正臣先生)

指折りて神去りし友を偲びつ、靈安かれと  
たゞ祈るなり

かりこもの乱れし世にも一すぢのみ祖の道を  
守りゆかなむ

## あとがき

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでしょうか。静岡県「富士のさと 国立中央青年の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎようとしてをります。このたびやうやくこの「感想文集」を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、神経を使ひ、時間のかかる作業ではありますが、皆さんの生々しい言葉にお一人お一人の感動を偲ぶことのできる心楽しい一時です。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

### (一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

### (二) 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌をつくりましたが、第一回のは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」ところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しいお仕事、学業の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いた

だきました磯貝保博、鏗信弘、山根清、茅野輝章、澤部和道の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この「感想文集」の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は國武利貴弥さんにお世話になりました。いろいろな方々のご努力によって出来上がった「感想文集」を、ご精読下さるやう切願します。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と思ひます。三ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に願つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたくお願ひ申し上げます。

(北浜 道記)

〔資料〕

第四十八回 “合宿教室（富士）” 感想文集

非売品

平成十五年十月三十日発行

編集兼発行者

社団法人 国民文化研究会

理事長 上村和男

編集委員 北浜道・原川猛雄

池松伸典・小柳志乃夫

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号  
〒一五〇一〇〇一―

電話 〇三―五四六八―六三三〇  
FAX 〇三―五四六八―一四七〇

